千曲時報

毎月一回十五日發行（定價一部五錢一年郵税共五十錢）

編輯兼發行人　香山清和
發行所　千曲會
印刷所　長野縣上田市原町　中澤印刷所

母校創立廿五周年祝賀行事日程

十月十三日（雨天順延）

陸上記念運動會　（校庭）　自午前八時　至午後五時

十月廿一日（第一日）

創立二十五周年記念式
千曲會主催　記念式
祝宴　（講堂）　自午前十時　至正午

常田、房山兩獅子踊　（校庭）　自正午　至午後一時

針塚校長壽像除幕式　（玄關前）　自午後一時　至午後二時半

市協賛會招待懇親夜會　（市公會堂）　自午後三時半　至午後七時

提灯行列　自午後五時　至午後九時

十月廿二日（第二日）

繊維工業學會特別講演會　（講堂）　自午前九時　至正午

商工會議所招待晝餐會　（千曲會館）　自正午　至午後一時

日本蠶絲學會特別講演會　（講堂）　自午後一時　至午後五時

講師慰勞會及懇親會　（市公會堂）　自午後五時　至午後八時

十月廿三日（第三日）

物故職員卒業生及傭人追悼會　（講堂）　自午前九時　至午前十一時

千曲會大會並代議員會　（講堂）　自午前十時　至午後五時

校内一般參觀

校友會主催音樂會　（市公會堂）　自午後五時半　至午後十時

十月廿四日（第四日）

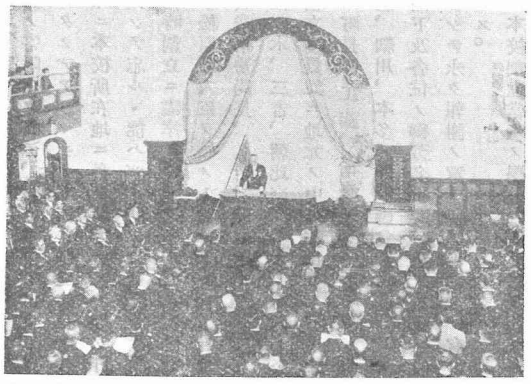
校内一般參觀　自午前九時　至午後三時

十月廿五日（第五日）

校内一般參觀　自午前九時　至午後三時

十月廿六日

全校慰勞會　（校庭）　自午前十一時　至正午



創立廿五周年記念式

祝賀第一日の記念式は文部大臣代理山樹參與官、農林大臣代理芳賀横濱生絲檢査所長、九州帝大滿田農學部長、全國實業專門學校長、全國蠶絲業團體長、縣知事、本縣選出貴衆兩議員、全國蠶絲紡織業者、地元有力者等六百名同窓會員四百名計一千名の來賓を迎へ十月廿一日午前十時より母校講堂に於て行はれた。先づ學生、職員、來賓、校旗、校長の順に入場石倉式場係長司會の下に君が代合唱に次で別項の如き校長式辭、文部農林大臣代理祝辭、長野縣知事、九州帝大農學部長、全國直轄學校長總代松本高等學校長東京高等蠶絲學校長、繊維工業學會理事長、日本中央蠶絲會副會長、大日本蠶絲會頭代理、全國養蠶業組合聯合會長代理、全國製絲業組合聯合會長代理、全國産業組合製絲組合聯合會長代理、實業家代表郡是製絲會社長代理、上田市長、卒業生代表田口敏夫氏の祝辭、九州帝大總長外五百余通の祝電披露あり次いで千曲會主催の記念式に移り野口理事司會の下に林理事より校長に壽像及記念會館献納の別項の如き目錄贈呈次いで針塚校長以下十五年以上勤續者卅九氏の氏名を野口理事讀上げ蒲生理事長より代表針塚校長に別記記念品目錄を贈呈、校長代表として謝辭を述べ一同校歌を合唱して光輝ある記念式を閉ぢ早川招待係長より直ちに祝宴會場に於て粗餐を呈する旨述べて校旗を先頭に校長、來賓、職員、學生の順に退場した。時に正に午前十二時であつた。（寫眞は記念式……校長式辭朗讀中）

記念式次第

一、國歌合唱　一同起立
一、校長式辭
一、文部及農林大臣祝辭
一、來賓祝辭
一、卒業生總代祝辭
一、祝電披露
一、壽像及記念會館献納
一、勤續者記念品贈呈
一、勤續者代表謝辭

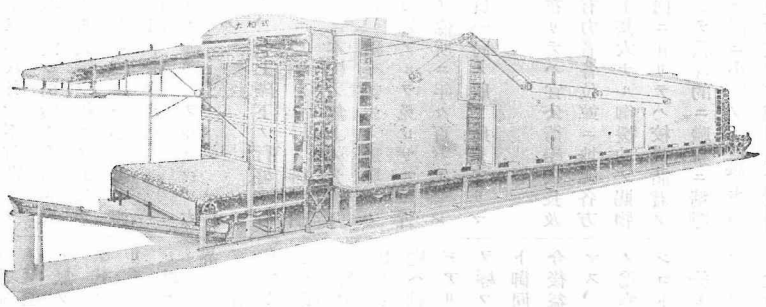
開式
一、學生入場
一、職員入場
一、來賓入場
一、校旗、校長入場

閉式
一、校旗、校長退場
一、來賓退場
一、職員退場
一、學生退場

式後祝宴會場ニ於テ粗餐ヲ呈ス

山本三六郎著
化學純絹絲の工業的完成
蠶絲科學研究會編
伊太利蠶絲絹業の衰退原因と其現況
菅原勇治著
改正蠶絲業法規要論
¥2.30　¥1.50　¥0.30
市田上縣野長
發行所　蠶絲科學研究會
〔振替長野6413番〕

現代乾繭機界ノ王座
大和式自動輸送乾繭機
二五九六年代表型
【各種贈型錄呈】



營業課目
特許大和式自動輸送乾燥機
特許大和式自動人絹乾燥機
特許帶川三光式乾燥裝置
特許やまとホイロ
特許サンケー式濾過淨水裝置
特許サンケー式廢湯吸熱器
特許サンケー式高壓ポンプ
特許サンケー式トラップ

製作發賣元
株式會社
大和三光商會
東京京橋區京橋三丁目二番地
電話京橋(56)五三二〇番

學校長式辭

本日　本校創立二十五周年記念式ヲ擧行スルニ當リ文部大臣閣下代理ヲ始メ朝野貴賓各位ガ業務ヲ羨繰リ遠路ヲ厭ハズ態々本式典ニ御賁臨ヲ辱フセルハ洵ニ本校ノ光榮トシテ深ク感謝スル所デアリマス。猶本校卒業生ガ母校ヲ思フノ一念ヨリ全國ヨリ此ノ式ニ參列セル者五百名ヲ突破セルハ校員一同ノ大ニ欣快トスル所デアリマス。

抑々　本校創立ノ動機ハ明治三十七八年ノ戰役後國民經濟ノ振興ヲ期スルニハ蠶絲業ノ發達ヲ圖ルヲ最モ適切ナリトシ斯業ノ人材ヲ養成スル高等教育機關ノ設置ヲ急務ナリト認メタルニ胚胎スルモノデアリマシテ、栽桑養蠶製絲紡織及色染等蠶絲業ニ關スル一切ノ事項ヲ相互關聯的ニ研究シ得ル一貫的設備ノ下ニ學生ヲ教育スルヲ理想ト爲シ、明治四十年時ノ文部大臣牧野子爵閣下序上ノ案ヲ具シテ四十一年度ノ豫算ニ其ノ經費ヲ計上シ、第二十四議會ノ協賛ヲ經四十二年九月位置ヲ當上田市ニ選定シテ工事ヲ起スニ至ツタノデアリマシテ、上田蠶絲專門學校ノ名稱ガ文部省直轄學校ノ官制上ニ生レタノハ明治四十三年三月二十六日デ翌四十四年四月十七日ヨリ授業ヲ開始シ、當日ヲ以テ本校記念日ト定メタノデアリマス。

本校創立ノ議一度決スルヤ長野縣ノ官民諸氏ハ熱誠ヲ以テ本校ヲ歡迎セラレ創立費トシテ三十万圓ヲ寄附セラレ、後更ニ五万圓ノ追加ニ依リ豫算總額三十五万圓ノ寄附金ヲ以テ、玆ニ本校ハ創立セラレタノデアリマシテ本校ノ創立ガ長野縣殊ニ本校所在地ニ負フ所大ナルハ深ク肝銘シテ忘ルヽ能ハザル所デアリマシテ、當時創立ニ盡瘁セラレタル本省ノ牧野、小松原兩大臣ヲ始メトシ澤柳次官、眞野實業學務局長、久留、柴垣兩建築課長及佐々木、三吉、朝比奈、本多、吉武ノ各創立委員並ニ地元ノ中島委員長、石田上田町長、工藤、南條兩衆議院議員、馬場、細川、本多、關、縣會議員其他ノ各閣下及各位ノ御芳名ト共ニ之ヲ校史ニ特筆シテ永ク報謝ノ意ヲ傳フル積リデ有リマス。

本校創立當時ノ學科ハ養蠶科及製絲科ノ二科デアリマシタガ、大正八年五月當時ノ會計課長タリシ山崎現農林大臣閣下ノ御盡力ニ依リ絹絲紡績科、即チ現在ノ絹紡織科ヲ增設シ玆ニ創立當初ヨリノ希望タル蠶絲紡織聯進ノ計畫ヲ實現シ、更ニ昭和六年四月製絲教婦養成科ヲ增致シマシタ。

本校ノ敷地ハ創立當時ノ二万六千坪ガ三割增ノ三万四千坪ト爲リ、建物延坪數ハ創立當時ニ比シ現在三倍餘ト爲リ五千坪ニ達セントシテ居リマス、猶創立以來ノ經費ハ累計約五百万圓デアリマス。

大正三年以來ノ本校卒業生ハ本科千三百六十九名、選科百七十八名、教婦養成科三十四名、合計約千六百名デアリマス、而シテ此等卒業生ノ主ナル就職先ハ養蠶科ハ官廳及學校、製絲科ハ製絲會社及官廳紡織科ハ紡績會社及官廳等デアリマシテ、內地ノ三府四十三縣ハ勿論、朝鮮、滿洲、中華民國及米國ニ散在シテ夫々專門ノ業務ニ從事シ漸次相當ノ地位ヲ得テ實社會ニ活動シツヽアリマス。

現在ノ本校々員ハ教授十六名、配屬將校一名、助教授八名、講師十二名、助手一名、書記六名、雇員三十一名、教婦五名ニ小官ヲ加ヘテ合計八十四名デアリマシテ外ニ囑託七名及傭人ノ七十五名トガアリマス。

學生ノ現在數ハ養蠶科九十八名、製絲科九十一名、紡織科五十名、選科二十四名、研究科一名、教婦養成科三十七名、合計三百一名デアリマス。

顧レバ明治四十三年八月、不肖菲才ヲ以テ敢テ校長ノ職ヲ瀆シ引續キ今日ニ及ビマシタガ、此ノ間教養上幾多ノ過失アリシニモ拘ラズ、幸ニ校運ハ年ト共ニ漸次進境ニ向ヒ大正四年四月ニハ山階宮芳麿王殿下ノ御臺臨ヲ辱フシ、大正八年七月七日ニハ皇太子殿下トシテ、今上陛下ノ行啓ヲ仰ギ、畏クモ玄關前ニヒマラヤ杉ノ御手植ヲ辱フシタルハ洵ニ本校ノ無上ノ光榮トスル所デアリマス、猶卒業生ノ就職率ハ年ニ依リ多少ノ隆替アルヲ免レザルモ近來、世ノ就職難ヲ餘所ニ年々百パーセントナルハ深ク校員一同ノ欣ブ所デアリマス。

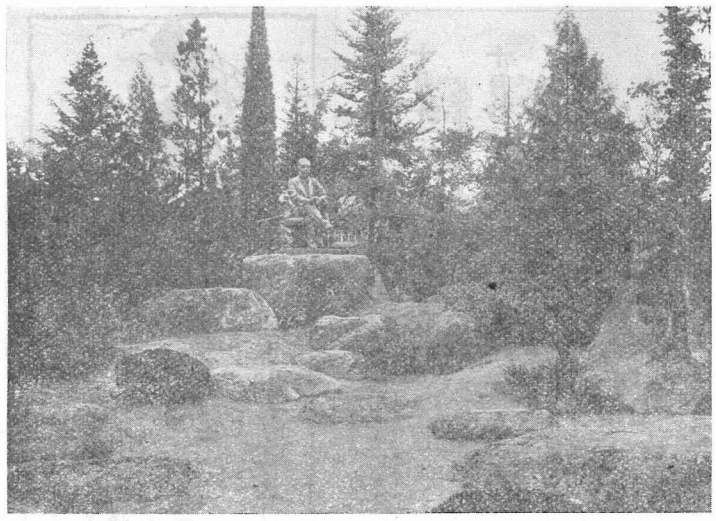
是レ偏ニ、外ニ在リテハ官公衙學校長及實業界ニ於ケル有力者各位並ニ地元各方面ノ篤キ御同情ト甚大ナル御援助ノ賜物タルト同時ニ、內ニ在リテハ校員諸君ノ全部ガ和衷協同シテ獻身的ニ職務ニ精勵シ、熱誠以テ陰ニ陽ニ小官ヲ庇護セラレ、學生諸子亦克ク校規ヲ遵守シテ其ノ本分ヲ勉メ、本校教養ノ趣旨ニ添ヒ又同窓生諸君ガ母校ノ聲譽ヲ重ンジ、克ク其ノ職務ニ盡瘁シテ間接ニ本校ヲ援助セラレタルニ依ルモノデアリマシテ小職ノ常ニ感謝スル所デアリマスガ、此ノ機會ニ於テ改メテ深甚ノ謝意ヲ表スル次第デアリマス。

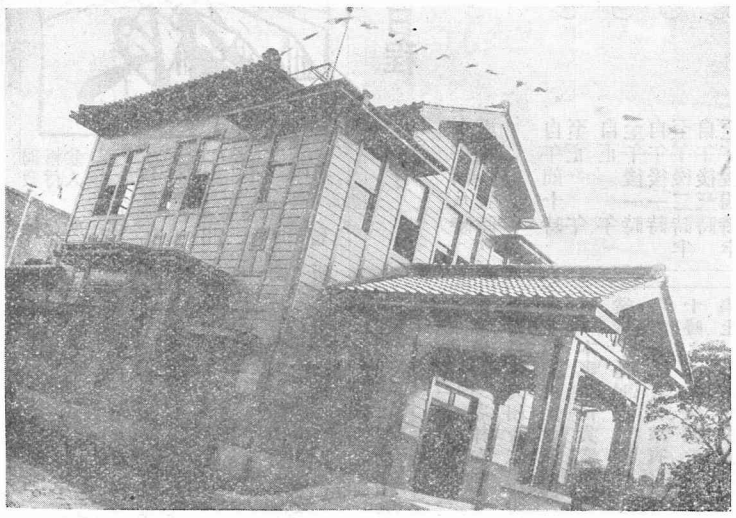
本日玆ニ創立二十五周年記念式ヲ擧ゲマシタノハ二十五年ハ正ニ人生ノ半ニ相當シ、事業ノ一段落ト爲ルモノナレバ過去ヲ省ミテ將來ヲ期シ、更ニ新ナル氣分ヲ以テ第二期ニ入ラントスル吾々ノ覺悟ノ聲明ト見レバ、敢テ無意義デハナイト信ジマス。

今ヤ我國ハ千古未曾有ノ非常時局ニ際會シ國民ハ此ノ非常時ヲ突破セントシテ、端無クモ我國ヲ日本本來ノ姿ニ立チ還ラシメ、以テ万邦無比ナル我國體ノ基礎ヲ愈明徵ニシ八紘一宇ノ建國ノ大理想ニ向ツテ、着々邁進シツヽアリマス、我々蠶絲紡織業ニ關係スル者モ徒ラニ人絹ノ壓迫、世界的不況等ノ爲ニ辟易スルコト無ク、大ニ蠶絲業本來ノ特色ヲ研究シテ其ノ利用ト發揮ニ努メ斯業ノ全體ニ亘リテ技術的並經濟的ニ餘蘊ナキ研鑽ヲ積ミ以テ斯業ヲ安定ナラシメ、進ンデ全世界ニ雄飛スルノ計ヲ立ツベキ機運ニ際會シテ居ルノデアリマス、此ノ時ニ當リ本校モ二十五周年ヲ一期トシテ、更生ノ意氣ヲ振起シ益々內容ヲ改善充實シ、斯學ノ研鑽運用ニ精進シテ斯業ニ有能ノ材ヲ供給シ以テ國家ガ本校ヲ創立セル趣旨ニ應ヘ社會ノ期待ニ添ハンコトヲ期スルノデアリマス、從テ本日此ノ式典ニ御賁臨ヲ辱フセラレタル各位ノ深厚ナル御援助ト御同情トヲ仰ガナケレバナラヌコトガ今後益々多大ナルヲ痛感スル次第デアリマス、庶幾クハ本校ノ爲斯業ノ爲將邦家ノ爲幸ニ一層ノ御同情ト御援助ヲ賜ハランコトヲ。

終リニ臨ミ重ネテ閣下貴賓ノ淸鑑ヲ辱フシタルコトヲ感謝ジマス。

之ヲ以テ式辭ト致シマス。





廿一日献納式を擧行せる壽像（上）及千曲會館（下）

壽像は針塚校長が校長室に於て足を組んで腰掛られたる儘右手に筆、左手に卷紙を持つて將に書面を書かれんとする姿で右側に直立せる自然石の表面に「針塚長太郎先生之像」裏面に「昭和十年十一月廿一日、千曲會建之、原型石井鶴三、鑄造安部胤齋と刻まれてゐる。

千曲會館は木造瓦葺二階建、建坪五十四坪七合四勺　總坪數八十四坪一合六勺　建築費（設備費）共約七千二百圓を要し之れで事務所、會議室、宿泊所の目的を達してゐる。

文部大臣祝辭

本日茲ニ上田蠶絲專門學校創立二十五周年記念式ヲ擧行セラルヽニ當リ衷心ヨリ祝意ヲ表スルト共ニ一言所懷ヲ述ブルヲ得ルハ私ノ欣幸トスルトコロデアリマス。由來生絲ハ本邦輸出品中ノ王座ニ位シ我ガ國產業上最モ重要ナル地位ヲ占メ蠶絲業ノ盛衰ガ國家經濟ノ消長ニ甚大ナル影響ヲ有スルコトハ言ヲ俟タザルトコロデアリマス　本校ハ明治四十三年斯ノ重要產業發達ニ關スル重任ヲ負フテ設立セラレ爾來設備內容日ヲ追ウテ充實シ校基彌々鞏固ヲ加ヘ幾多有爲ノ卒業生ヲ出シ其ノ多クハ養蠶製絲其他蠶絲產業ノ實務ニ當リ着々トシテ成績ヲ擧ゲ本邦蠶絲業ノ發達ニ寄與スルトコロ尠カラザルモノアルハ國家社會ノ爲眞ニ慶賀ニ堪ヘザルトコロデアリマス。今ヤ邦家內外ノ情勢ハ多事多端ヲ極メ寸刻モ苟且偷安ヲ許サズ大ニ國民精神ヲ振作シ擧國一致難局ノ打開ニ邁往スベキ秋職員各位並ニ生徒諸子ハ奮勵努力本日ノ慶典ヲ契機トシテ益々善美ナル校風ヲ顯揚スルト共ニ專門學術技藝ノ修得ニ勉メ以テ國富ノ增進ニ貢獻セラレムコトヲ切望スル次第デアリマス。

農林大臣祝辭

本日茲ニ上田蠶絲專門學校創立二十五周年記念式ヲ擧行セラルヽニ方リ衷心ヨリ祝意ヲ表シ併セテ所懷ノ一端ヲ述フルノ機會ヲ得タルハ洵ニ欣快トスル所ナリ

惟フニ我國蠶絲業ハ國民經濟上極メテ重要ナル地歩ヲ占メ生絲ハ輸出貿易ノ主班トシテ海外市場ニ雄飛スルコト久シ然リト雖モ顧テ之カ最近ノ情勢ヲ顧ルニ世界經濟界ノ不況ト人造絹絲工業ノ異常ナル躍進トニ依リ海外ニ於ケル生絲需要ノ減退ト價格ノ低減トヲ招來シ業界未曾有ノ難局ニ逢著セルハ遺憾ニ堪ヘサル所ナリ　偶々本春來絲價ハ漸次昂騰ノ歩ヲ進リ繭價又之ニ伴ヒ今ヤ一陽來復ノ觀ヲ呈スルニ至リタルハ寔ニ同慶ニ堪ヘサル所ナリト雖其ノ由ツテ來ル所ヲ察スルニ米國經濟界ノ好轉ト我國生產額ノ減少トニ依リ生絲需要ノ調和均衡ヲ得タルニ職由スルモノニシテ未タ之ヲ以テ業界不振ノ諸因カ悉除セラレタルモノト斷スヘキニアラス　寧ロ斯業ノ實狀ト其ノ前途ヲ深ク省察シ以テ業界永遠ノ發達ヲ圖ルヘキノ秋ナリトス　而シテ之カ方策素ヨリ一ニシテ足ラスト雖就中技術ノ向上ト經營ノ改善トニ依リ優良品ノ廉價生產ニ努ムルト共ニ繭絲ノ生產及販賣ニ關シ適切ナル施設ヲ講シ生絲消費領域ノ擴充ニ力ヲ效シ以テ需要ノ積極的增進ヲ企圖スルハ刻下喫緊ノ要務ナリト謂フヘク之カ爲ニハ斯業ニ關スル專門的智識ヲ具有スル人材ヲ要望スルコト頗ル切ナルモノアルヲ信ス

本校ハ明治四十四年創立以來專ラ蠶絲教育ノ重任ヲ擔ヒ興望ニ應ヘ其ノ養成シタル人材ハ一千五百有餘名ニ達シ洽ク業界ニ進出シ多數當業者ノ誘掖啓發ニ盡ス等斯業ノ興隆ニ寄與スル所鮮少ナラサルモノアリ　本校茲ニ星霜ヲ閱スルコト二十有五年、本日其ノ記念ノ盛典ヲ擧ケラル　洵ニ意義深キ擧ト謂フヘシ　冀クハ邦家蠶絲業ノ現狀ニ鑑ミ更ニ一段ノ力ヲ竭シ其ノ使命ヲ完フセラレンコトヲ　一言以テ祝辭トス

長野縣知事祝辭

本日茲ニ上田蠶絲專門學校創立二十五周年記念祝賀式ヲ擧行セラルヽニ當リ一言祝辭ヲ申述ブル機會ヲ得マシタコトハ私ノ寔ニ光榮トスルトコロデアリマス

我國ノ蠶絲業ハ明治大正昭和ノ各時代ヲ通ジ飛躍的ナ發展ヲ致シマシテ輸出貿易ノ大宗トシテ國民經濟ノ發展ニ大イニ寄與シマシタコトハ今更申述ブル迄モナイコトデアリマス　コノ樣ニ蠶絲業ノ急速ナル發達隆昌ヲ見マシタノハ我國ノ氣候風土ガ養蠶業ニ適當シテ居ツタコト農家ノ經濟事情ガ養蠶業ヲ好個ノ副業トシテ採リ入レザルヲ得ナカツタコト　國內經濟事情ガ製絲業ノ發展ニ好條件デアツタコト　最大ノ消費地タル米國ノ國民經濟ノ非常ナル發展等ノ諸事情ニ依ルコトハ勿論デアリマスガ他面斯業各部門ニ於ケル技術的進歩ガ其ノ發展ヲ促ス一大推進力トナツタコトハ否ムコトガ出來マセン　謂フ迄モナク技術的進歩ハ科學的研究ノ業績ニ俟ツベキモノデアリマシテ貴重ナル研究ノ結果生ミ出サレタ幾多ノ新進技術ガ多數ノ指導者ニ依ツテ實際ノ生產過程ニ移植普及セラレ以テ斯業ノ發展ヲ促進シ來ツタ次第デアリマス

本校ハ明治四十四年開校以來多數ノ學生ニ對シ蠶絲業ニ關スル高等專門ノ學術技藝ヲ授クルト共ニ教授各位ノ熱心ナル研究ハ貴重ナル業績ヲ收メラレ以テ大イニ斯業ニ貢獻セラレマシタコトハ斯界ノ等シク認ムル所デアリマス　カヽル赫々タル業績ヲ擧ゲラレマシタコトハ　トリモ直サズ本校ガ秀レタル教育ノ殿堂タルコトノ證左デアリマシテ　大正三年第一回ノ卒業生ヲ送リ出シテ以來既ニ一千五百有餘名ノ卒業生ハ或ハ指導機關ニ或ハ研究機關ニ或ハ官界ニ或ハ實業界ニ或ハ中央ニ或ハ地方ニ夫々斯業ノ改善發達ニ盡瘁サレテ居ルノデアリマス　惟フニ本邦蠶絲業ガ昭和五年以來甚シイ難局ニ際會シテ居ルコトハ周知ノ通リデアリマス　之ガ更生策ニ關シマシテハ種々研究サレ或ハ既ニ具体的ナ政策トナツテ實施サレテ居ルモノモアリマスガ其ノ根本策トシテハ益々各部門ニ於ケル科學的研究ト技術的進歩ノ一段ノ伸展强化ヲ圖リ以テ優品ヲ安價ニ生產スルコトニ努ムベキデアルト考ヘラレマス

思ヒヲ茲ニ致シマスナラバ　本校及本校卒業生諸君ノ責務ハ愈々重大ナルモノアルヲ感ズル次第デアリマシテ今日ノ記念日ヲ劃期トシテ將來一層其ノ研究ト教育トニ努メ延イテハ斯界ノ指導啓發ニ盡力致サレマシテ本校ノ歷史ニ彌々光輝ヲ添ヘラレンコトヲ希フテヤマナイ次第デアリマス　聊カ所懷ヲ申述ヘテ祝辭ト致ス次第デアリマス

九州帝國大學農學部長祝辭

上田蠶絲專門學校ハソノ創立二十五周年ヲ迎ヘテ茲ニ本日ノ佳辰ヲトシテ記念ノ祝典ヲ擧行セラレ不肖又ソノ席末ヲ汚スノ光榮ヲ得タリ。惟フニ蠶絲業ハ我國產業ノ白眉ニシテ建國以來國民生活ト密接且ツ重大ナル關係ヲ有シ明治維新後外國トノ貿易開始サル、ヤ重要輸出品トシテ實ニ國富增進ノ基礎トナリ徒ツテ斯業ノ改善發展ハ國力消長ト相關聯シコレガ教育機關ノ整備ハ一日モ忽ニスベカラザルモノトナレリ。政府ハ茲ニ鑑ミル處アリテ明治四十三年本邦蠶絲業ノ中心地ナル本市ヲ選定シテ茲ニ近代科學ヲ基調トスル本校ヲ創立サレタリト聞ク。爾來月ヲ閱ミスル事二十有五年我國蠶絲業モ亦異狀ノ發展ヲ遂ゲシコト本校職員各位卒業生諸氏ノ熱誠ト努力トニ俟ツモノ蓋シ甚大ナリト言フ可シ。今日コヽニ盛典ヲ擧ゲラルヽコト洵ニ意義アリト言フベク國家ノ爲眞ニ慶福ニ堪ヘザル處ナリ。希クハコノ時期ヲ劃シテ更ニ將來ノ發展ニ邁進サレンコトヲ　聊蕪辭ヲ述ベテ祝辭トス

松本高等學校長祝辭

教育ノ事業ハ國家隆昌ノ元人類文化ノ因ル所殊ニ實業專門教育ハ實際生活ノ向上ト發展トヲ所期シ國運ノ興揚社會ノ進展ニ資スルコト最モ大ナリ、上田蠶絲專門學校創立以來校運日ニ昇リ月ニ進ミ本邦產業界ノ大宗タル養蠶製絲紡織ノ事業ヲ改發昌盛シ斯界ノ碩學コレガ指導者トナリ幾多俊秀ノ士ヲ世ニ出シ地方蠶業ハモトヨリ帝國蠶絲業ノ隆盛ヲ招來セルコト甚大ナリ　ケダシ本校ノ榮譽邦家ノ慶福コレニ如クモノナカラン　今ヤ創立二十五周年ヲ迎ヘ盛大ナル祝賀ノ式典ヲ擧ゲラル　誠ニ慶賀ノ至リナリ　今後校運益々隆盛ニ赴キソノ事業ハ時代ノ先覺トナリテ產業界ニ君臨シ校彩ノ一層隆離タルモノアルヲ信ズ　茲ニ盛典ニ列シ謹ンデ祝意ヲ表ス

纖維工業學會理事長祝辭

本日茲ニ上田蠶絲專門學校創立廿五周年記念ノ式典ヲ擧行セラルヽニ當リ一言祝辭ヲ述ブルハ予ノ光榮トスル所ナリ

惟フニ本邦ニ於ケル養蠶製絲ノ業ハ其ノ起源極メテ遠ク既ニ太古ヨリ傳ハリ歲月ノ經過ト共ニ全國到ル所斯業ヲ營マザルモノナキマデニ普及シタリト雖モ漸ク國內ノ需要ヲ充スニ過キスシテ改善發達ノ見ルヘキモノナク至ツテ原始的產業タリシカ明治維新後泰西文化ノ輸入各種產業ノ勃興及ヒ海外貿易ノ發展ニ伴ヒ逐次生絲ノ輸出增加シ遂ニ重要輸出品タル現今ノ地歩ヲ獲得スルニ至レリ。政府亦斯業ヲ指導開發スヘキ技術者ヲ養成スル爲メ明治四十三年蠶絲王國ト汎稱セラルヽ長野縣ノ而モ養蠶國ノ中心地タル上田市ヲトシ本校ヲ創立セラレタルハ實ニ其ノ所ヲ得タルモノト言フヘシ　加之當時一般ニ養蠶ノ開發ハ單ニ養蠶及製絲ニ限ルカ如キ概念ニ捉ハレツヽアリタル際本業ト唇齒輔車ノ關係ニアル絹紡織科ヲモ併置セラレ之等三科ヲ專攻セラレタル幾多有爲ノ人材ヲ各方面ニ送リ斯業ノ發展ニ寄與セレラタルコト多大ナルハ邦家ノ爲メ欣賀ニ堪ヘサルナリ　茲ニ過去二十五年間ニ於ケル本校及ヒ同出身者各位ノ社會ニ貢獻セラレタル功績ヲ偲フト共ニ將來益々國家ノ期待ニ副ヒ校運ノ隆昌ヲ祈リテ止マサルナリ　聊カ蕪辭ヲ陳シ以テ祝辭トス

東京高等蠶絲學校長祝辭

茲ニ本日ノ佳辰ヲトシ、上田蠶絲專門學校創立二十五周年記念ノ式典ヲ擧行セラル、ニ方リ祝意ヲ表スルノ機會ヲ得タルハ予ノ最モ欣幸トスルトコロナリ。顧レバ本校ノ創立セラレタルハ明治四十三年ニシテ爾來今日ニ至ル　將ニ二十有五年此ノ期間ニ於ケル我ガ蠶絲業界ハ變遷ハ養蠶製絲紡織ノ各業ヲ通ジ極メテ顯著ニシテ學術ノ進歩ニ於テ技術ノ刷新ニ於テ將タ又事業經營ノ革新ニ於テ殆ンド隔世ノ觀ヲ呈スルモノアリ、此ノ間ニ處シテ本校ハ常ニ克ク進運ノ動向ヲ示唆シ學術技術ノ研鑽ニ於テハ先人未發ノ理法ヲ闡キ學生ノ教導薫育ニ於テハ業界指導ノ重任ニ當ルベキ剛健有爲ノ人材ヲ輩出シ以テ本邦斯業ノ刷新改善ニ寄與セラレタルノ功勞極メテ著大ナルモノアリ　此ノ間學校ハ又數次ノ擴張ヲ重ネ規模ノ擴大內容ノ充實共ニ成リ校運ノ興隆年ト共ニ隆昌ヲ極メツ、アリ　是一ニ針塚校長閣下ガ創立以來終始一貫シテ統理ノ劇職ニ當ラレ本校ノタメ獻身犧牲ノ至誠ヲ捧ゲ殆ンド半生ノ心血ヲ濺ガレタルノ賜ニシテ教職員各位亦與ニ俱ニ協心戮力一丸トシテ本校使命ノ達成ニ精進セラレタルノ賜タリ　更ニ又一千五百余名ノ卒業生各位ハ常ニ克ク本校教養ノ趣旨ヲ惜守シ朝ニ野ニ各其ノ所ヲ得テ斯業ノタメニ活躍奮鬪セラレ以テ今日ノ盛典ヲ迎ヘラレタルハ誠ニ慶賀措ク能ハザルトコロナリ

今ヤ蠶絲業界ノ情勢ハ更生刷新ノ黎明期ニ直面シ學術及技術ノ研鑽ニ於テ指導奬勵施設ノ刷新ニ於テ生產組織機構ノ變革ニ於テ消費用途ノ擴大ニ於テ將ニ一大革新ノ行ハレントスル途上ニ在リ　此ノ新面ニ立チテ難局ノ打開ニ活躍スヘキ人材ノ養成益々緊切ヲ告グルノ秋ニ際會ス　翼クハ本校關係ノ各位過去二十五年ノ光輝アル歷史ニ對シ更ニ將來ニ於テ一段ノ光彩ヲ副フル所アランコトヲ　聊カ所懷ノ一端ヲ陳ジテ祝辭ニ代フ

日本中央蠶絲會副會長祝辭

本日茲ニ上田蠶絲專門學校創立二十五周年記念式ヲ擧行セラル、ニ方リ參列ノ榮ヲ得タルハ予ノ欣幸トスル所ナリ。

我國文物ノ長足ナル進歩ハ世界的ノ驚異ニシテソノ原因種々アルベシト雖モ教育ニ負フ處最モ大ナリト云ハザルベカラズ　各種產業中其ノ進歩發達ノ最モ顯著ナル蠶絲業ノ今日アル亦斯業教育ノ効果ソノ最タルモノナリト謂フベシ　本校ハ明治四十三年ノ創立ニ係リ校長始メ教職員ニ其ノ人ヲ得刻苦精勵茲ニ二十五周年其間幾多ノ人材ヲ輩出シ或ハ官界ニ或ハ實業界ニ其ノ卓越セル才能ヲ發揮シテ斯業ノ開發ニ貢獻セラレ一面有益ナル研究成績ヲ公表シテ實業者ノ指針ニ供セラルル、等其ノ業績大ニ見ルベキモノアルハ世ノ既ニ周知ノ事實ニシテ予ハ此ノ機會ニ於テ多大ノ敬意ヲ表スルモノナリ

今ヤ蠶絲業界小康ヲ得タルガ如キモ四圍ノ狀勢ハ必ズシモ前途ノ樂觀ヲ許サズ　今後益々技術ノ改善ト經營ノ刷新トニ依リ其ノ基礎ノ確立ヲ期スルノ要切實ナルモノアリ　而シテ之ガ爲ニハ科學ヲ基調トスル適切有効ノ研究成績ヲ有爲ノ人材ニ依リテ指導奬勵スルヨリ急務ナルハナク從ツテ斯業改善ノ根源タル教育ノ重任ニ當ル本校ニ期待スル處亦頗ル多キヲ覺ユ　希クハ當局各位自今益々加餐自重セラレ重大使命ノ遂行ニ精進セラレムコトヲ

聊カ蕪辭ヲ述ベテ祝辭トナス

感謝狀（教職員）

先生ハ母校御就任以來子弟ノ教養薫陶並ニ斯業ノ啓發ニ盡瘁セラレ母校ノ發展隆昌ニ貢獻セラル、コト〇年ニ及ヒ其ノ勞功ノ甚大ナル會員一同ノ深ク感謝スル所ナリ　茲ニ本會ハ母校創立廿五周年ニ當リ記念トシテ〇〇火鉢壹個ヲ贈呈シ謹ミテ感謝ノ微意ヲ表ス

昭和十年十月二十一日

上田蠶絲專門學校千曲會
名譽會長　針塚長太郎
理事長　蒲生俊興

感謝狀（書記及傭人）

貴下ハ母校ヘ御就任以來勤續〇年忠實熱心ニ校務ニ盡瘁セラレ母校ノ發展隆昌ニ貢獻セラル、コト渺カラス　茲ニ本會ハ母校創立二十五周年ニ當リ記念ノタメ〇〇壹個ヲ贈呈シ感謝ノ意ヲ表ス

昭和十年十月二十一日

上田蠶絲專門學校千曲會
名譽會長　針塚長太郎
理事長　蒲生俊興

献納書

一、壽像　壹基

右献納候也

昭和十年十月二十一日

上田蠶絲專門學校千曲會
文部大臣　松田源治殿

献納書

一、千曲會館

木造瓦葺二階建　壹棟
建坪　五十四坪七合四勺

右献納候也

昭和十年十月二十一日

上田蠶絲專門學校千曲會
文部大臣　松田源治殿

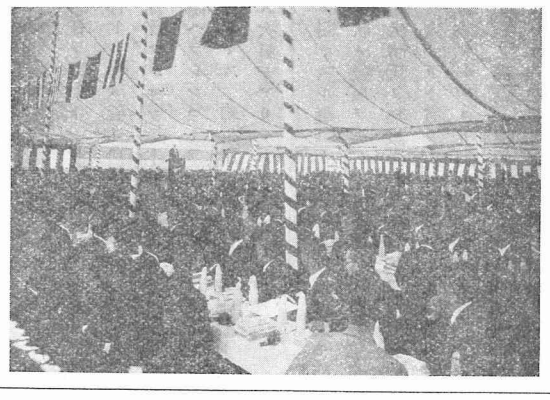
十五年以上勤續者

（昭和十年十月現在）

勤續年數	現職名	氏名
二五年三ヶ月	校長	針塚長太郎
二二、四	教授	井上柳梧
二四、一一	同	和田仙太郎
二五、〇	同	大瀧照太郎
二〇、四	同	遠藤保太郎
二三、二	同	早川直瀨
一九、七	同	佐藤利一
二三、一	同	原田親雄
一四、一〇	同	岡德治郎
一七、四	同	佐藤春太郎
一五、一一	同	古谷榮藏
一八、三	同	清水寛孝
一五、六	同	林貞三
二二、七	助教授	目崎三郎
一八、一一	同	須田圭二
二五、一	講師	阿形輝司
二四、一	同	石倉新十郎
二四、七	副手兼講師	小林清丸
一八、六	助手	內藤榮吉
二三、五	書記	都筑貞吉
二四、五	同	和田主計
一五、七	同	春原良太郎
二一、六	囑託	竹下文英
一七、八	雇	成瀨次男
二〇、二	同	細谷金次郎
一四、七	教婦	茨木こう
二四、八	巡視	村瀨儀市
二二、七	同	增澤五十三
一九、一	同	小林忠雄
二三、八	業手	山岸荒之助
一六、一〇	同	津田弘
二三、七	同	森澤桑子
一六、六	同	清道十一郎
一八、九	同	宮下甫
一四、一〇	同	小林榮一
一五、七	小使	室橋長重郎
二三、二	掃除婦	山岸スイ
一九、一〇	傭	宮下時次郎
一九、一一	同	伊藤新作

祝宴

十月廿一日正午記念式が終へると直ちに母校運動場に設けられた天幕張り內に於て晝餐會が開かれた。會場は周圍に紅白の幕を巡らし西側に舞臺、それと平行に貴賓の席を取り之に直角に十二列の席を取り貴賓に近き方に一般、遠い方に同窓生が着席した。出席者九百名（同窓生二百名其他五百名）場所の關係上母校職員は十數名着席したに過ぎなかつた。早川接待係長の開會の辭に次いで校長の挨拶、大村長野縣知事の祝辭にて宴に移り宴中成澤市長より上田獅子來歷の物語り及び上田女子青年團有志寄贈に係る上田小唄、眞田音頭、御所車、野崎小唄、彌次喜多行進曲の手踊があつた。かくて成澤市長發聲にて上田蠶絲專門學校萬歲を三唱して午後一時宴を終へた。尙來賓に對しては宴席に於て本校及商工會議所の寄贈記念品を贈呈した。但し同窓生の內風呂敷及蠶絲學雜誌は千曲會館にて受付の際渡した。



（祝宴…學校長の挨拶）

記念品內容

來賓は祝宴場に於て千曲會員は同所及千曲會館に於て記念品を贈呈したが其の內容は左の如くである。

△學校より

絹風呂敷、農民美術品飾盆（貴賓百名に對し）創立廿五周年上田蠶絲專門學校要覽（四六版十二頁、寫眞廿八葉）寫眞葉書（二枚、櫻の母校及淺間山の噴煙）、針塚校長壽像コロタイプ版（八ツ切大）蠶絲學雜誌記念論文集（四六二倍版四五〇頁、卒業生職員全部、蠶絲業關係來賓百名）絹靴下（二足、本校紡織科製　百組）

△商工會議所より

上田市商工年鑑（四六版二五〇頁、昭和十年度版、寫眞七十四葉）上田地方產業研究資料集（昭和七年十月發行、菊版二五五頁、寫眞十九葉）、上田商工會議所統計年報（昭和十年度、菊版卅七頁）溫電案內パンフレット、上田城と上田獅子來歷パンフレット、上田名所繪葉書（小學校北校、上田橋、上田市役所、國立上田蠶絲專門學校、陸軍上田飛行場、上田城趾）、煙火番附、上田市街地圖、

記念式出席者

記念式の招待狀發送は貴賓三三五通、一般一八六一通、卒業生一五四五通にして、之が出席者は貴賓五一名、一般五五七名、卒業生四三一名であつた。之に母校側の出席者職員四六名（卒業生を除く）學生三〇〇名、傭人八一名を加へると合計一四六六名である。

一般來賓出席者（順序不同）

文部大臣代理參與官　山桝儀重
九州帝國大學農學部長　滿田隆一
東京高等蠶絲學校長　本多岩次郎
京都高等蠶絲學校長　村松舜祐
米澤高等工業學校長　大場成實
名古屋高等工業學校長土屋純一代理　簗源次郎
桐生高等工業學校長西田博太郎代理　飯野知次
鳥取高等農林學校長　山田玄太郎
岐阜高等農林學校長　米山豊
盛岡高等農林學校長　上村勝爾
宇都宮高等農林學校長山縣宇之吉代理　香川冬夫
三重高等農林學校長上原種美代理　篠田平三郎
宮崎高等農林學校長松岡忠一代理　井上重陽
千葉高等園藝學校長　松井謙吉
山口高等商業學校長　岡本一郎
名古屋高等商業學校長渡邊龍聖代理　小原龜太郎
神戸高等商船學校長吉利嚴代理　原孝司郎
松本高等學校長　西川順之
織維工業學會理事長　井上仁吉
東京工業大學講師　渡邊周
織維工業學會理事　三田村健
日本蠶絲學會々長　宗正雄
日本蠶絲學會副會長　勝木喜藏
日本蠶絲學會副會長　波多野岩吉
東京帝國大學農學部教授　佐藤寛次
鹿兒島高等農林學校教授　北島織雄
横濱生絲検査所長　芳賀權四郎
神戸生絲検査所長　肥後俊彦
全國産業組合製絲組合聯合會長　月田藤三郎
日本中央蠶絲會主事　長岡哲二
長野縣知事　大村清一
貴族院議員　片倉製絲株式會社重役　武井覺太郎
衆議院議員　百瀬渡
衆議院議員　山本荘一郎
衆議院議員　有馬浅雄
衆議院議員　高橋熊次郎
衆議院議員　小山邦太郎

群馬縣經濟部長
長野縣經濟部長
全國製絲業組合聯合會評議員
群馬縣製絲業組合長
甦生特別委員會主事
群馬社々長代理理事
全國産業組合製絲組合聯合會副會長
郡是製絲株式會社重役
昭榮製絲株式會社重役
全國養蠶業組合聯合會囑託
文部省
長野市長
松本市長
上田市長
上田商工會議所會頭

松澤龍雄　三好重夫　杉山寅雄　横尾長生　大澤安造　新井高四郎　宅間藤馬　星野大太郎　永井環　宮下銑太郎　藤井伊右衛門　小里頼永　成澤伍一郎　伊藤傳兵衛

其他縣外、縣内、郡内、市内官廳團隊當業者市協贊會合計六〇八名

同窓會員出席者

養蠶科出席者（二三七名）

養蠶科第一回（十二名）
上原清夫　蒲生俊興　篠田平三郎　丸山俊一郎
山本辰五郎　佐谷戸健次郎　菅澤隆三　箕輪貞三
折茂正太郎　篠原善次　牧野金治郎　矢澤茂登一

養蠶科第二回（十三名）
淺見好雄　唐澤正平　小澄晋　高畠秀男　林新一
飯島正胤　北村一郎　小林國造　朝長勝治
小川保　倉澤美徳　須田圭二　濱井壽夫

養蠶科第三回（十五名）
加藤喜一郎　久保田正樹　佐藤倚雄　中澤勝也　松谷鑛之助
苅田恭一　栗林悦　芝荒雄　中山鑑一　米村眞一郎
岸勝彌　近藤正巳　登坂忠吉　平澤勝　八木誠政

養蠶科第四回（十三名）
岡部康之　鹽見豊一　田中康雄　皆川二郎　吉村眞作
木脇寅熊　會山直高　二宮九二二　横山宗次
榊原鶴次郎　田口博輔　三橋宜夫　吉野健吉

養蠶科第五回（八名）
浦山藤吉　栗原章　丸山武夫
尾見祐八　白澤幹　米村壽命
片岡清治郎　田村三郎

養蠶科第六回（十一名）
猪坂直一　金兒文夫　小山二郎　鹽原克巳
小野正男　古東幹太　齋藤菊雄　船後勇平
糟谷遠三樓　小林勳　佐藤俊三

養蠶科第七回（五名）
上林多兵惠　都丸晴治
久保田昌人　前田龜雄
土岡光郎

養蠶科第八回（九名）
岩瀬義夫　中川博司
桑田庄七　中島茂司
小島杉門　永田平

養蠶科第九回（六名）
根岸丑之輔　勝又藤夫　田口富五郎
日野光平　金崎眞英　竹内虎夫
二木猪一　岸善亮　原田種龜

養蠶科第十回（六名）
宇田虎一郎　古川俊之
小中潔　向井政彌
深谷正一　母袋良平

養蠶科第十一回（七名）
池田正五郎　清水衞敏　水城孝男
岩根謙　中島茂
佐藤義助　長谷川正雄

養蠶科第十二回（七名）
大谷内三衞　新穂利信　若林茂一
北島正生　安川寛
仲内靜　山口定次郎

養蠶科第十三回（十二名）
安部和　加々井精喜　寺島雅彦　原茂
今村良郷　鈴木泰市　野口浩也　宮城博
大熊康代　關只　野澤司馬作　宮澤勇

養蠶科第十四回（十五名）
小山哲夫　竹内善吾　中島角太郎　古越光明　松原幸彌太
佐村和夫　内藤良雄　中曾根長男　前澤康雄　山崎壽
竹内孝三　中澤藏　樋村忠義　松岡潔　依田彌亮

養蠶科第十五回（十二名）
淺野清志　遠藤正壽　中村岩人　山本友之丞
阿部丈夫　兒玉信尊　降旗孝　山本誠
新井宇之輔　櫻井弘吉　森戸晋　渡邊晋吉

養蠶科第十六回（十名）
井澤喜三　熊谷恒次　友野正路　宮本清松
木内茂雄　向坂朋二　針塚民一
北澤孝一　關本芳男　藤本衞佐雄

養蠶科第十七回（十三名）
淺見安治　金澤勇　倉澤一二三　酒井嘉美　濱節陸
雨宮金雄　北原喜昌　小林辰夫　西澤重光
山崎傳　工藤見吉　早乙女德藏　西原淳一

養蠶科第十八回（二十名）
上杉慶次郎　笠原四郎　坂口正信　千村敏三　中村武男　水野敏夫　若林爲夫
尾崎宗歡　河田榮一　三瓶常四郎　永井眞吉　藤井四郎　宮坂收　和田敦
太田元　河淵益美　竹内直人　中澤喜雄　古川正喜　六川忠一郎

養蠶科第十九回（十八名）
赤羽是壽　沓掛久雄　武田一好　塚田庸男　平尾孝平　町野巖
池内眞吾　工藤實司　千吉良幸　戸部正久　枇杷木瀧雄　松野外史
岡卓郎　竹内博雄　茅野功　濱村一彦　細川豊　山浦卓郎

養蠶科第二十回（十二名）
市川信一　清水洸　角田收　禰地進
倉元隆太　鷹野貞雄　中島眞　宮入保
小林修　田口恒雄　原田治夫　吉田太郎

養蠶科第廿一回（十四名）
荒木喬　市瀬武壽　倉澤恒夫　新野元治郎　前島正直
池田俊郎　入佐一郎　齋藤利雄　西澤良一　町田博
石塚亮　河越哲夫　高野賢造　林四郎

養蠶科第廿二回（十九名）
青木深　岡島龜治　小林敏　鈴木正一郎　田近雞　松本武　横山忠夫
青木幹男　國島正　坂口育三　瀧澤幸　半田義雄　森山甫
大山融　古平義雄　鈴木茂　多田作造　藤田四郎　鎧塚好作

製絲科出席者（一三三名）

製絲科第一回（七名）
太田清藏　高田茂重郎　依田信一
織田博　田口敏夫
小林茂樹　中澤忠

製絲科第二回（九名）
大簗政平　兒玉忠雄　戸田勝一
沖濤治　酒井五十三　永井榮
甲斐雞　高尾歳次　細川三郎

製絲科第三回（七名）
飯島直　神保喜久　堀江尚
上野榮仁　高木三治
岡部彌平　林貞三

製絲科第四回（八名）
伊藤勢龜　都筑賢吉　横田節樹
小笠原振一　橋本景吉　吉澤武夫
小山久一　森山二郎

製絲科第五回（五名）
井上一郎　船越重勝
中村吉男　味澤泰造
原田侃

製絲科第六回（五名）
石川健丸　陶山專三
市川清男　手塚雄一
岡村源一

製絲科第七回（二名）
石塚浪之助
甲田勝衞

製絲科第八回（六名）
小笠原喜代三　佐藤與四次
好士泰造　鈴木教吾
榊原春彦　三好彌市

製絲科第九回（四名）
大谷勇　湯澤重敬
島倉督造
南澤清

製絲科第十回（五名）
小山田道男　小山雅夫
川船卓爾　高島正巳
小山俊吾

製絲科第十一回（五名）
石井謙三　牧野弘
小山清　山本奈良三郎
林十郎

製絲科第十二回（六名）
稲田嚴實　金野保
荻原清治　窪田潤
神戸敏夫　和田晋

製絲科第十三回（三名）
木藤富士雄
手塚政吾
御子柴義之

製絲科第十四回（二名）
久保田松藏
野尻白二

製絲科第十五回（六名）
遠藤榮一　茅野清三郎
笠原正巳　土屋孝
佐藤孟　三谷勝

製絲科第十六回（五名）
栗原慎一郎　三木辰雄
庭野明之助　宮坂美壽雄
星野豊

製絲科第十七回（五名）
茂原重雄　出浦長
阿倉美義　伴野德人
鷹野誠一

製絲科第十八回（十名）
小口勝三　鈴木保男　中曾根靜三　松井慧二
笠原義人　關幸作　成尾喜八郎
鈴木玄九　田口喜一郎　根津健

製絲科第十九回（十名）
相場實志男　古平庄衞　林淸市　山崎保太
大木定雄　下村忠一郎　林秀門
小澤正一　西山省　宮原秀人

製絲科第二十回（七名）
菅野喜通　篠原林助　矢島文男
喜多尾猪門　白井美明
後明武雄　宮下文四郎

製絲科第廿一回（十名）
池田爲雄　北澤常雄　林正平　横澤平
市原文雄　白井四良　松浦彰義
岩本賢次　瀧澤正一　松野輝彦

製絲科第廿二回（八名）
尾澤敏男　清水英一　野本信次
片岡金一　田中齊　丸山泉
崎山正克　戸田畯三

紡織科出席者（二三名）

紡織科第一回（三名）
飯島貞雄　飯田儀作　井上一郎

紡織科第二回（五名）
青木喬　後藤政之　伊藤友次郎　野口新太郎　小林良亘

紡織科第三回（二名）
香山淸和　小松忠一郎

紡織科第四回（二名）
三宅惣玉留　宮下丈夫

紡織科第六回（一名）
島倉次郎

紡織科第七回（一名）
大谷隼人

紡織科第八回（一名）
小林倚一

紡織科第九回（一名）
草野弘

紡織科第十回（一名）
坂口進

紡織科第十一回（二名）
大塚富雄　山名享四郎

紡織科第十二回（一名）
北澤琢郎

紡織科第十四回（三名）
北野三郎　黑岩君雄　細井政吉

準備會員出席者（三八名）

高橋よしゑ　上野倭文　木下とき　大槻まさ　市川光枝　小池武子　小山まさみ　倉島貞子　柳澤よし子　西原芳　山邊かつよ　瀧澤もとゑ　小柳シヅ
丸茂まさゑ　小林みよし　田玉とよ　大瀧すみ　岡澤重　橋本あい　山田かなめ　小林敏子　吉口春子　山崎政江　茨城こう　牧野久　山崎ゆり
栗林ひさし　川上連　金井たかえ　南波とり　岡宮靜子　半田ひさ　上原みつい　高寺穐子　須藤靜子　田中市江　山越さと　堀内波

上田獅子舞

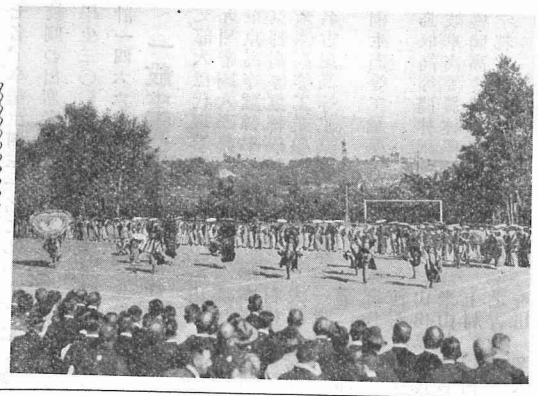
晝餐會が終へると直ちに我國中部鄉土藝術の誇たる由緒深き常田獅子續いて房山獅子が乘込み晝餐會場東側の運動場に於て母校よ永久に榮あれと舞ひ狂つた。兩獅子のコースは次の如くである。

△常田獅子（舞は母校、市役所、常田大宮神社）

午後〇時半常田會館に勢揃して大宮神社で修祓—一時母校—上中下常田—横町—海野町—四時市役所—海野町—横町—常田大宮神社で舞ひ五時解散

△房山獅子（舞は母校、市役所、東驛前）

正午上川原柳集會場に勢揃ひ—下川原柳—上房山—下房山—原町—午後一時市役所庭—海野町—横町—常田—二時母校—日出町—櫻木町—三時半上田東驛前—材木町—愛宕町—上川原柳集會場にて解散



（常田獅子の舞）

上田獅子來歷

上田城下の市街に接續せる常田、房山二村（今共に上田市に編入せらる）に往古より傳へ來れる獅子踊は天正十一年（紀元二、二四三年）眞田安房守昌幸創めて上田築城の土工を起し地固の式を行ひし時兩村民從來の獅子踊を改作して其の式に入りしを起原とし、獅子の裝束の一部は其の時城主より賜ふ所の品を用うと謂ふ。爾來年々祇園祭禮の時之を催し眞田氏の後仙石氏及松平氏の封を襲ぐや、城主在國の年は特に其の居館（舊城三の丸郭内にあり、現今中學校となり、門塀濠土居等舊態を存す）の廣庭に於て演舞し、城主の觀覽に供し、城主より手當として米苞若干を給付し、長く以て恒例とし、明治廢藩の時に至るまで、渝ることなかりき。仍て此の踊を演行する祇園會を城祭（しろまつり）と稱し、藩下士民の崇敬淺からず、獅子出役者も頗る威權を振ひたり。明治初頃まで年々惰らず、續行し、爾後特殊の祭典若くは慶事ある毎に之を演したり。（其の主なるものを擧れば、明治三十一年　小松宮殿下御成に際し臺覽に供したる、或は明治三十九年伊東、東郷、上村三將軍の來田、明治四十三年國立上田蠶絲專門學校地鎭祭、大正八年市制實施、昭和四年市制實施十周年祝賀、昭和五年明治神宮十年大祭奉仕、昭和七年上田築城三百五十年祭祝賀の際等なりとす）三百餘年の古き歷史を有する式典として、今日も尙甚だ崇重せらる。

踊の行裝及歌は、下に掲ぐる如くなるが、歌詞は長き年月を經て交も口授するの間甚しく轉訛し、往々解し難き文句を生じたり。今故老の傳說に隨ひ間々傍註を加へたれど、尙詳なるを得ず。識者の敎へに待つもの多しとす。

常田房山　獅子踊の行粧及組織

禰宜　一人　猿田彦命に擬し一行の先頭に立ち嚮導す。常田は朱塗の天狗面、折烏帽子を戴き、片面に鶴、片面に龜を畫きたる大團扇を左に右に鈴を携ふ。房山は禰宜を中立とも稱し金色の天狗面、烏兜を冠し、右手に五色紙の大幣を持ち左に鈴を携ふ。

獅子　三人　各獅子頭を戴き、小團扇を手にす。

鉦叩　六人　常田は各兩眼と鼻のみの面、鍬形を着け、房山は各赤黑の鬼面に長髮を被り、孰れも鉦撞木を携ふ。以上各手代りの者あり。

歌揚　若干人　笛　若干人　太鼓　一人　手代りあり。

小餝（こざさら）子供多數　各花笠を被り餝（さら）を携ふ。（明治に至り廢す）

警固　多數　各一文字笠　麻裃を着し、竹鞭を持つ。

常田獅子の歌

道行「御門の脇のこん櫻（ざくら）こんかね花（はな）が咲いたとな」（繰返）

【註】古くは咲いたと申すと謠へり。こん櫻は金櫻右近櫻の諸說あり、こんがね花は黃金花の音便なり。

前出「まはり　まはりて　三（み）つくるわ　遲くまはりて」「出（で）場（ば）に迷ふな」（二返）

【註】三廓又三曲輪（くるわ）。

「まよりきて（二返）「これのお庭を眺むれば　黃金（こがね）こんさが」「足にからまる」（二返）

【註】まよりきては廻はり來て、又は參り來ての訛、こんさは小草なるべし。

地唄「まより來て」（二返）「これのお庭を眺むれば　いつもたえせぬ」

「鎗が五萬本」（二返）

前出「しいなえかつげ」（二返）「いつまでかつがに」「いざやおろせ」（二返）

【註】竹刀又は科木なりとの說あれども未詳、いつまでかつがには、何時迄擔ふべきやの意。

地唄「五萬本の」（二返）「鎗をかつがせおすならば　安房と上總は」「これの御知行」（二返）

「おゝての」（二返）「四の柱は白金（しらがね）で中（なか）は黃金（こがね）で」「町や輝く」（二返）

【註】おゝては、大手の城門なるべし。

流し「御門の脇のこん櫻（ざくら）　こんがね花（はな）がさいたとな」（繰返）

房山獅子の歌

道行「御門の脇のこん櫻（ざくら）　こんがね花（はな）もさいさとな」（繰返）

【註】さいさとなは、咲いたよなの轉なるべし。

前出「玉（すだれ）の簾を捲揚げて」（一返）「まより餝（さら）を」（一返）　お目にかけましよ」（二返）

地唄「まよりきて（二返）これのお庭を眺むれば　黃金（こがね）こんさが（一返）足にからまる」（二返）

「まよりきて」（二返）「これの御門を眺むれば　御門扉が」（一返）

「せみや唐鋼（からかね）」（二返）

【註】せみは門扉の部分稱か未詳

前出「しいなげかつげよ」「いつまでかつがに　いざやおろせよ」

「まよりきて　これのお廐眺むれば　いつもたえせの」「駒が千疋」（二返）

【註】たえせのは、絕せぬの訛なるべし。

「わが國で　雨が降るげで雲が立つ」

「お暇申して（一返）戻れ小ささら」（二返）

【註】雨のふるげでは雨の降りさうなけしきでなり。

流し「御門のわきのこん櫻（ざくら）　こんがね花（はな）もさいさとな」（二返）

明治維新以後兩獅子出演年譜

一、明治十二年　松平神社地固
一、明治十七年　子爵松平忠禮公來田の際
一、明治二十年　上田神宮奉齋會社殿地固
一、明治二十三年　上田橋開通式
一、明治三十一年　日本赤十字社長野支部總會に於て小松宮殿下台覽
一、明治三十九年　伊東、東郷、上村、三將軍來田の際
一、明治四十三年　國立上田蠶絲專門學校地鎭祭
一、大正八年　上田市制施行祝賀式
一、大正十四年　上田橋梁替開通式
一、昭和四年　市制施行十年祝賀及原町貫通道路開通式
一、昭和五年　明治神宮鎭座十年大祭神賑神事舞
一、昭和七年　上田築城三百五十年祭
一、昭和十年　上田蠶絲專門學校創立廿五周年記念式

上田城來歷

信州上田城は、今より三百五十三年前卽ち天正十一年信濃の豪族眞田安房守昌幸の築く所にして、恰も戰國時代豊臣秀吉の大阪築城と同年なりとす。同十三年德川家康北條氏直と相謀り此の城を攻むるや昌幸奮戰忽ち之れを擊退し眞田氏の驍名勃然として揚れり。次で慶長五年の役、昌幸子幸村と共に豊臣家の恩顧に報えんとして此の孤城に據り西軍に屬し、德川秀忠の山道の大軍を阻止し、遂に秀忠をして關ヶ原參戰の機を失せしめ、眞田父子の孤忠と俠骨とは、史上に赫々として、日本三籠城の一に數へらるゝに至れり。關ヶ原役後眞田信之之れに居り昌幸以來二代四十年にして仙石氏代はり領し大に城櫓を修復し在城三代八十五年、松平氏後を受け七代百六十四年間以て明治二年版籍奉還に及べり。後ち城阯殆んど廢滅に歸せんとせしが市は數年前より此の由緒ある史蹟の保存を圖り、舊二の丸内を全部公園となし陸上競技場、野球場、庭球場、兒童遊戲場、招魂社、公會堂等を設置し又舊城櫓の内部を改造して徵古館を設置し、眞田、仙石、松平三家より甲冑武具古文書等重寶の出品を請ひ、其の他鄉土史料たる石器時代以來の遺物偉人傑士の書畫等を陳列し一般の縱覽に供し居れり。昭和九年十二月文部大臣より史蹟に指定せられたり。

針塚校長壽像除幕式

母校創立以來の校長として幾千の卒業生より慈父の如く慕はれ尊敬されてゐる校長針塚長太郎氏の壽像除幕式は上田獅子舞が終了と同時に午後二時半より玄關右側紅白の幕で飾られた式場で針塚校長御家族、來賓其他一同參列、科野大宮神社關神官の修祓に次いで校長令孃針塚貞子（一五）さんと令孫都丸啓介（三つ）さんの手に依り紅白の綱が引かれゝば西南向きに椅子に腰掛け足を組んだ溫容な校長の學者らしい姿が圍らされた紅白の幕にくつきりと浮く。やがて樂人の奏樂裡に降神、献饌、祝詞奏上、祭主蒲生理事長の式辭、建設委員長林理事の別項の如き經過報告、來賓成澤上田市長、小池福井縣生絲檢査所長の祝辭次いで神官、針塚校長、同御家族、委員兒玉特許局技師、文理大八木博士、齋藤蠶試上田支場長、製作者石井鶴三氏、安部胤齋氏、中島謙吉氏、來賓代表成澤上田市長、小池福井生絲檢査所長、職員代表井上博士、傭人代表村瀨儀市氏、學生代表母袋忠右衛門君（蠶三）渡邊綱男君（絲三）門田勇君（紡三）三戸部滿君（教二）の玉串奉献、撤饌、昇神の儀、針塚校長の挨拶ありて午後四時半目出度く除幕式を終了した。

（除幕式の光景）

除幕式次第

一、修祓ノ儀
二、除幕ノ儀
三、降神ノ儀
四、献饌ノ儀
五、祝詞奏上
六、式辭
七、經過報告
八、來賓祝辭
九、玉串奉献
十、撤饌ノ儀
十一、昇神ノ儀
十二、針塚先生挨拶

以上

千曲會理事長式辭

茲ニ上田蠶絲專門學校創立二十五周年記念ノ盛儀佳辰ヲトシ朝野貴顯ノ賁臨ヲ辱ウシテ校長從三位勳二等針塚長太郎先生ヲ頌德スル壽像除幕ノ式典ヲ擧行シ得ラル、ハ洵ニ光榮トスル所ナリ。惟フニ針塚先生ハ明治二十九年駒場農科大學ヲ卒業セラル、ヤ國家ノ將來ハ蠶絲業ノ進展ニ俟タルザルベカラザルモノトナシ進ンデ東京蠶業講習所及生絲檢査所ニ職ヲ奉ジ大イニ斯業ニ貢献サレ、後東京高等師範學校ニ轉ジ更ニ文部省實業學務局ニ奉職セラレ專ラ我國ノ實業教育ニ盡瘁サル。明治三十九年選バレテ海外ニ留學シ其ノ間ニ獨逸ノ農業教育ニツキ研鑽ヲ積ミ歸朝後尙引續キ文部視學官トシテ其ノ蘊蓄ヲ傾倒シ實業教育ノ振興ニ努力セラル。時適々國家ノ蠶絲業高等教育機關設置實現ノ運ビニ伴ヒ明治四十三年上田蠶絲專門學校ノ創立セラル、ヤ特ニ擧ゲラレテ校長ノ重職ニ就カレ勤續二十五年以テ今日ニ至ル。實ニ先生ノ過去ハ殆ンド實業教育ニ献ゲラレ就中蠶絲業教育ハ先生畢生ノ使命ニ庶幾ク母校今日ノ隆昌ト我國蠶絲業ノ飛躍的伸展トハ實ニ先生ノ奮鬪ニ負フ所大ナリ　先生ハ至誠一貫蠶絲業ノ啓發ニ盡瘁セラレ特ニ教化ノ重點ヲ德ニ注ガレ質實剛健眞摯廉直ノ校風涵養ニ努メ實踐躬行其範ヲ垂ル　既ニ先生ノ薫陶ニ浴シ社會ニ出デタル一千五百有餘ノ卒業生ハ皆深ク其意ヲ体シ各々其本分ニ從ヒ奮鬪努力以テ先生ノ教訓ニ悖ラザランコトヲ之レ努ム　今ヤ先生ノ教化德風ハ海内ニ遍ク其崇高ナル人格ト該博ナル學識トハ万人ノ均シク敬慕シテ止マザル所ナリ　此ノ秋ニ方リ先生ノ功績ヲ廣ク頌ヘ其高德ヲ後世ニ傳ヘントシ千曲會員相圖リ母校教職員及ビ關係者並ニ有志各位ノ協力賛助ヲ得茲ニ針塚先生ノ高德偉功ヲ欽仰スル壽像建設ヲ了セリ。衷心慶祝ニ堪ヘズ　宜敢ク壽像建設ノ精神ニ則リ自今千曲會員一同益々先生ノ訓化顯揚ニ精進シ粉骨碎心以テ先生ノ鴻恩ニ應フルヲ得ベキカ　聊カ蕪言ヲ呈シテ式辭トナス。

針塚長太郎先生壽像建立經過報告

上田蠶絲專門學校千曲會は昭和八年十一月二十三日の代議員會に於きまして校長針塚長太郎先生の壽像建立の件及之に要する豫算壹萬參千圓を議決致しました。

越へて九年三月壽像建立委員として兒玉、八木、齋藤、林、外十名が選任せられ委員は理事者と會合協議する事數回四月之れが原型の製作を東京市石井鶴三氏に依頼しました。同氏は一年二ケ月の間原型の製作に專心努力せられ本年七月に至り完成しましたので直に之れが鑄造を東京市安部胤齋氏に依頼しまして十三日早朝本校庭に到着致しました。

一方此の壽像建立の位置選定につきましては文部省及學校當局の指示並に諒解を得又建立については本縣知事の許可を得て工事に着手致しました。壽像の台石を始め庭石は小縣郡滋野村和村及本原村所產にして之れが選定に當りましては山浦政氏に負ふ所少なからず又御所有の方々は悉く此の企に賛し吾等の求めに應ぜられました。壽像の据付造園等は石井鶴三氏指示の下に鹽川村長谷屋良一氏に依り又像標の書は佐久出身比田井天來氏の手を煩したものであります。

終りに本計畫は獨り千曲會員一千五百名の醵出金に依れるのみならず母校教職員傭人學生全員等の協賛を仰ぎ且又此の企を傳へ聞く篤志家の翼賛を受けました。斯くて些かの滯りなく工事が完く終りまして本日母校廿五周年の記念日に之れが除幕式を擧行する事を得ました次第であります。

上田市長祝辭

維時昭和十年十月二十一日菊薫ル好季ヲトシテ茲ニ上田蠶絲專門學校々長針塚先生ノ壽像除幕ノ式典ヲ擧行セラル　學界ノ盛事師道ノ儀表誠ニ之ニ過ギタルモノ无シ　先生ハ仁俠ヲ以テ鳴ル群馬ノ產夙ニ文部省督學官トシテ令名有リ　明治四十三年當專門學校ノ創立セラル、ヤ命セラレテ校長タリ　爾來黽勉努力暫クモ息マス　櫛風沐雨二十有五年一千五百有餘ノ卒業生ヲ出シ其學界ニ蠶絲界ニ將タ政界ニ人材輩出ノ多キ擧ケテ數フ可カラス　之レ一ツニ先生ノ德化ノ至ス處タリ　其校風ノ純正、其研學討究ノ旺盛將ニ校運隆々トシテ全國蠶絲界ノ權威タル又一ツニ先生ノ至誠ノ至ス處タリ　先生今ヤ耳順ヲ越ヘテ愈々矍鑠學德益々高ク路傍又相傳ヘテ欽仰セサル無シ　今千曲會先生ノ威德ヲ慕ヒ其壽像ヲ校庭ニ至シ以テ永ク尊容慈眼ヲ仰カムトス　誠ニ所以有ル哉　不肖又賀筵ニ列シテ祝詞ヲ述フルノ光榮ニ浴ス　感激ノ至リニ堪ヘス　敢ヘテ蕪辭ヲ陳シテ以テ責ヲ塞クト云フ

市協賛會招待懇親夜會

市協賛會招待の懇親會は二十一日午後五時より即ち壽像除幕式終了後市公會堂に於て開催された。出席者は來賓、卒業生、母校職員、縣郡市有力者等六百名に達し開宴前階下控室に於て上田藝妓連中の末廣、小鍛冶、菅平スキー小唄、菅平高原小唄、上田小唄、眞田音頭の手踊があつた。宴は六時に開始され成澤市長の歡迎の辭、來賓を代表して山桝參與官の感謝の辭があつた。かくて七時半成澤上田市長發聲上田蠶絲專門學校萬歳を三唱して散會した。宴後觀水亭に於て貴賓の二次會があつた外各所に於て同窓有志會が行はれ市内の料亭及藝妓は母校關係で占有されてしまつた。

（懇親夜會）

祝賀提灯行列

十月二十一日全市に漲ぎる二十五周年祝賀熱の中に午後五時三十分本校正門前に集合した提灯行列參加部隊はその數約六百人、定刻六時に至るや出發相圖の花火一發轟然中天に炸烈すると共に、講堂前に天皇陛下萬歳を三唱、二十五周年祝賀の歌を高唱して校門を出發した。參加部隊の順序は次の通り、これに先頭を常入消防組員と警官とが十數人にて警戒して吳れた。

（祝賀提灯行列）

提灯行列參加部隊及順序

一、本校高張　二
一、本校万燈　一
一、音樂隊
一、本校職員學生傭人、學生各科万燈一ケ宛
一、本校高張　二
一、中等學校生徒有志者
一、青年學校生徒有志者、小學校生徒有志者
一、青年會有志者
一、上田市民有志者

開校二十五周年記念祝歌

（祝典係編、アムール河の曲にて歌ふ）

一、淺間の嶺の黎明の色
　千曲の流れに光る月の
　清き訓を仰ぎつゝ
　二十有五の星霜を

二、銀月高き秋の夕
　祝宴の灯赤ければ
　いざ諸共に歌はなん
　光榮ある歴史偲びつゝ

三、都の花をよそにして
　同じ理想の學び子が
　蠶絲の道を究めつゝ
　雄圖を一路辿るかな

四、時世は移り變るとも
　我等は進まん一筋に
　父祖の遺せる蠶絲業
　これぞ御國の富の基

五、あゝ傳統の香に醉へる
　我が學園の同胞よ
　共に前途を祝はずや
　たゞ感激の涙にて

行列の進行順路は常入を下り、中程より櫻木町を通り大門町、横町、熊の小路、鷹匠町より松尾町を上り中央十字路より新參町を通り市役所及公會堂の前にて上田市及本校の萬歳を三唱した。途中各町の青年團、町内有志、學校關係請負者等の思ひ〳〵の出車が辻々に待ち合せて合流するものを合せて蜿蜒長蛇の列は音樂隊を先頭に千名を超す盛況にて各町の沿道は近在より來りたる見物人で全く人垣を築き整理の警官も汗だくの有樣、屋根の上からはポン〳〵と寫眞班のフラッシュの音、全市擧げて祝賀の興奮に捲込まれた。

この夜五時より公會堂にては來賓の大夜會あり。この前を萬歳を連呼して過ぎ百間堀より木町、紺屋町を通り再び木町に出て房山、川原柳町、愛宕町を下りて坂井田町より鍛冶町に目掛け海野町に下りて再び郵便局角より原町を上り中央道路にて佐藤教授發聲にて本校の萬歳を三唱して解散したのは九時頃であつた。

然して同夜參加の萬燈の内趣向奇拔なものを擧げると次の如くである。

△母校各科の三間大の大蠶繭枠燈籠△丸通の宅扱△下房山の蠶囃し△松尾購買のグロ獅子△田町青年の蠶蛾禍槌△海野町の花燈籠△東都庇の蠶蛾△釜善の大釜△山サの齒車燈籠大繭△原中の三角塔梯子提灯△原一の大蠶△花岡のベーラムナポレオン△小林寫眞舘のタンク△房幸の生達摩△上房區の田子作大當繭△上田劇場のキングコング。

（平尾記）

記念學術講演會

祝典第二日十月廿二日は朝來の快晴である。同日午前九時より母校講堂に於て織維工業學會特別講演會を開催され正午終了上田商工會議所伊藤會頭の招待にて千曲會館樓上にて午餐會があり午後一時より日本蠶絲學會特別講演會に移り五時半終了した。兩學會共非常なる盛況にて聽講者千名を超へ得る處多かつた。講師及題目は左の如くである。講義の内容は兩學會誌に記載される外特に本校の便宜を計り別刷とし各一部十五錢位で分讓する筈である。

（記念學術講演會……織維工業學會　飯野氏講演中）

織維工業學會學術講演會次第（自午前九時至正午）

一、開會の辭
　織維工業學會　理事　三田村　健
一、挨拶
　上田蠶絲專門學校長　針塚長太郎
一、挨拶
　織維工業學會理事長
　工學博士　井上　仁吉
一、人造絹絲の「コロイド」化學
　京都帝國大學工學部
　教授　工學博士　櫻田　一郎
一、絹織物製造に就て
　桐生高等工業學校
　講師　飯野　知次
一、日本綿工業の特徴と將來の展望
　東京工業大學　講師　渡邊　周
一、閉會の辭
　織維工業學會　理事　三田村　健

日本蠶絲學會臨時學術講演會次第（自午後一時至午後五時）

一、開會の辭
　日本蠶絲學會副會長
　農學博士　勝木　喜董
一、挨拶
　長野縣知事　大村　清一
一、我國蠶絲業の現在と將來
　上田蠶絲專門學校長　針塚長太郎
一、飼育並に上蔟條件と繭絲纖度との關係
　長野縣蠶業試驗場長　水井壽一郎
一、動物纖維の構造に就て
　蠶業試驗場囑託
　理學博士（ジュネーヴ大學）　吳祐吉
一、蠶絲構造に關する最近の研究
　名古屋高等商業學校
　教授　理學博士　小原龜太郎
一、蠶絲教育の動向に就て
　東京帝國大學農學部
　教授　農學博士　佐藤寛次
一、閉會の辭
　日本蠶絲學會々長
　農學博士　宗正雄

商工會議所招待晝餐會

上田商工會議所では織維工業學會講演會終了後即ち廿二日正午より千曲會館樓上に於て講師、母校職員、卒業生、市有力者等約百名を招待して座談會旁々晝餐會を開催した。商工會議所會頭伊藤傳兵衛氏の挨拶に對し講師側を代表して織維工業學會井上理事長の感謝の辭があり一同フォークを動かしつゝ意見を交換した。

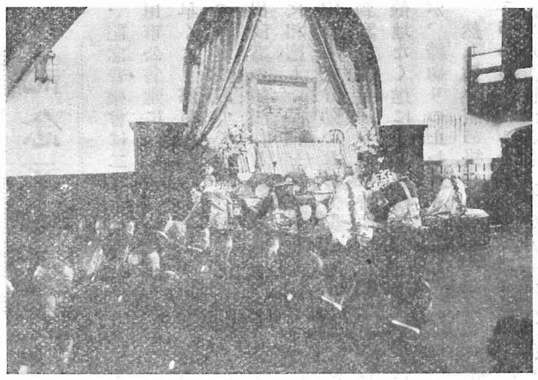
講演會講師慰勞會

母校主催の織維工業學會及日本蠶絲學會特別講演會講師慰勞兼懇親會は廿二日午後六時即ち蠶絲學會講演會終了後直ちに市公會堂に擧行された。出席者は講師の外母校職員、卒業生、市有志等百五十名に達し先づ校長の感謝の辭があり井上織維工業學會理事長、兩學會講師を代表して挨拶があつて宴に入つた。宴酣なる頃宮下智三郎氏の指名に依り成澤市長發聲にて一同織維工業學會及日本蠶絲學會萬歳を三唱し散會した。時に七時半頃であつた。

（講演會講師慰勞會）

物故者追悼會

祝賀第三日目廿三日午前九時より講堂に於て物故者追悼會を催した。當日午前十時より校內一般參觀が許されるので開門を待つ群衆の爲めに混雜を恐れて玉屋旅館前にて遺族の受付をなし紋章を渡し同旅館に少憩せしめ後學校會議室に設けられたる遺族控室に案內し定刻迄茶菓の接待をなした。當日の導師半田孝海師等に對する迎への自動車は七時五十分に出した。開會は飾付の都合で豫定の九時が九時半に延びた。祭壇は壇上に物故者百六十九名の塔婆を竝べ生花造花を配して莊嚴を極めた。參列者は遺族卅四名に母校職員、傭人、卒業生、學生等を加へて三百餘名に達し別項式次第の如く進められ僧侶の十方念佛に次いで針塚校長の弔詞、同窓生總代原田兵衞氏及學生總代渡邊綱男君の弔詞があり續いて僧侶の讀經之の間に遺族、校長、同窓生代表、學生代表其他の燒香があり後唄、六種回向の後半田師より法話があつて最後に遺族代表阿形輝司氏より謝辭があり午前十一時追悼會は終了した。遺族は再び元の控室にて休憩させ此處で塔婆及モス一反宛を贈り尙後日追悼會の記念寫眞一葉宛を送呈する旨井上教授より挨拶があつて十一時半解散した。



（母校關係物故者追悼會）

僧侶

常樂寺（別所村）半田孝海師外二名
大輪寺（上田市）近藤超禪師
宗吽寺（上田市）桑澤俊盈師

追悼會式次第

一、職員同窓生學生着席
二、遺族來賓着席
三、入　堂
四、伽　陀
五、三禮如來唄
六、供　養　文
七、表　白
八、敬　禮　段
九、六　根　段
十、四　海
十一、十方念佛
十二、上田蠶絲專門學校長弔詞
十三、同窓生總代弔詞
十四、學生總代弔詞
十五、誦經（此間燒香）
十六、後　唄
十七、六種回向
十八、法　話
十九、出　堂
二十、遺族代表挨拶
廿一、遺族來賓退場
廿二、職員同窓生學生退場

經文

啓建懺摩場追薦冥資處爲喰受法味證明功德降臨來儀神祇百靈爲各々倍增威力顯場
佛事一切神分
　般若心經丁
　大般若經名丁
愼敬白久遠實成釋迦本師寶塔證明多寶世尊究竟醍醐一乘妙典普賢妙德諸大補處身子目連諸聲聞衆總盡空法界一切三寶而言
方今
於娑婆世界一四天下南閻浮堤大日本國上田蠶絲專門學校此之講堂淨信施主本校同窓會爲
各靈追福引屈敎門智象令修法華圓頓妙懺莊嚴壇場切祈增進菩提
　其旨趣何者夫
一心敬禮妙華
　頓結實相常住覺果
六根懺摩法水
　忽淨無始劫來塵垢
　誠是
三世諸佛巳證奥藏一切衆生成佛直道伏惟
當會精靈平素德惟馥
世間名既彰
吁　時耶命耶
息風罷休辭娑婆界
月陰又雖出
人逝再不還
可憫々々可憐々々
自爾以降歲曆變遷永空忌辰頻到昭和十年十月廿三日當迎本校創立廿五周年生前知友雲集十方相會千斯擧弔祭典偲昔撫今歿後之光榮豈有過之者乎在天之靈歡喜微笑宜享之而可也
　茲今
恭備燈明香華供具專薦醍醐毛上法味仰願過去覺靈倶指一乘大車直詣五百寶所
　重乞
一天泰平四海靜謐風雨順時百穀豊熟金輪聖王御願圓滿佛日增輝法輪常轉來會諸星二世安樂乃至法界平等利潤
　觀夫
飛鴻叶雲
追慕哀愁情轉濃霜楓染林
莊嚴淨土相方鮮
景象契時
得脫奚疑
　啓白辭摛新願意切
　三寶證明諸天洞鑑

參列遺族氏名

（物故者）　（參列遺族名）
阿形　銳司（職　員）阿形　輝司氏
青木　厚（傭　人）青木虎一郎氏
新井武四郎（傭　人）新井　牛三氏
荒木一二三（卒業生）荒木六次郎氏
池田みつえ（學　生）池田定次郎氏
市川　たつ（卒業生）市川督治郎氏
一之瀨貞嗣（卒業生）一之瀨守嗣氏
大池　彰（卒業生）大池　康司氏
川上　ツイ（傭　人）川上勇二郎氏
神林　正一（卒業生）神林ちやう氏
金井　陸（傭　人）金井　良氏
北澤　和（職　員）北澤　さと氏
後藤　榮一（卒業生）後藤　純一氏
小林　貫一（卒業生）小林　藤樹氏
小林　立夫（卒業生）神岡　一郎氏
佐藤　彰二（卒業生）佐藤善右衞門氏
佐藤　愛之（卒業生）佐藤八郎右衞門氏
田子　英人（卒業生）田子　雄一氏
瀧澤　義雄（學　生）瀧澤　久七氏
高島　節平（傭　人）高島　のい氏
中根　廣（卒業生）代　中山　鑑一氏
納谷　藤十（傭　人）納谷　はる氏
馬場　政友（卒業生）馬場　昭氏
箱山　六郎（學　生）箱山平八郎氏
樋口　琢磨（卒業生職員）樋口　光子氏
藤澤　千蔭（卒業生）藤澤　直枝氏
松澤　德榮（卒業生）松澤　由彌氏
宮下　雅敏（卒業生）宮下　美藏氏
宮城　嘉員（卒業生）宮城　英昭氏
武藤　俊治（卒業生）武藤信太郎氏
森澤　忠三（傭　人）森澤かめの氏
柳澤　昇（卒業生）柳澤喜巳治氏
山崎　とも（卒業生）山崎宗三郎氏
依田　博（學　生）依田長兵衞氏
計　三十四名

香料持參者氏名

金貳拾圓也　原　唯次郎氏
金壹圓也　藤澤　直枝氏

物故者氏名

職員（計八名）
阿形　銳司　小澤　綱吉　北澤　和
高橋　清七　田中　清　瀧野　多喜
三谷　徹　三吉　米熊

傭人（計十三名）
秋山　義行　青木　厚　新井武四郎
川上　ツイ　金井　陸　齋藤　敏子
齋藤乙三郎　高島　節平　中澤　定雄
納谷　藤十　松坂　千代　森澤　忠三
龍　猛人

卒業生（計一二〇名）
雨宮　章　荒木幸四郎　荒木一二三
岩住　正明　池田　泰男　伊藤　喜平
岩田重左衞門　伊藤　富次　一之瀨貞嗣
井川　清　井熊虎太郎　井上　泰利
居相　泰一　市川　たつ　臼田　詮雄
浦野　英一　內川　俊一　上田　忠景
植村　秀男　上原　安夫　梅澤庫太郎
永曾　豊吉　小澤　勇　大塚　成幹
大崎　忠一　大畠　秀　岡田　勝宏
大池　彰　荻野　巖　大塚　清治
小口　一枝　越智　岩平　影浦　年丸
川島　甲一　金澤　丈也　神林　正一
唐澤　藤藏　蒲場　深　加藤德四郎
北原　保三　栗原　茂　栗原　貫次
栗原　忠夫　小守　末吉　小山健次郎
甲田　昇　小松　義夫　小林　立夫
後藤　榮　小林　貫一　坂本　昌造
佐藤久太郎　雜賀喜久三　佐藤　道
佐藤雄次郎　酒井　利夫　澤田英二郎
坂本　孝子　佐藤　愛之　佐藤　彰三
品川　末夫　鈴木　俊彦　鈴木　貞治
關川　宗男　仙場秀次郎　關田　艷子
園田　駒吉　曾我龍五郎　田中　熈
田中　泰二　田中　敎一　田村　齊
田中　定雄　武田豊太郎　竹內　清
田子　英人　土田　六衞　友松薰太郎
中根　廣　中川　劉　中村　幸吉
中曾根誠一　新宮　源八　西山嘉都治
沼田　周造　原　正一郎　八田直次郎
馬場　政友　馬場　豊　原　亮敏
平野　定雄　樋口　琢磨　福島　新吉
藤澤　千蔭　堀越　由治　堀場　友市
堀江　文雄　松澤　德榮　松久　鼎
松浦　清　眞崎　幸一　松田　敬三
宮城　嘉貞　宮川寅之助　水野米太郎
三浦　八郎　三浦　與六　宮下　雅敏
水島由太郎　宮島　はる　向山　隆祠
村瀨小十郎　武藤　俊治　向山紀元治
森　國彥　矢島　孝雄　山田　萬治
山口　總一　柳澤　昇　山崎　とも

學生（計二九名）
安藝　虎彥　安藝　剛毅　青山　直香
井上　忠　池田みつえ　梅澤　孝雄
浦上　隆　奥野慶次郎　幸島　正道
香取　美彰　北原　修治　喜多美千代
北原　俊一　小林　英三　後藤　信夫
佐藤　有平　澁澤　茂　清野　靜江
瀧澤　義夫　田雛　廣　丹羽　正二
箱山　六郎　松　豊良　宮坂　正則
水野　正三　母袋　忠助　橫山　勝義
吉岡　孟夫　依田　博

總計　一七〇名

學校長弔詞

上田蠶絲專門學校創立二十五周年記念ヲ機トシ本日玆ニ大追悼會ヲ催シ香華ヲ具ヘ謹ンデ故本校教授三谷徹氏外故本校職員七名故本校卒業者百二十名故本校學生二十九名竝ニ故本校雇傭員十三名ノ靈ヲ祀リ憶ヲ諸氏在世ノ當時ニ馳セテ深ク哀悼ノ意ヲ捧グ

想フニ諸氏ノ中ニハ或ハ天壽ヲ全ウシテ永ク榮光ヲ傳フルアリ或ハ學中途ニシテ夭折ノ憾ヲ後世ニ殘ス者アルモ等シク本校ノ盛運ニ貢獻セラレ本校ノ今日アル實ニ諸氏在世ノ功績偉大ナルニ由ル　今ヤ本校モ創立二十五周年ヲ迎ヘ盛大ナル記念式ヲ行フニ際シ諸氏ノ殘セル偉業ヲ思ヒテ欽仰追慕ノ情轉切ナルヲ覺ユ　唯憾ムラクハ幽明其ノ境ヲ異ニシ偕ニコノ盛儀ヲ欣喜祝福スル能ハザルヲ

本日諸氏ノ同僚子弟ハ勿論本校ノ職員同窓生及學生相會シテ諸氏ノ遺族ヲ招ジ相共ニ哀ヲ銜ミ誠ヲ致シテ諸氏ノ冥福ヲ祈ル　希クハ在天ノ靈髣髴トシテ來リ饗ケヨ

（窪田記）

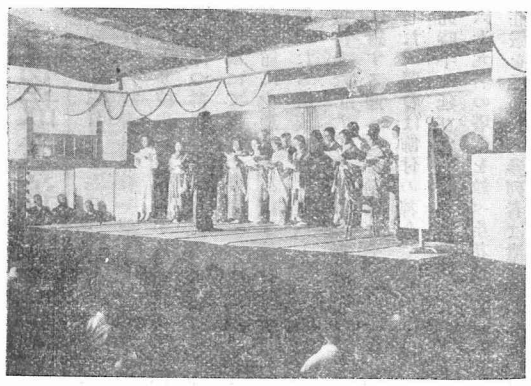
記念音樂會

記念音樂會は二十三日夜六時半より上田市公會堂に於て華々しく開催された。早くより係員の諸氏準備万端に怠りなかつた甲斐あつてプログラムの編成と云ひ出演者の顔觸れと云ひ本校の記念音樂會に相應しい品位を加へる備へにてそれに宣傳も充分効いたので開會前より聽衆殺到刻々に增加し、七時頃には滿堂立錐の餘地なく遂に來會者には氣の毒であつたが、締切りの止むなきに至つた。

然し尙も詰め掛ける聽衆のため塀や硝子戸の破られる恐れあり、遂に警察署に警官の增員を依頼して取締りをして貰つた。入場全員は定員千六百人を遙かに超過して二千人以上は確實と思はれた。

出演者はソプラノ歌手柳澤千惠子孃（東京音樂學校の本年度新卒業者）ヴアイオリンは兎東龍夫氏（海軍々樂隊教官、東京音樂學校講師）ピアノは守田貞勝氏（武藏野音樂學校教授）セロは酒井悌氏（國立音樂學校教授）箏及三絃は市內間瀨雅靜氏社中、合唱は市內からたち混聲合唱團、尺八は橋本廣氏と竹內善吾氏の二先輩をお願ひした。校歌及ハーモニカ合奏は本校音樂部員の桑木正義、安部重、星野智、齋藤修一、宮原英俊、武井仙太郎、小鮒啓助、日幡暎一、石松博、長谷川敏文、富士巖、都筑正一、市村正、阿形一三、和田利章、野口晃、叶澤弘、浦野育郎、根岸市郎、の諸君である。以上何處へ出しても引けをとらぬ出演者の顔觸れであつた。

プログラムは次の通りである。



（音樂會……からたち混聲合唱團の合唱）

第一部

1、合唱……本校音樂部
　校歌（上田萬年詞、東京音樂學校曲）
2、ピアノトリオ…ピアノ　守田　貞勝
　ヴアイオリン　兎東　龍夫
　セロ　酒井　悌
　ト短調第一樂章アレグロ…（ベートベン作）
3、獨唱……柳澤千惠子
　A、旅愁（中等唱歌集より）
　B、故郷の廢家
4、三曲合唱……箏　尺八　間瀨雅靜社中
　竹內越雪
5、セロ獨奏……酒井　悌
　A、永日小詠……（酒井悌作）
　B、スケルツオ…（ゲーン作）
6、獨唱（合唱付）……柳澤千惠子
　A、才女……（スコット作）
　B、オールドブラックジョウ（フオスター作）
　休憩

第二部

7、ピアノ獨奏……守田　貞勝
　A、夜想曲（ロ長調）
　B、ワルツ（ホ短調）……（ショパン作）
8、尺八獨奏……橋本　治山
　岩淸水……（中尾都山作）
9、ハーモニカ合奏……本校音樂部
　ドナウ河の漣…（イバノビチ作）
10、ヴアイオリン獨奏……兎東　龍夫
　A、アンダンテ、トラレクイロ……（ベリオ作）
　B、オペルタス（マヅルカ集より）……（キニアフスキー作）
11、合唱……からたち混聲合唱團
　羽衣……（ハウプトマン作）
12、獨唱……柳澤千惠子
　A、牧人の嘆き
　B、アベ、マリア
　番外　尺八獨唱……橋本　治山
　木枯……（中尾都山作）
13、ピアノトリオ…ピアノ　守田　貞勝
　ヴアイオリン　兎東　龍夫
　セロ　酒井　悌
　アダヂオ、プレスト、モルト……（ハイドン作）

定刻六時半に十分遲れて開會先づ祝典係長佐藤利一教授の開會の挨拶あり約五分間にして直ちにプログラムの第一部に入つた。

懷しい校歌の合唱に來賓の先輩各位には一入感慨を深くされたであらう。八時三十分一部終り十分間休憩の後二部に移つた。ピアノの急調、ヴアイオリンの典雅、箏のきらびやかに、セロの莊重に、尺八の獨奏は番外に『木枯』を加へ、合唱の美しいハーモニーに滿場陶然、大成功の內に平尾氏簡單なる閉會の挨拶を述べ全曲目を終りこゝに意義ある音樂會の幕を閉ぢた。時に十時、係長佐藤利一先生を始め係の諸先生の御努力に依り華々しき成功を收めたのは誠に感謝に耐えない處である。

（平尾記）

校內參觀

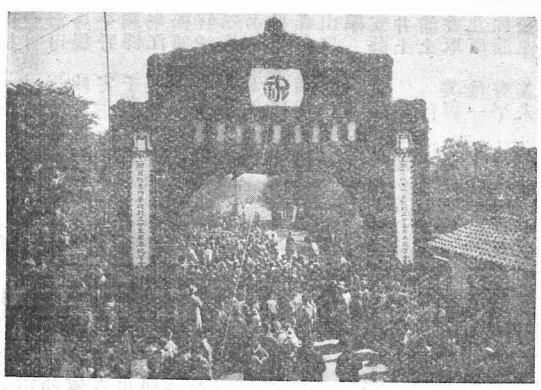
廿五周年祝賀に對する一般市民の期待は校內參觀にある。

廿一日は來賓に對して午前十時より校內を案內した。廿二日は午後より本校職員傭人卒業生學生の家族及講演會聽講者に限り入場券を發行し參觀せしめ參觀者凡二千名に達した。廿三日午後十時より三時迄一般參觀を許可する事となつたが定刻前既に門前は群衆殺到し遂に早めて九時半開門入場せしめ上田市消防組も應援に來り整理に努めた。廿三日の入場者は約二万、廿四日は九日より入場せしめたが觀衆は前日より更に增加し遂に一部宛區切つて入場せしむるに至つた。同日の入場者は約三万五千と稱せられた。廿五日は小學校々庭運動會もあつたせいか前日より多少減少し約一万五千の入場者であつた。

校內參觀順路

母校參觀のコースを大体示する次の通りである。まづ校門を入り途中上田郵便局出張の記念スタンプ押捺所を徑て第一號（南側）蠶室と第二號（中央）蠶室の間の東側廊下中央より入り第一號（南側）蠶室の養蠶科陳列を見つゝ西に進み貯桑室に入る處に蠶二の飾物『金のなる木』及『上田風景』がある。貯桑室は床に水を張橋を架けた蠶三のパノラマ『松島夜景』がある。貯桑室を出ると蠶一の爆彈三勇士をもぢつた人絹突破蠶勇士の飾物がある。其隣には產繭處理統制問題を取扱つた蠶三のパノラマ風景がある。それから第二號（中央）蠶室に入り養蠶科陳列を見て東へ進む。之の室には大日本蠶絲會出品の皇太后陛下御染筆其他の陳列がある。

更に東に進み二號蠶室から生徒控室へ行く途中の廊下に學生賣店があり繪ハガキ靴下石鹸等を賣つてゐる。生徒控室は上田商工會議所主催の上田地方生產品の卽賣展で當地の有力商店數十店が出品してゐる。それから北側の製絲工場に入り水分檢査室（第一室）、作業をしてゐる多條製絲機、加撚繰絲機（第二室）、製絲科陳列場（第三室）を經て教婦養成科教室（第四室）へ行き池之坊及順天古流生花陳列、養成科生徒の手藝品陳列を見て教婦養成科舊教室（第五室）に至る。此處には絲三の產繭處理統制法案を取扱つた飾物と絲一の藝術作品『沙漠の祈り』がある。それから大和式の入つてゐる乾繭室（第六室）を通り南の製絲工場（第七、八室）の東側から入る。此處は煮繭機も製絲機も運轉し製絲陳列品を飾つてある。再繰室を經て再び製絲の陳列品（第九、十室）を見て乾燥室から紡織工場に入る。乾燥室には紡織科の飾物母校が纖維大學となつた『百年後の上田市』がある。それから精練、製綿、製絲、紬絲、撚絲、機織、仕上の順で紡織工場は終了する。工場內に各種の試驗機械が据えられ又神科村より出張のホームスパン實演がある。此處を出て北側の製圖室に入る。之の室は學校職員夫人連の生花陳列と學生賣店で石鹸、靴下大島紬、結城紬、便箋等を賣つてゐる。それから校長壽像の前を廻つて南側の製圖室に入る。此處は紡織科の陳列で各種紡績人絹織物編物等が陳列されてゐる。それから化學實驗室に入る。此處には蠶絲化學關係の陳列品がある。最後に人絹工場の運轉を見て人絹工場の横から外へ出ると云ふコースである。普通一廻りするに四時間はたつぷりかゝると云ふ。



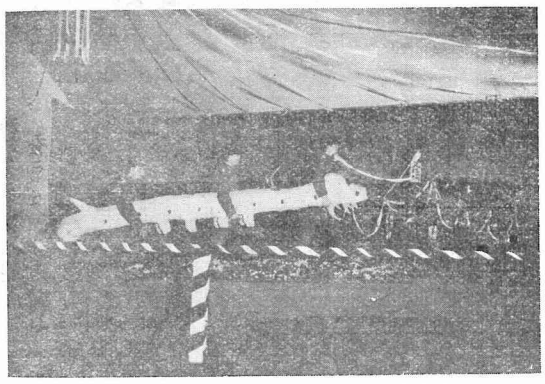
（母校門前のアーチ）

養蠶科展覽會場

會場は一號と二號の蠶室を連絡する廊下の中途より入口が作られた。これを入つた參觀人は一號蠶室にゆく。陳列は階下のみである。最初の二部屋は統計及一般的參考品を並べた。品目は次の通り。

一、蠶種製造行程（上田蠶試出品）
一、上田えんどう栽培實物（〃　）
一、ひしもん横ばへに依る桑樹萎縮病標本（長野蠶試出品）
一、本邦養蠶戸數分布狀勢模型
一、普通蠶種製造額分布狀勢模型
一、桑よりの製炭方法と實物（上田蠶試出品）
一、繭十貫匁に要する生産費（模型にて）
一、繭一貫匁の生産費（長野蠶試出品）
一、上田式自然上簇器上簇實況（小縣蠶業出品）
一、蛋白質添食試驗成績（表と繭）（長野蠶試出品）
一、本縣桑園分布圖（長野蠶試出品）
一、本縣の桑品種別の分布圖（長野蠶試出品）
一、養蠶關係古書（藤本蠶業株式會社出品）
一、雲坪のバストールに關する軸（〃）
一、養蠶双六（橋本善三氏出品）
一、乾濕計（清水長之助氏出品）
一、養蠶關係古書（猪坂直一氏出品）
一、古代養蠶方法掛圖（濱村金作氏出品）
一、軸及浮世繪
一、養蠶具（東亞蠶絲商會出品）
一、繭切開機（日龍蠶種株式會社出品）
一、感應起電機
一、空氣孵化器（蠶種同業組合出品）
一、人工孵化器　ばら種製造器

次の第三室は入口に蠶神を祭り中に入ると狹い宿直室が長く使つてあり薄暗いトンネルがうね〳〵と續く。『金のなる木』があると云ふ。行きついてみると大きな吊鐘の前に薄汚ない丸太が荒繩につるされてゐる。正しく『鐘の鳴る木』の人を喰つたもの。これを拔けると次室はパノラマ風の風景なか〳〵頭をしぼつたらうと思はれる出來榮え千曲川とお城と本校とが程よく配置され東に淺間が眞赤に火を噴いてゐる。以上二つは養蠶科二年生の飾りもの。


（養蠶科一年の人絹網突破蠶勇士）

次室は養蠶科一年の爆彈蠶勇士。大きな蠶を抱いた三人の兵士が人絹にて作られた鐵條網を破壞すべく突擊するところ一年生らしい稚氣が見えて面白い。次の剉桑室は養蠶科三年の飾りもの時局ものを取扱つた產繭處理統制案號なる列車が農林省山のトンネルを出たところ行手の線路上に幾多の障害あり果して通過しうるやの立札が見えてゐる。統制案の議會再提出を上手に扱つてある。

次室は貯桑室に水を湛え橋を架けた松島の夜景、見事な出來榮えにさすがは三年生と感心する。

こゝを上ると急造暗室の中には（二號蠶室剉桑室）太陽燈と顯微鏡投影裝置とがある。係りの學生は說明と實驗に大童である。參觀者にとつては實驗するものに興があるらしく黑山の人だかり。

二號の蠶室に入ると各教室の陳列になる各室は何れも學生の說明にて專門的なものも解り易くなつてゐる。各室の陳列品目は次の通り。

第一室陳列品目

一、飢餓と脂肪組織の減少（實物標本）
一、蠶の血組織の生體染色（圖及標本）
一、組織材料固定より永久檢微鏡標本作製迄の順序
一、精密體溫測定器
　1、熱電對に依る裝置
　2、電氣抵抗溫度計
一、蠶の體溫（卵より蛾迄體溫曲線をネオンサインにて示す）
一、蠶兒呼出炭酸ガス量測定裝置
一、ヴアンスライク氏血液ガス測定裝置
一、表面張力測定器
一、板野式キンヒドロン水素イオン濃度測定器
一、組織等電點測定法
一、蠶體諸器官の等電點（表）
一、近親繁殖の害（表）
一、家蠶血液理化學的性狀（表）

第二室陳列品目

一、農病蠶に於ける血球及組織（鹿兒島高農出品）
一、加壓釜
一、細菌濾過器
一、動物固定器
一、主要蠶病消毒劑の過去及現在（長野蠶試出品）
一、各種消毒劑の使用法及濃度
一、微粒子及キンケムシ毒毛の實物標本
一、上田市水道の水中細菌數檢査表と扁平培養實物と培養方法
一、各種硬化病菌の純粹培養と病蠶實物及寫眞（群馬蠶試出品）
一、白殭病菌の生態種（長野蠶試出品）
一、空頭病蠶より分離せる連鎖狀球菌（長野蠶試出品）
一、微粒子檢査病毒步合統計表
一、培養基製作順序
一、微粒病原菌發育模型圖
一、白殭病菌發育模型圖
一、扁平培養基及細菌寨落計算器
一、各種病蠶實物標本
一、天蠶に寄生する蠻蛔寫眞（十三枚）（松本蠶試出品）
一、ダニ病蠶及ダニの寫眞（農林省蠶試出品）

第三室陳列品目

一、蠶卵胚子發育模型及圖
一、家蠶の一代實物標本
一、蠶兒絹絲腺の發育狀態實物及代償肥大標本
一、蠶兒及蠶蛾の解剖圖及實物標本及蠶蛹圖
一、蠶の螢光色の圖及蠶兒のレントゲン寫眞及蠶兒頭部の寫眞
一、蠶兒頭部及腹脚及大顎模型
一、消食管及神經、蛹の雌雄、蠶兒營繭狀態、蠶蛾の產卵各種、繭の標本、繭層步合及繭層量の年度別に依る平均表
一、五齡期の食桑狀態及蠶兒の全齡及各齡給與桑量の實物標本
一、鈴木式煤煙法に依る營繭曲線（岐阜縣繭檢定所）

第四室陳列品目

一、家蠶に於ける相引及相反遺傳の實物
一、家蠶の睾丸及び卵巢の發育順序（實物及寫眞）
一、家蠶斑紋の實物標本
一、メンデル遺傳模型四種
一、卵色の遺傳實物
一、卵色の實物標本（群馬蠶試出品）
一、致死因子を伴ふ卵色の遺傳（群馬蠶試出品）
一、裸蛹蠶の遺傳（群馬蠶試出品）
一、アミラーゼの遺傳（長野蠶試出品）
一、ポリプロイド蠶卵の實物及びその染色體の寫眞及實物
一、モザイック蠶の模型
一、色盲の遺傳
一、猩々蠅の染色體地圖
一、トマトに於けるポリプロイド
一、黃色二十日ネヅミの遺傳
一、畸形蠶の實物及模型

第五室陳列品目

一、綠肥種子標本（上田豌豆外十九種）
一、桑の接木法を示す標本（二十種）
一、天柞蠶の生能標本
一、天柞蠶の幼蟲標本（蟻蠶より熟蠶迄）
一、天柞蠶の蛾
一、天柞蠶の繭及絲（安東柞蠶絲檢査所出品）
一、天柞蠶の經過圖
一、天蠶蛾科に屬する昆蟲類（成蟲と繭）十一種
一、桑樹害蟲二十箱
一、繭の害蟲一箱
一、蠶兒と害蟲一箱
一、朝鮮の桑樹害蟲五種
一、クハノシントメタマバヘ驅除法に關する表と成虫幼虫の浸漬標本並にクレオソート乳劑一瓶（長野蠶試出品）
一、クハノシントメタマバヘの寫眞（埼玉蠶試出品）
一、クハノハダニの寫眞（群馬蠶試出品）
一、山形式桑樹仕立法の寫眞（山形蠶試出品）

合計約百四十種類

第六室陳列品目

一、美ケ原の昆虫類（三十箱約三百種）
一、上田附近に於ける天蛾科昆虫類（三十二種）
一、美ケ原の地圖
一、世界及日本に於ける動物分布圖
一、蠶桑害蟲標本（農林省蠶試出品）
一、桑樹害蟲の圖

第七室陳列品目

一、掛圖及實物標本
　1、裏白澁病　2、煤病　3、汚葉病
　4、赤澁病　5、肥大性菌核病
　6、細菌病　7、芽枯病　8、胴枯病
　9、根朽病　10、白紋羽病　11、紫紋羽病
　12、絹絲の褐色化　13、繭かび
　その他病害標本三十箱
一、表及標本
　1、一日中時刻に依る桑葉の澱粉量の變化
　2、貯藏桑葉の澱粉量の變化
一、佛伊栽桑狀況寫眞卅五枚及掛圖六枚
一、圖表三枚
　1、伊佛の養蠶地帶
　2、北信の耕地及桑園
　3、全國各府縣別桑園反別

第八室陳列品目

此の室には大日本蠶絲會出品の畏くも養蠶御奬勵の意から皇太后陛下御染筆の御歌額、色紙、懷紙を始め紅葉山御養蠶所御生產の袱紗額面、生絲、繭等の御下賜品がある。

皇室の尊きお心の程が誠に有難く感じられるのである。

最后の室は陳列品目左の通り。

一、春蠶及夏蠶品種の變遷（長野蠶試出品）
一、指定品種繭標本（熊本蠶試出品）
一、奬勵品種繭標本（農林省蠶試出品）
一、原蠶及原々蠶繭標本（山形蠶試出品）
一、蠶繭の變遷（小縣蠶業出品）
一、蠶胚子發育經過寫眞（京都高蠶出品）
一、伊佛の除沙紙類及散卵掃立用穿孔紙（東京高蠶出品）
一、蠶品種の變遷標本（藤本蠶業出品）
一、桑樹の古木寫眞（山形縣置賜郡農會）
一、桑紙見本（松本蠶試出品）
一、掛圖蠶蛹蛋白粉營養價試驗成績（東京高蠶出品）
一、桑紙製造工程見本（小縣蠶業出品）
一、桑樹製の籠塵取り（熊岳城農試出品）
一、桑木の細工廿四點（荒井貞雄氏出品）
一、絹紙（日本絹紙工業株式會社出品）
一、桑製品種々（岡崎勘助氏出品）
其他城崎溫泉、盛岡地方の桑細工、丹州の桑酒、本校產の蛹醬油、桑酒美髮料、南部桑茶、飛驒の桑茶等があつた。（平尾記）

製絲科展覽會場

第一室は新舊生絲檢査機械オンパレードである。現在一般に使用されておるものは勿論の事、古くは手廻はしのセリプレーン機械而も板はボール紙で出來た凡そセリプレーン機械としてはこれ以上先輩はないと思はれる樣な代物を始め、手廻はしの纇節檢査機等殆んどあらゆる檢査機械を網羅してあり、たかゞ絲の檢査位にこんなに多くの機械が要るものだらうかと素人は一驚を喫した事であらう。

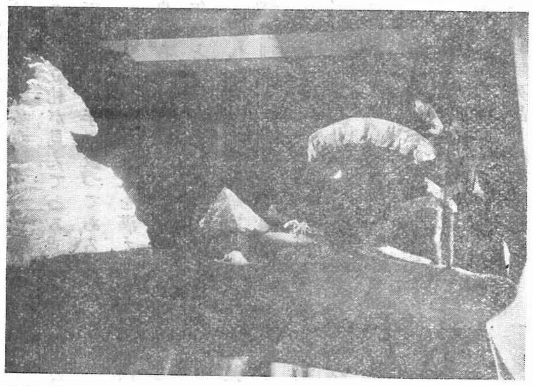
第二室は多條及撚線の工場であり、こゝでは時間を限つて午前二回、午後二回實演を行つた。未だ養蠶科を廻つて來たのみで機械の類はこゝが初めてゞある。殊に動いて居るものには誰しも興味を持つものであり此處で見物の足が止まり警備係りに世話を燒かせたものである。

第三室は製絲科二年の飾り物の部屋であり、生絲の性質例へば彈性、强力伸度等を實物或は模型を以て具体的に表現し或は價格を米のそれと比較する等生絲に就ての常識を涵養するに大いに參考になつた事と思ふ。

第四室は教婦養成科の教室の中四部屋を使ひ生花と手藝の展覽會場である。生花は順天古流と池坊とが各一室づゝ飾り各流儀とも一流大家が腕に撚をかけて生けられた丈あつて實に見事であつた。

他の二室は手藝品を陳列した。手藝品は主として教婦養成科の職員生徒の作品であり、總點數二百五十點餘なか〱の力作が多く、中には素人の手に成つたものとは思はれない樣な出來榮の物も相當多數にあつた。

第五室は教婦養成科の舊教室（貯繭庫の裏）の二室であり、第(一)室は製絲科三年の飾り物で、產繭處理統制法案果して安產か流產かの題下に姫婦の人形を作り傍に達摩藏相と山崎農相が產婆役として据へ蠶絲業なる箱入娘が將來更生への一路を辿るか、或は絕望の淵に沈むかの岐路に立つてゐる所を示したものである。



（製絲科一年の飾物…砂漠の祈り）

次は製絲科一年の飾物の部屋である。沙漠の祈りといふ一寸若い娘の考へ相な題目である。果せる哉娘さん連の評判が大變良かつたとの事である。仕掛けは石膏でスフインクスとピラミツドを作り、手前には椰子の木がありその傍にラクダをひいた土人がひざまづいて靜に夕の祈りを捧げてゐる光景である。そして部屋を眞暗にし、照明をうまく行つて、上手に感じを出し活辯口調のM君の說明もそれを引立てるに充分であつた。

第六室は新しい乾燥場でありこゝには本校獨特の乾繭機附屬裝置があり其說明圖を置いて學生が說明の任にあたつた。

第七室は煮繭場であり、こゝには煮繭機が二台据付けてあり、側壁には張力測定機、MO型煮繭機及YD式煮繭機等の說明圖を置いて之亦學生に說明を行はせた。

第八室は座繰工場であるが片側全部幕を張つて其前に種々なものを陳列した。先づ煮繭場から入つた所には日東製絲の進行式加壓高溫煮繭機の實物模型が置いてあり、實物を見ない人にはいゝ參考になつた事と思ふ。次には增澤商店の出品にかゝる、繰絲鍋の變遷を物語る名種の形の鍋が約四〇箇並べられてあり、又同所出品の明治初年横濱にて使用した秤、小枠、繰絲鍋、木製摺輪、生絲整理器具及繭桝等單に骨董品としても相當價値のある代物であつた。

工場全体に亘つては主として學生諸君の苦心になる製絲關係の繪及圖表が一面に張られ大變に參考になるものが多かつたのであるが一々列擧するに遑がないのでこゝには省略する事とする。

第九室はセリプレーン檢査室であり、

第十室は片倉、郡是室である。先づ片倉の出品は再生絹絲、富士絹、靴下、絹洋服地及人造羊毛等極めて多方面に亘り、郡是の出品物は別記の如く學術的の物多く專門家にとつて大いに參考になつた事と思ふ。又郡是製絲塚口工場の靴下の種々なる標本は一般に又專門家に注目された。以上片倉、郡是は各々その特徵を發揮してゐる樣に考へられた。

其他上州富岡製絲場の創立當時（明治五年）に於ける歷史的資料及本邦生絲貿易の先覺者中居屋重兵衛についての資料は極めて興味あるものであつた。

次に製絲科出品目錄を示す。

片倉製絲紡績株式會社出品。

一、再生絹絲　一括
一、再生銘仙　一反
一、再生銘仙　一反
一、再生ショール　一枚
一、再生ワイシャツ　一枚
一、再生婦人服地　一卷
一、ステープルファイバー　七箱
一、ステープルファイバー製絹洋服地　五本（卷）
一、絹ロープ　二束
一、無音齒車　二個
一、絹織維壓縮板　八枚
一、絹紡絲女神票見本　一ケ
一、絹紡絲金鷹票見本　一ケ
一、絹紡絲赤夷票見本　一ケ
一、絹紡絲サムライ　AAA票　一ケ
一、混紡絲金夷票　一ケ
一、スパン、レーヨン、パラマウント　英八〇双　一ケ
一、スパン、レーヨン、パラマウント　英六〇双　一ケ
一、スパン、レーヨン、パラマウント　英四〇双　一ケ
一、スパン、レーヨン、パラマウント　英四〇單　一ケ
一、スパン、レーヨン、パラマウント　英三〇單　一ケ
一、スパン、レーヨン、パラマウント　英二〇單　一ケ
一、ステープルファイバー　パラマフイル　二〇番　一ケ
一、ステープルファイバー　パラマフイル　一五番　一ケ
一、ステープルファイバー　パラマフイル　三〇番　一ケ
一、ステープルファイバー　パラマフイル　二〇番　一ケ
一、ステープルファイバー　パラマフイル　一五番　一ケ
一、富士絹　KO票　一ケ
一、富士絹　KO晒　一ケ
一、富士絹　KS票　一ケ
一、混紡富士絹　SS　二五〇〇番　一ケ
一、パラマックス平地　八〇〇番　一ケ
一、パラマックス綾地八八〇五番　一ケ
一、佛蘭西縮緬　3K　一四〇番　一ケ
一、靴下　A印　B印　い印　ろ印　各半打宛
一、合服地　二着分　6.0y/A　三卷
一、レインコート地　5y/A　一卷
一、黒白足袋　四足
一、厚地テーブル掛　二枚
一、ネクタイ　一本
一、シャツ上下　一着
一、學生帽　二ケ
一、絹靴下　十六足
一、特殊絹織物　一卷

郡是製絲株式會社出品

一、同社各部ノ縮少寫眞　大一枚（額入）
一、同社生絲ノ主ナル商標　額張一枚（商標九枚張）
一、塚口工場ノ寫眞　三枚（額入全景撚絲沓下工場）
一、繭ト品位ノ關係圖表　三枚（枠入）
一、蠶兒ノ營繭曲線寫眞　二枚（枠入）
一、十四中絲粒別斷面寫眞（陳列台三ケ付）十二枚
一、油繪（繰絲別）　六枚
　共撚式（創立當時）、ケンネル式煮繭分業、沈繰索緒分業、現代
一、靴下見本　十二枚
　（一本撚、二本、三本、四本合セ欠點見本、變編）
一、靴下（塚口工場製品）　八枚
　（二本、三本、四本合セ模樣付）
一、靴下セット　二台
　（ガラスト金屬組合セ見本靴下陳列用）
一、マネキン脚　四本
　（靴下欠點見本陳列用金具付）
一、各品種別蠶卵面ノスンプ寫眞　額張一枚（小寫眞二十四枚張）
一、絹絲蟲類其他
　各種絹絲斷面寫眞額張　一枚
　（小寫眞八枚張）
一、陶汰繭ノ實物見本　十一箱（小箱入）
一、蠶卵色ノ實物見本　六本（瓶入）
一、發蛾ノ實物標本　一本（瓶入）
一、蛾ノ解剖標本　一本（瓶入）
外ニ會社ノ說明書數枚

增澤商店出品

一、撚生絲製反物硝子箱入　六點
一、撚生絲　仝　一點
一、秤　明治初年品　一點
一、小枠　仝　二點
一、繰絲鍋　仝　一點
一、木製摺輪　仝　一點
一、括造器　仝　三點
一、桝　仝　二點
一、繰絲鍋　一號ヨリ四一號迄　三九點
計五十六點

諏訪支會出品

一、生絲商標表裝　一個
一、蠶絲屑物標本　三個
一、岡谷紬及羽二重織物（定價ニテ卽賣モ可ナリ）　七點
一、眞綿加工品（定價ニテ卽賣モ可ナリ）　五點
一、九十九商會製絲藥品　數點

沖濤治氏出品

一、シルクペーパー

日東製絲株式會社出品

一、日東式煮繭機

原富岡製絲所出品

一、富岡製絲所錦繪　三枚
一、明治六年仝所職員錄
一、佛人技師ノ寫眞

安齊幸男氏出品

一、中居屋重兵衛書翰　三通
一、小供教草　仝人著書

化學（古谷教授研究室）出品

一、製絲副產物
　蛹油洗石鹼　一山
　蛹油入化粧石鹼　一山
　粗蛹油、精蛹油　各一ケ
　石鹼素地　一ケ
　石鹼製造廢液　一ケ
　粗製リスリン　一ケ
　精製リスリン　一ケ
　蛹搾粕　一ケ

猪坂直一氏出品

一、明治三十年頃ノ長野縣製絲家商標（當時ノ器械製絲ノ全部ヲ網羅）　三十枚

（鷹野記）

紡織科の展覽會場

紡織科の展覽會場は乾燥室の廊下から始る。乾燥室には紡織科生徒の苦心の作『百年後の上田市』のパノラマがある。それは世界纖維工業の中心となれる百年後のグレート上田の全景で母校は纖維大學に昇格し町は鹽田平は勿論、太郎山腹迄白堊のビルで埋り電燈が點滅し路面にはベルト式電車が走つてゐると云ふものである。それから紡織工場に入る。精練製綿、前紡、精紡、仕上、ミユール、カードを經て撚絲、機織、整理を見て紡織工場は終了する。尙紡織工場には試驗器械を多數陳列し神科村より出張せるホームスパン紡絲及機織の實演があつた。紬絲準備機械、莫大少、染色室は都合上參觀させなかつた。紡織工場を出ると次は製圖室で此處には學生賣店と母校職員夫人出品の生花が陳列されてゐる。此處から校長壽像の前を廻つて講堂東側にある製圖室の紡織科陳列室に入る。

最初之の室は校外の出品物を三科合同で陳列する豫定であつたが紡織科關係のもの許りが多くなり他科では自分の關係のものは自分の室の方へ大部分陳列したので紡織科の陳列室の樣になつてしまつた。即ち各地工場、試驗場、織物同業組合等數十個所より出品八百余點に本校紡織科出品百數十點を加へ千點以上に達した。出品の種類は別記の如く棉毛麻絹人絹の各種原料、紡績工程、絲、織物メリヤス製品及試驗報告、各種統計表等で何れも染織業に活路を見出さんとする上田市民にとつて好個の參考品揃ひであつたが特に人目を引いたものは絹の新規用途製品、緞通、紙布、絹レース等であつた。

出品物は大部分貸與品であるが寄贈せられたものも多數あつた。又同時に大島結城等の如く販賣を委託せられたものもあり之等は學生賣店に於て販賣せしめたが相當の賣行があつた模樣である。末筆乍ら出品の御配慮を賜つた諸氏並に出品せられた方々に厚く御禮申上げる。

（紡織科學生飾物…百年後の上田市）

紡織科陳列室から蠶絲化學陳列室を經て校内參觀の最後に人絹工場がある。一寸他處では見られぬ物である上に、特に參觀期間中運轉し紡絲して見せたのでいやが上にも興をそゝり何時も觀衆で一杯であつた。

次に各地出品の大畧を記すると次の如くである。（○印は寄贈）

一、飾絲二十種　足利市　堀田撚絲工場
一、絹紡フアーベットクッション
一、交織白地（經ベンベルグ絲、緯ステープル絲）　三重縣工業試驗場
一、大島紬製造工程標本　鹿兒島縣工業試驗場
一、大島紬、正藍大島、絹薩摩、大島ネクタイ　鹿兒島縣織物同業組合
一、天幕地、壁張地　山形縣米澤工業試驗場
○一、綿絲紡績工程標本（瓦斯絲）
一、百四十双特殊綿絲
一、縞スパンクレープ、ハンカチーフ　兩毛整織株式會社
一、絹紡絲、柞紡絲、紬絲、柞紡紬絲
一、富士絹（練品及漂白品）絹紬（漂白品）　富士瓦斯紡績株式會社
一、絹緞通、絹紡緞通、絹レース　鐘紡サービス會社
一、佛蘭西縮緬、ジョーゼット
一、フルフアッション靴下、ミラニーズ、トリコット　鐘淵紡績株式會社山科工場
一、結城織物十種　結城織物同業組合
一、絹洋服地、結城紬テーブルセンター生地及ネクタイ　茨城縣工業試驗場
一、兩面縮緬、壁張地、絹洋服地、ステープル應用織物　福井縣工業試驗場
一、ベンベルグワイシヤツ地　福井市　谷口庄市
一、交織絹紬（夏冬服地）　福井市　日本絹紬工業組合聯合會
一、双人紋パレス　福井市　西野商店
一、女王及新富士絹　福井市外河和田村　楊原新十郎
一、紙布五種　福井市　黑川隼人
一、人絹交織縮緬、双人稻妻縮緬、双人並格子ジョゼット　福井精練加工株式會社
一、交織縮緬、双人兩ボーダ　酒伊精練加工株式會社
一、綿絲紡績標本（太絲）　昭和紡績株式會社
一、絹洋服地、絹婦人服地、絹机掛、絹窓掛地　長野縣染織講習所
一、ベンベルグ生地　マルサン織物工業組合
一、大巾錦紗、山道絹縮緬、朱子縮緬、綾縮緬　帝國人造絹絲會社
○一、紡毛紡績工程標本
○一、梳毛紡績英國式工程標本　山保毛織株式會社
○一、梳毛紡績大陸式工程標本二種
○一、紡毛紡績工程標本
○一、毛織物標本十三種
○一、羊毛特殊原料標本卅五種
○一、特殊紡毛絲標本九種　今津紡毛株式會社
一、交織ミラニーズ及トリコット、經メリヤスドレス　神奈川縣工業試驗場
一、メリヤス機械寫眞及各種メリヤス標本　善積武太郎商店
一、ミラニーズ絹及プリント絹（シミヅ）フルフアッション絹靴下　伊藤メリヤス株式會社
一、靴下十九種　内外編物株式會社
○一、黃麻紡績工程標本、黃麻絲十一種　黃麻布七種　東洋麻絲紡織株式會社
○一、亞麻紡績工程見本、製品四十種　帝國製麻株式會社
一、麻織物五種　滋賀縣能登川工業試驗場
○一、ラミー紡績工程標本、麻絲八種、からむし上布　東京麻絲紡績株式會社
○一　ステープル絲（レヨネット）九種　大日本紡績株式會社
○一、綿花十九種　東洋棉花株式會社
○一、紡織染整理用藥品三十六種　第一工業藥株式會社
一、絹新規用途製品
ドアマット、絹久留米絣應用洋傘日傘壁張地男子服地女子服地、絹サンクロス、絹麻混紡織物、絹絨、絹洋服地四種、青色絹ロープ、登山用絹天幕、絹サージ、絹コールズボン地、羽二重落下傘、女學生冬服地、障子布、アルパカ黑裏地、婦人洋服地二種、毛布二種將校軍服絨、戰鬪用帽絨、カーテン地及壁掛地（上田染講）、禮服用絹洋服、五色撚絲片一本双、絹セル、擬編織、絹ゴブラン織壁張地、絹毛交織ネクタイ、絹蚊張、漁網、窓掛地、絹トレーシングクロス、人造三味線皮革、女學生向絹洋服地、絹サロン、四號絨、混絹織物試驗標本帳、網地、絹モスリン特許伸縮織物代用品、絹絨氈、シルクポーラー、タイプライターリボン、絹經メリヤス服地、人絹交織服地、夏服用豊玉織、起毛服地、洋服地標本九葉生絹撚絲絹靴下（藤本蠶業）、眞田絹ワイシヤツ（藤本蠶業）、アトラス日本式腰卷、人絹サンドクレープ、絹カントンクレープ、絹サンドクレープ、絹クレープサテン、人絹カントンクレープ、人絹タフタ、絹フラットクレープ（以上七種外國製品）海軍用襞裝網、無双オーバーコート地、絹メリヤスシヤツ上下、女チンバツクヂョーゼット、交配織婦人服地、絹毛交織、クッション地、冬服地、クールシルク、シルクパレード寫眞帳、シンボル二枚、歐米の絹マーク三點　日本中央蠶絲會
一、外本校紡織科試作品、試驗成績百數十點、統計表數十枚

蠶絲化學展覽會場

蠶絲化學研究室の展覽會場は學生化學實驗室を當て專ら吾蠶絲化學研究室が過去二十五年の間如何に蠶絲業界に貢獻して來たかを回顧する可く陳列に努力した。即ち北側の中央入口より展覽會場に至る廊下の壁には回顧廿五周年我蠶絲化學教室研究事績と題し百になん〳〵とする貴重な研究發表を掲げた（紙面の都合上略す）展覽會場（學生化學實驗室は六間の實驗机が三通り並んでゐる）の中央の机には凸形の臺を設け之れには主として吾研究室の製絲を陳列する事にした。即ち井上教授考案の特別絲に依る柞蠶絲及其織物、絹の新規用途に依るハンドバツク、日東絹毛の洋服地及テーブル掛等其他參考品として絹の新用途製品齒車、ロープ皮革、メリヤス、洋服地等及び人絹標本纖維標本、六川氏の絹紙等、生理化學として各種繭のアミノ酸及古谷教授の研究による絹の脆化細菌等、其他原素標本、香料標本、毒瓦斯標本等を陳列した。

尙又其の兩側には主として本校獨特の定量裝置分析器具類を陳列し井上教授發明の繭の解舒指數、解舒曲線、桑の熟度指數、自記天秤、川瀨先生（舊職員）發明のボルメノメーター、桑葉强靱性測定裝置等を始めアミノ酸エステル分溜裝置、限外顯微鏡、水素イオン濃度測定裝置、土壤分析裝置、眞空器具類等を並べた。之の說明には蠶三及絲三の學生各六名が熱心に當つて吳れた。

（細川記）

上田溫電の出張

上田溫電では廿五周年祝賀式當日（廿一日）本校門前南側に案内所を開設し來田を機に附近の風物を探らんとする人々の爲めに案内に努めた。

郵便局臨時出張所開設

上田郵便局では廿五周年祝賀の來賓及參觀者の便宜を計り廿一日は講堂西側、廿二日より廿五日迄は門から蠶室へ行く途中に臨時出張所を開設し一般郵便物の取扱は勿論希望者に圖案入の記念スタンプの押捺を行つたが何時も多數の人が押寄せ局員は汗だくで應待してゐた（左は祝賀期間中押捺せる記念スタンプである。）

學生の賣店

祝賀期間中三科合同で蠶室より生徒控室へ行く途中及圖案室に學生の賣店を開き沓下、タオル、石鹸、繪ハガキ、マーク入便箋、絹毛布、人絹織物、絹織物（大島、結城、羽二重、富士絹）を販賣したが何れも母校製品、直接生産地から取寄せたもの又は生産品よりの販賣委托品であるので値段は安しその上學生連中のお世辭も上々なので連日黑山の樣な人だかりで羽が生えて飛ぶ樣な賣行で相當賣上げが多かつたらしい。

上田地方生産品展覽賣會

十月廿一日より廿五日迄母校生徒控室に於て商工會議所主催の上田地方生産品展覽卽賣會を開催し上田市有力商店數十店が各々自慢の製品を陳列したが異色ある當地方の生産品は來賓の目を弟き非常なる賣行を見せ賣上數千圓に達したとの事である。

上田市の催し

廿五周年祝賀に對し上田市では協賛會を組織し上田市の祝賀か學校の祝賀か譯らぬ位であつた。

上田市では上田驛前に祝上田蠶絲專門學校開校廿五周年と大書せる大アーチを建設し市内各戸は國旗を揭揚し主要道路は紅白幕を張り廻らし提灯を點じ要所々々には通りを横切つて祝上田蠶絲專門學校開校廿五周年のテープを張り又は祝賀内容を書いた立札が立てられた。バスの後には同意味の廣告が張られてゐた。商店は何れも大祝賣を行ひ祝上田蠶絲專門學校創立廿五周年の文字を入れた廣告マツチや手拭を出した商店が多數あつた。地方新聞及中央新聞信濃版は何れも祝賀の數日前より本校の記事に半ばを割き宣傳之れ努めて呉れた。

廿一日晝校庭で踊つた上田獅子は維新後數回しか出演せぬと云ふ不出のものであるが特に本校の爲め市で數百圓を投じ踊らせて呉れた。

市協賛會の煙火大會は約五百圓を投じ大星河原に於て廿一日晝は午前六時より三寸、四寸、七寸玉五十發、夜は午後六時より五寸、七寸、尺玉一五〇發の外、早打十發及十五發、尺五、二尺玉等ありし廿二日より廿五日迄は毎日三寸及四寸玉廿五發の打揚があつた。

廿一日夜の提灯行列には市内中等學校青年學校、小學校、青年會、上田市民有志一千名が參加し商店よりは意匠を凝した廣告燈を出した。

母校控室に於て市商工會議所主催で廿一日より廿五日迄上田地方生産品展覽卽賣會を開き市内有力者商店數十店が自慢の生産品を陳列した。

上田郵便局では祝賀期間中校内に臨時出張所を開設し一般郵便事務を取扱ひ又特に記念スタンプを作り押捺して呉れた

廿一日夜は市公會堂に於て市協賛會主催の盛大なる夜會を開催し又廿二日晝は千曲會館に於て商工會議所主催の午餐會を催して呉れた。商工會議所發行の昭和十年度商工年鑑も殆んど母校祝賀事業の爲めに作つて呉れたものと見てよい。

上田市消防組は祝賀期間中學校に出張所を作り毎日卅名位が來り非常警戒に當り殺到する參觀者の整理に當つて呉れた。

以上は上田市が學校の爲め盡して呉れた内氣の付いた重なる所を拾つたのであるが之の外細い事を擧げれば數限り無いであらう。

全校慰勞會

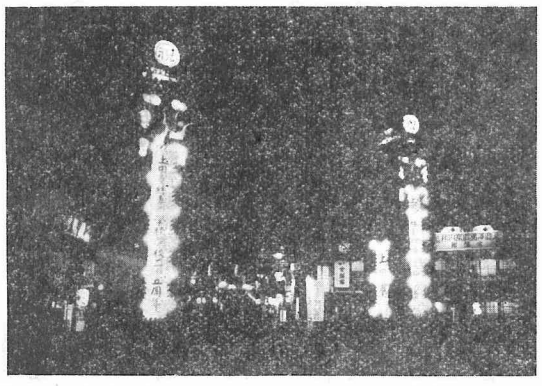
校内一般參觀を一日延期する樣に市で學校へ申込んだとか一日延期する事になつたとか色々風評が立つたがそれも風評丈で學校は豫定通り廿五日限りとし廿六日早朝から全職員傭人學生總出動で取片付を開始した。昨日迄あの通り快晴であつた天氣も今日はガラリと變つて曇天で寒く風さへ加つてゐる。

まるで注文して祝賀會の期間丈天氣にした樣なものである。一日延期しなくてよかつたと思つた。幾日も骨折つて飾り立てたものを壞すのは實に惜しい氣がするが之も仕方がない。取外しは早いものであの通り何日も掛つた飾付も一日で表面に現れた部分は片付いてしまつた。跡は肅條たる天下の秋で淋しさ限りが無い。斯くて午前十一時から廿一日に使用した運動場の饗宴場の廢墟で全校職員傭人生徒在田同窓生參加し慰勞會が催された。まづ校長から慰勞の言葉があり風の吹きまくる露天で學校よりの晝食を馳走になつた。

食事中午餐會の時の舞臺で其の時のプログラムで其の時の上田女子青年團の人達が手踊を見せて呉れた。之れで終りかと思つたら學生の飛入りで浦野青郎君（絲二）濱田浩君（絲一）の浪花節、小林龍太君（紡一）の映畫說明があつてそろ〳〵先生連中へお鉢が廻りさうな危險になつた時井上教授の發聲にて蠶絲專門學校萬歲を三唱して散會した。

慰勞會の濟んだ後直ちに講堂西側に集合し全校職員傭人學生在田同窓生勢揃ひの寫眞を寫した。

（上田地方生産品卽賣展）


（上田驛前の夜景）

（全校慰勞會）

◇母校創立廿五周年行事記念アルバム希望者へ急告

母校今回の祝典を永久に記念すべく十月十三日の運動會より始まり同月二十一日の擧式光景より二十六日の慰勞會に到るまでの實況を約三十六枚の寫眞に收め是れをコロタイプとしてアルバムを作製し希望者に配布する事としました。

希望者は左記御熱讀の上至急母校庶務課依田書記宛御申込を願ひます。

（一）寫眞の種類

祝賀式（二枚）　壽像除幕式（一枚）
宴場（二枚）　獅子舞（一枚）
夜會（一枚）　講演會（一枚）
追悼會（一枚）　音樂會（一枚）
提灯行列（五枚）　門前及停車場前アーチ（二枚）
校内陳列（九枚）　校内大觀（二枚）
校内飾物、光景（一枚）
郵便局臨時出張所等　市内祝賀光景（二枚）
記念運動會　千曲勞會館（一枚）

（場合により一、二枚の增減あり）

（二）アルバム表裝　ビロード表裝、二十頁
（三）代價　申込數二五〇以上の場合　一部　貳圓參拾錢
申込數四〇〇以上の場合　一部　貳圓
外荷造送料實費
十二月十日限

（四）申込期限

尚ほ最後の慰勞會の日に學校全部にて撮影した四ツ切記念寫眞があります。是れも御希望の方には御送り致します。一枚五拾錢（但し臺紙付の場合は五拾五錢）其他送料實費

第八回代議員會議事抄錄

十月廿三日正午より千曲會館に於て晝餐會、引續き講堂西側に於て記念撮影、午後一時より講堂に於て千曲會大會兼第八回代議員會開催出席者一三四名に達し、議事に入る前に同窓會功勞者四氏の表彰式を行ひ、會議は提出問題少く簡單に進行し午後五時終了した。

會長挨拶

午後一時針塚會長開會に先立ち挨拶を述べ皆の勞を犒はれる。

同窓會功勞者表彰式

倉澤理事立つて廿五周年記念事業の一たる同窓會功勞者表彰式を行ふ旨宣する。蒲生理事長登壇、被表彰者原田兵衛、松村季美、伊藤競、高木三治の四氏の感謝狀、目錄（青銅製火鉢）を代表原田兵衛氏に手交す。原田氏感謝の辭を述べる。

協議會開會

蒲生理事長開會を宣し廿五周年記念事業の概略を述ぶ。

私は廿五周年記念事業の記念品係であつたのでその報告をする。記念品として風呂敷及千曲會員章の製作。十五年以上勤續者及本會々員功勞者へ感謝狀及記念品贈呈、今回の記念刊行物として蠶絲學雜誌論文集發行等を行つたが大体豫算の範圍内で賄ひ得ると信ずる。詳細なる會計報告は後日に讓る事とする。

針塚校長謝辭

千曲會の校長壽像建立に對し校長より感謝の辭を述べられ心境を吐露せらる。

事業報告（倉澤理事）

昨年の代議員會に於て理事者に委託された事業の經過を報告申上げる。

昨年は廿五周年記念事業の爲めに全力を盡し以外には大した問題は無かつた。唯殘された問題として千曲時報を刷子に改めるの件で刷子にすると經費が多くかゝるから廿五周年祝賀終了後餘力が出來たら實行して貰ひ度いと云ふ希望條件があつた。之の問題に對しては未だ廿五周年記念事業經費の清算が未了であるから今回は提案せぬ事とする。

次に母校に於ける教授科目改正を學校當局に建議する件は理事者より希望を副へて進言せる處學校でも研究して可及的貴意に副ふ樣にすると云ふた。

次に廿五周年記念事業の内私が主宰した千曲會館の件に就き報告申上げる。昨年代議員會で決議された五千圓と云ふ小額な建設豫算に對しホール、宿舍、娯樂機關等の如く希望條件は非常に多き爲め會計と相談の結果多少豫算を增加し五十四坪、六千四百圓で建設する事とした。之の外に門塀、道路、電燈、應接間裝置、家具等を加へて凡そ七千二百圓位掛る豫定である。本來ならば一々了解を得るべき事なるも急を要するので千曲時報で報告し之に替へた。諒とせられん事を。

會計報告（林理事）

廿五周年記念事業の收支に付き報告する記念事業の爲めに壹萬參千圓を必要とし醵出を御依頼した。其の結果は意外に好成績にて九月三日現在申込一一七九名、三五二五口、一七、六二八圓にて收金せる金高一五、六三二圓六〇錢であつた。即ち三割以上の增加となつた。それに對し銅像は九千圓位、會館は七千二百圓となり其他式典、雜誌も豫算超過の模樣であるが收入が相當增加してゐるので豫定の事業を完成し得ると信ずる。

次に私は壽像製作の係であるので其の經過を報告申上げる可きであるが既に除幕式の際大体申上げたので此席では略し壽像製作に就て私の感じた事を一、二申上げる事とする。

石井先生は一年半の間全く他の仕事を放擲し銅像製作に全力を盡された。先生には帝展參與の重職にあり多忙の身にも拘らず來田する事十數回、校長に面接して中されたこんな事でも解る。先生の最初試作氣分を表はす事に努め又造園の指圖に熟かはされた。之の製作に如何に熟中された石膏の原型を會館に寄贈を乞ふたされた石膏の原型を會館に寄贈を乞ふた ら私の畢生の仕事故差上げる事は出來ませぬと云はれた。又壽像を日暮里から上田へ自動車で運搬する際、荷造、積込、校門に入る處、降す處等を全部活動寫眞に撮影された。之等の點は先生が如何に之の銅像の製作に精勵せられたかを知る事が出來る。故に目のある人が見れば非常に價値ある製作である事を確信する。臺石は縣村より庭石は縣村、滋野村、本原村より運搬し運搬費丈でも千圓を要した。庭園は長谷屋良一氏に依つて造園され殺風景な校舍内もこれに依つて大いに感じをよくしたと自畫自賛してゐる。この事業を行ふに當り母校職員、傭人、學生より數百圓の協賛を仰ぎ縣内農蠶業學校長、縣内外二、三會社其他より當方より求めずに先方から進んで協賛して下さつた。この點は感謝の外はない。私共が十五年前十周年記念祭の際奉安殿の建設を行つたが之は主として外部一般當業者の寄附に依つたのであつた。然るに廿五周年記念には殆んど我々の力のみでなし得た事に對し非常なる力强さを感じ轉々今昔の念に堪えぬものがある。以上報告す。

議長選擧

議長は理事長の指名に依る事に動議成立し蒲生理事長は議長に高畠秀男氏（東京支會）、副議長に上野榮仁（東京支會）を指名す。高畠氏議長就任の挨拶を述ぶ。

次で議長は廿五周年記念事業に對し母校及在田同窓會員の骨折に對し感謝の意を表する事を諮り滿場一致を以つて可決し感謝の辭を述べ次で議事に入る。

一、千曲會員活動の件（山形）

提出者山形（前田氏）は次の如く說明した

就職問題は從來各科の教官が授業及研究の傍ら之に當つて居られる。然し廿五周年を迎へ卒業生が一五〇〇名の多數となつた今日では容易な事では無く又しば〳〵機を逸し易い。故に學校に人事專門の教職員又は書記を設置し人事の圓滑を計つて貰ひたい。

之に對し東海（芝氏）群馬（橋本氏）の賛成あり。又群馬（都丸氏）より之に關聯し左の緊急動議を提出した。

人事問題の迅速を計る爲め（一）の提出問題が實現される前に事務所又は役員の適當なる人の所に電話を架設して貰ひたい。この問題は以前議題に上りたるやに聞く。若し然らば緊急促進を切望す。

之に對し山陽（小川氏）の賛成あり。

電話の必要なる事は說明の要なし。問題は架設費にある。費用の捻出方法を研究し早急に實現され度し。

（一）に對し倉澤理事は次の如く答辯した。

多種多樣の人事を一人の專門家に行はしむる事は困難である。三科に夫々專門家を置けば申分無いが經營上不可能である。故に從來通り三科の職員に行はしむる方がよいと思ふ。

蒲生理事長の答辯は次の如し。

理事長としゞは無く個人として申上げる。本校も以前は人事問題は一人で行つてゐたが敏活を缺き間違を生ずる非難があつたので現在の樣に各科獨立して行ふ樣になつた。その結果一本でよい文書も三本出さねばならぬと云ふ無駄が生ずる樣になつた。故に就職の人選は各科で行ひ一個所に文書は統一し專任書記を置く事はやがて必要となるらう。同窓會にはその費用がないので若し母校の書記又は雇員として置く事が出來ればそれに世の中の動靜のよく見える人を置き度いものである。

二、千曲會々費に關する件（山形）

提出者山形（前田氏）より左の如き說明があつた。

通常會費を納入すると各支會へ割戻金がある。然るに終身會費には割戻金がない。斯くては終身會員の申込者が減少するに至らざるや。奬勵の爲終身會費にも割戻金制度を確立せられ度し。

林理事より左の說明があつた。

これは會則に從つて行つたものである支會に補助する金で通常會費の割戻金では無い。

三、千曲會基本金活用に關する件

提出者北陸（苅田氏）より左の說明があつた。

本會同窓生の就職方面が母校の努力に依り逐年擴大增加せられつゝある事は洵に同窓生御互の意を强ふする處なるが現下の實狀より見て母校がこの際更に一大飛躍の要あるを痛感する。然るにこれが資金不足の爲め充分の活動出來得ざるは甚だ遺憾とする處なるを以て本會基本金を此の有効適切なる方面へ支出するは最も機宜を得たる事と思考せらる。因つて基本金の一割以上を玆數年間繼續支出し其の運用は理事者に一任する事を極力提唱する。

之に對し朝鮮（矢澤氏）より賛成があつた。

四、就職、轉任、記念寄附金に關する件

提出者北陸（苅田氏）より次の如き說明があつた。

本問題は既に代議員會に於て協議され暫く履行された問題であるが其後中絶の狀態にあるのは甚だ遺憾であつて基本金活用と相俟つて最も適切な方法であるから再び實現されん事を切望する次第である。

之に對し林理事より左の答辯があつた。

廿五周年を機として大に飛躍する事は大賛成である。然るに經費不足の爲め出來ないのを遺憾に思つてゐる。基本金は十万圓にする豫定で現在三万六千圓ある。其の内廿五周年記念事業費九千圓、昨年の代議員會に於て非常時局

に處する爲め理事者に委託されたもの五百圓を差引き二万六千圓丈である。それが低金利の爲め將來三分位にしか廻らぬ。之を三分とすると利子は年七百圓位で之れは年々經常費に使用してゐる。更に申上げ度い事は年々基本金が三千圓位增加せぬ時は會計は維持出來ぬ事である。その理由は通常會費を十七年完納し一時に二十圓出金すると終身會員となり以後收める必要は無くなるからである。要するに斯くの如き小額の基本金をつゝき合ふは實に遺憾である。次に就職寄附金の件は先年實行し只一人寄附したのみであつた。故によい案とは思はれぬ。それよりも之は大篝氏の案であるが卒業生の金のある人から本會に預金しその利子を本會で使用させて貰ひ當人が死亡せる時は元金を返却すると云ふ方法はどうか。こうした金が數万圓になれば就職方面の運動にも充分活動出來る譯である。或は終身會員になつた樣な元老が年々相當寄附しては何うか。こうした案こそ研究問題だと思ふ。

之に對し諸氏より次の如き贊否論があつた。

群馬（橋本氏）基本金の流用は反對である就職轉任者に對する寄附も氣の毒である。然し人事に對し現在の金額では餘りに小額である。故に他に適當なる財源を求めよ。

山陽（小川氏）產繭國家管理で繭檢定所の實現されんとする今日は金を使ふチヤンスである。故に基本金の內ある程度流用もし又大篝氏の方法も實現して貰ひ度い然し死んでからでなく老年となつた時利子の半分と元金を返す方法にして貰ひ度い。

議長は以上四問題に對し

二は提出者に誤解もあつた樣だから撤回せられ度し。

一、三、四の問題は次の如く要約される

即ち千曲會員活動に關する件と云ふ大きな見出しの下に。

一、人事專任職員設置に關する件

二、基本金の流用に關する件

三、寄附金に關する件

四、電話設置に關する件

となる。以上に對し私から原案を提出し贊否を決し度いと思ふ。

一、は實際問題としては困難なるも適當なる方法に於て實現する事とす。

二、は終身會員制度がある以上基本金の利子を考へる故基本金の流用は會計を破壞するに至る故不可である。

三、寄附金も就職轉職の時のものは困難なる故次の如く改め度い。今後贊金を得る適當なる方法を研究しさし當り理事者に於て適當と思ふものを撰定し寄附を乞ふ事。

四、は早急に實現出來ればしたいものである。豫算に關係ある故豫算の時討議する事とする。

以上で結末をつけ度いと思ふか如何と滿場に諮り二は提出者山形之を撤回し他は可決となる。

緊急動議（校長吹込レコードに關する件）

群馬（橋本氏）は左の如く緊急動議を提出した。

廿五周年を機として表に校長の聲、裏面に校歌を吹込んだレコードを作り會員諸氏に買はせ度いと思ふか如何。豫算に計上して貰ひ度い。

之に對し蒲生理事長は左の如く答へた。

贊成であるが數が問題であるから千曲時報で希望者を募り數が纏まつたら特別會計でやる事にし度い。

議長蒲生氏の案を諮り可決となる

議長交替

高島議長都合に依り議員席に戻り上野副議長替りて議長席に就く。

決算報告

議長は昭和十年度千曲會決算報告に就き林會計理事の說明を求む。山陽（小川氏）發言し

決算報告は說明が無くとも譯る。監事の檢査報告に依り贊否を募り議事を進行し度い。

との案に依り高木監事より檢査の結果正當且つ正確なる旨報告あり滿場一致承認と決す。

剩餘金處分案

林會計理事より左の說明あり可決す。

千五百圓を廿五周年祝賀會準備金に支出する豫定で二年間に千二百圓を支出した。本年は剩余金五百二十三圓十三錢の內三百圓をそれに支出し差引二百二十三錢を翌年に繰越し度いと思ふ。

豫算報告

林會計理事より昭和十一年度豫算に就き左の如く說明があつた。

收入は四、四九四圓で昨年に比し二六圓增加させた。終身會費の增加は利子割戾金の增加に依るものである。普通會費は五回卒業以上の人から取れぬので增加は僅かであつた。基本金利子は二万六千圓の三分弱とし七百圓とつた。即ち終身會費の成扇利子から百圓丈通常會計へ支出した。廣告料の增加は主に千曲時報の廣告增加である。雜入の增加は千曲時報の學生賣却代である。寄附金なる項があるも實際は收入は無い。要するに收入增加は會計の辻褄を合せる爲に行つたものである。

支出に於て基本金繰入高は規則通り事務所費は需要費を五十圓增加した。

之は今井眞平氏の如き蠶絲業關係者の死去等の場合に香奠等を支出する必要があるので雜費を增加したのに依る。

その替りに終にある各部會費を五十圓削減した。事業費の內蠶絲學雜誌はどうするか理事者に委任されたが存續するものとして同額を計上した。同じく事業費の內名簿費の增加は豫算編成に困難した。會報費百五十圓、名簿費百圓增加した。

之に對し次の如き質問又は意見があつた。

山陽（小川氏）利子の三分弱は少からずや可及的定期貯金を多くし增收を計られ度し。

林理事　定期は三、八分であるが當座預金郵便貯金もあり全體を平均し安全を期すれば使ひ得る利子は三分弱である。

東京（高島氏）宿泊料の如き千曲會館運用の收支が豫算面に見へぬが如何。

林理事　使用規則が出來ないので見當がつかず又豫算に編入する暇が無かつた。會館は學校へ寄附したから之が維持費等はなるべく學校に依賴する積りである。

倉澤理事　學校で使用內規を作成する事になつてゐる。

東京（高島氏）然らば會館の運用は理事者に一任すると云ふ事を本席で決議したい

倉澤理事　そう大問題にせず一年運用させて貰ひ來年提案する事にしては如何。

山陽（小川氏）會館を學校へ寄附したとは云へ火災にあつた時文部省が建設したものゝ樣に再建しては呉れまい。故に千曲會に於て火災保險をかける必要なきや。

倉澤理事　會館は既に學校のもの故千曲會で保險をかける事は出來まい。

山陽（小川氏）校長と相談し方法を考へたら出來ぬ事はあるまい。

倉澤理事　研究して見る。

林理事　電話に就き一言し度い。電話は會館と校長室、蒲生氏、倉澤氏、野口氏と自分の室のものが學校の交換台を通して市外と通話出來る樣になつてゐる。更に廿五周年の金に剩餘が出たら市外電話一個を千曲會にて獨占したい考へである。こうなれば連絡は充分と思ふ。

山陽（小川氏）千曲會々員名簿に勤務先及住所の電話を記入され度し。

副議長　豫算は可決とす。

緊急動議（東京支會に電話を架設する件）

東京（高島氏）緊急動議として最も打合の用事多き東京支會に電話を架設して貰ひたい。若し可能ならば場所は支會に一任せられたい。費用は購入すると五百圓位借りるとすれば月十五圓位と思ふ。

倉澤理事　先年代議員會で或る支會から東京に電話架設問題が提出された時東京支會內では反對の向もあつたが差支なきや。

東京（高島氏）代議員が差支なしと云へば支會は差支ない譯である。

山陽（小川氏）廿五周年の剩余金で架設しては如何。

東京（高島氏）剩餘金と制限せず理事者に一任しなるべく早く實現する樣努力するとせられ度し。

之に對し群馬（橋本氏）其他より贊成あり可決となる。

役員選擧

副議長詮衡委員として矢澤茂登一、小川保、芝號雄、伊藤勢龜、岡部彌平、小岩井桂三、高島秀男の七氏を指名す。以上七名は別室に退き委員會を開會す。其間本會は休會となる。暫時の後本會再開矢澤委員長左の如く結果を報告す。

（○印は新任）

理事（七名）

○中澤　忠、蒲生　俊興、倉澤　美德、林　貞三、野口新太郎、齋藤　菊雄、松村季美

監事（三名）

高木三治、川船卓爾、○飯島正胤

評議員（十五名）

伊藤　競、飯島　貞雄、沖　濤治、岡村源一、岡部　彌平、岸　勝彌、佐藤　一、鹽原　克巳、田口　敏夫、高須兵司、永井　榮、二宮九二二、野澤泰治、○塚田鎭麟、原田　兵衛、

新任理事及監事は別室に於て互選の結果理事長及常任監事を決定齋藤理事及高木監事より左の如く議場に報告す。

理事長　蒲生俊興　常任幹事　川船卓爾

閉會之辭

副議長、代議員席に退き蒲生理事長登壇新任の挨拶と同時に閉會の辭を述べ閉會す。時に五時半議場既に暗黑となり彼我の判別に困難する位であつた。

昭和九年度通常會計收支決算書

歳入

一金四千四百五拾參圓七拾七錢也　歳入決算高
一金四千貳百六拾圓也　歳入豫算高

歳出

一金參千九百參拾圓六拾四錢也　歳出決算高
一金四千貳百六拾圓也　歳出豫算高

差引殘高　金五百貳拾參圓拾參錢也　剩餘金

歳入

決算

款	項	決算高
一 會費		三、〇三五、八〇
	通常會費	二、七七九、〇〇
	終身會費	一七〇、〇〇
	準會員會費	七六、八〇
二 基本金		八〇〇、〇〇
	基本金利子	八〇〇、〇〇
三 雜收入		三一九、五六
	印税	—
	廣告料	二二三、〇〇
	雜收入	九六、五六
四 寄附金		—
	寄附金	—
五 繰越金		二九八、四一
	繰越金	二九八、四一
合計		四、四五三、七七

決算說明（△印ハ減ヲ示ス）

款	項	種目	本年度決算額	本年度豫算額	比較增減
會費			三、〇三五、八〇	三、〇四〇、〇〇	△四、二〇
	通常會費		二、七七九、〇〇	二、八〇〇、〇〇	△二一、〇〇
		通常會費	二、七七九、〇〇	二、八〇〇、〇〇	△二一、〇〇
	終身會費		一七〇、〇〇	一七〇、〇〇	—
		終身會費利子	一〇〇、〇〇	一〇〇、〇〇	—
		終身會費成崩高	七〇、〇〇	七〇、〇〇	—
	準會員會費		七六、八〇	七〇、〇〇	六、八〇
		準會員會費	七六、八〇	七〇、〇〇	六、八〇
基本金			八〇〇、〇〇	八〇〇、〇〇	—
	基本金利子		八〇〇、〇〇	八〇〇、〇〇	—
		利子繰入	八〇〇、〇〇	八〇〇、〇〇	—
雜收入			三一九、五六	二五〇、〇〇	六九、五六
	印税		—	一〇、〇〇	△一〇、〇〇
		印税	—	一〇、〇〇	△一〇、〇〇
	廣告料		二二三、〇〇	二〇〇、〇〇	二三、〇〇
		廣告料	二二三、〇〇	二〇〇、〇〇	二三、〇〇
	雜收入		九六、五六	四〇、〇〇	五六、五六
		預金利子	二五、四六	二五、〇〇	四六
		雜收入	七一、一〇	一五、〇〇	五六、一〇
寄附金			—	二〇、〇〇	△二〇、〇〇
	寄附金		—	二〇、〇〇	△二〇、〇〇
		特定寄附金	—	一〇、〇〇	△一〇、〇〇
		一般寄附金	—	一〇、〇〇	△一〇、〇〇
繰越金			二九八、四一	一五〇、〇〇	一四八、四一
	繰越金		二九八、四一	一五〇、〇〇	一四八、四一
		繰越金	二九八、四一	一五〇、〇〇	一四八、四一
合計			四、四五三、七七	四、二六〇、〇〇	一九三、七七

歳出

決算

款	項	決算高
一 基本金繰入高		五七一、一六
	基本金繰入高	五七一、一六
二 事務所費		七八〇、八二
	俸給	二二二、〇〇
	雜給	三〇、五〇
	旅費	九四、〇〇
	交際費	一〇一、六三
	需用費	一五三、七九
	集金費	一七八、八九
三 會議費		三二三、八一
	代議員會費	二六五、八二
	役員會費	五七、九九
四 事業費		一、六三四、八七
	雜誌補助費	六〇六、四六
	會報費	八〇三、八四
	名簿費	一八〇、五七
	講演講習費	—
	奬勵費	三五、〇〇
	共濟費	九、〇〇
	調査費	—
五 補助費		一五〇、〇〇
	補助費	一五〇、〇〇
六 交付金		四七〇、〇〇
	交付金	四七〇、〇〇
七 豫備費		—
	豫備費	—
合計		三、九三〇、六四

決算說明（△印ハ減ヲ示ス）

款	項	種目	本年度決算額	本年度豫算額	比較增減
基本金繰入高			五七一、一六	五六〇、〇〇	一一、一六
	基本金繰入高		五七一、一六	五六〇、〇〇	一一、一六
		基本金繰入高	五七一、一六	五六〇、〇〇	一一、一六
事務所費			七八〇、八二	九二五、〇〇	△一四四、一八
	俸給		二二二、〇〇	三〇〇、〇〇	△七八、〇〇
		專任幹事給	—	五〇、〇〇	△五〇、〇〇
		書記給	二二二、〇〇	二五〇、〇〇	△二八、〇〇
	雜給		三〇、五〇	三〇、〇〇	五〇
		傭人手當	一二、〇〇	一〇、〇〇	二、〇〇
		賞與	一八、五〇	二〇、〇〇	△一、五〇
	旅費		九四、〇〇	一〇〇、〇〇	△六、〇〇
		旅費	九四、〇〇	一〇〇、〇〇	△六、〇〇
	交際費		一〇一、六三	一〇〇、〇〇	一、六三
		役員交際費	一〇一、六三	一〇〇、〇〇	一、六三
	需用費		一五三、七九	一八五、〇〇	△三一、二一
		備品費	—	五〇、〇〇	△五〇、〇〇
		消耗品費	七、八七	四〇、〇〇	△三二、一三
		通信費	二〇、八四	五五、〇〇	△三四、一六
		雜費	一二五、〇八	四〇、〇〇	八五、〇八
	集金費		一七八、八九	二一〇、〇〇	△三一、一一
		會費集金料	一六四、八〇	一七〇、〇〇	△五、二〇
		未納會費整理費	一四、〇九	四〇、〇〇	△二五、九一
會議費			三二三、八一	三二〇、〇〇	三、八一
	代議員會費		二六五、八二	二四〇、〇〇	二五、八二
		旅費補助	一九一、四六	二〇〇、〇〇	△八、五四
		雜費	七四、三五	四〇、〇〇	三四、三五
	役員會費		五七、九九	八〇、〇〇	△二二、〇一
		役員會費	三二、七〇	四〇、〇〇	△七、三〇
		雜費	二五、二九	四〇、〇〇	△一四、七一
事業費			一、六三四、八七	一、五四五、〇〇	八九、八七
	雜誌補助費		六〇六、四六	五〇〇、〇〇	一〇六、四六
		雜誌補助費	六〇六、四六	五〇〇、〇〇	一〇六、四六
	會報費		八〇三、八四	六〇〇、〇〇	二〇三、八四
		印刷費	五五二、三四	三八五、〇〇	一六七、三四
		編輯料	一三九、五〇	一〇〇、〇〇	三九、五〇
		送料	九七、〇〇	九五、〇〇	二、〇〇
		雜費	一五、〇〇	二〇、〇〇	△五、〇〇
	名簿費		一八〇、五七	一八五、〇〇	△四、四三
		印刷費	一二八、七七	一四〇、〇〇	△一一、二三
		調査料	五、〇〇	五、〇〇	—
		送料	二〇、〇〇	三〇、〇〇	△一〇、〇〇
		雜費	二六、八〇	一〇、〇〇	一六、八〇
	講演講習費		—	二〇、〇〇	△二〇、〇〇
		講師費	—	一〇、〇〇	△一〇、〇〇
		雜費	—	一〇、〇〇	△一〇、〇〇
	奬勵費		三五、〇〇	一二〇、〇〇	△八五、〇〇
		研究會費	二〇、〇〇	二〇、〇〇	—
		各部會費	一五、〇〇	一〇〇、〇〇	△八五、〇〇
	共濟費		九、〇〇	一〇〇、〇〇	△九一、〇〇
		共濟費	九、〇〇	一〇〇、〇〇	△九一、〇〇
	調査費		—	二〇、〇〇	△二〇、〇〇
		調査費	—	二〇、〇〇	△二〇、〇〇
補助費			一五〇、〇〇	一五〇、〇〇	—
	補助費		一五〇、〇〇	一五〇、〇〇	—
		補助費	一五〇、〇〇	一五〇、〇〇	—
交付金			四七〇、〇〇	四八〇、〇〇	△一〇、〇〇
	交付金		四七〇、〇〇	四八〇、〇〇	△一〇、〇〇
		交付金	四七〇、〇〇	四八〇、〇〇	△一〇、〇〇
豫備費			—	二八〇、〇〇	△二八〇、〇〇
	豫備費		—	二八〇、〇〇	△二八〇、〇〇
		豫備費	—	二八〇、〇〇	△二八〇、〇〇
合計			三、九三〇、六四	四、二六〇、〇〇	△三二九、三六

備考　事業費ノ比較增減八九圓八七錢ハ豫備費ヨリ繰入

昭和九年度蠶絲學雜誌特別會計收支計算書

收入（△印ハ減ヲ示ス）

項目	決算高	豫算高	比較增減	摘要
千曲會補助費	六〇六、四六	五〇〇、〇〇	一〇六、四六	
會員雜誌代納入高	三九五、三〇	四九六、〇〇	△一〇〇、七〇	
雜誌賣上代金	一三〇、〇〇	一五〇、〇〇	△二〇、〇〇	
合計	一、一三一、七六	一、一四六、〇〇	△一四、二四	

支出（△印ハ減ヲ示ス）

項目	決算高	豫算高	比較增減	摘要
雜誌印刷及別刷費	九〇三、五八	八〇五、〇〇	九八、五八	
送料	一一六、〇二	八四、〇〇	三二、〇二	
消耗品費	三、五〇	三〇、〇〇	△二六、五〇	
編輯費	九六、〇〇	二〇〇、〇〇	△一〇四、〇〇	
雜費	一二、六六	二七、〇〇	△一四、三四	
合計	一、一三一、七六	一、一四六、〇〇	△一四、二四	

千曲會大會並ニ第九回代議員會出席者名（順序不同）

宮城　山形　福島　群馬　埼玉　東京　神奈川　越佐　北陸　北信　齋藤菊雄　金崎眞奕　宮城傳　竹內博雄　横山忠夫　市川清男　永田平　安筑　諏訪　龍川　岐阜　靜岡　東海　三重　近畿　兵庫　山陽　宮崎　朝鮮　滿洲　京城　本會　林貞三　窪田潤　香山清和　小松忠一郎　宮下丈夫　松浦彰義　久保藤一　宮坂收　草野弘　小林敏　池內眞吾　金澤勇

近藤正巳　前田雅弘　安部和　濱井壽夫　根岸丑之助　戸部正久　原治夫　岡部彌平　宮下文四郎　高島秀男　竹內虎夫　宮澤勇　內藤良雄　淺見安治　荒木喬　高木三治　中會根靜二　二宮九二　三好彌市　苅田恭一　松村季美　勝又藤夫　安川寬　中鳥角太郎　中島眞　川船卓彌　笠原義人　久保田正樹　水野敏夫　鈴木玄九　河越哲男　鹽原克巳　金野嚴保　酒井十三　島倉五次郎　皆川惣二郎　池田僞雄　太田元　大箸政平　吉野健吉　野本信次　白澤幹　西山市三　本多懋　唐澤正平　小島杉門　日野光平　中島茂　矢澤茂登一　池田正五郎　榊原春彥　中會根長男　蒲生俊興　野口新太郎　須田圭三　鷹野誠一　六川忠一郎　小林尙一　坂口育三　田中齊　濱村一彥　平尾孝平　片岡金一　細川豐　倉澤恒夫

加藤一郎　山本壽之亟　橋本友景吉　都丸晴治　上野榮仁　原田兵衞　依田實　永井勝未　福地進　新野元治郎　小岩井桂三　新穗利信　飯島正胤　田口富五郎　北島正生　岡卓郎　遠藤正八　細川三郎　箕輪貞三　片岡清次郎　石井謙三　石塚亮　今井武夷　後明一雄　鈴木正幸郎　關武作　市瀨壽　西山省　戸田勝一　岡本英一　小中潔　桑田庄七　伊藤勞龜　小川保　尾見祐八　清水礪敏　中由鐵一　倉澤美德　山口定次郎　平澤勝　荻原淸治　白井美明　町田博　崎山正堯　藤田四郎　枇杷木瀧雄　茅野功　鎧塚好作　三宅玉留　齋藤利雄

昭和九年度決算剰餘金處分法

一金五百貳拾參圓拾參錢也　九年度決算剰餘金

之ガ處分法左ノ如シ

一金參百圓也　二十五周年祝賀會準備金

一金貳百拾參圓拾參錢也　翌年度ヘ繰越

昭和十一年度通常會計收支豫算書

歳入

款	項	種目	本年度	前年度	增減
一 會費			三、一五〇、〇〇	三、〇八〇、〇〇	+七〇、〇〇
	通常會費	通常會費	二、八五〇、〇〇	二、八〇〇、〇〇	+五〇、〇〇
	終身會費		二二五、〇〇	二〇〇、〇〇	+二五、〇〇
		終身會費利子	一三五、〇〇	一三〇、〇〇	+五、〇〇
		終身會費成崩高	九〇、〇〇	八〇、〇〇	+一〇、〇〇
	準會員會費	準會員會費	八五、〇〇	八〇、〇〇	+五、〇〇
二 基本金			七〇〇、〇〇	七〇〇、〇〇	
	基本金利子		七〇〇、〇〇	七〇〇、〇〇	
		利子繰入	七〇〇、〇〇	七〇〇、〇〇	
三 雜收入			四一〇、〇〇	二八〇、〇〇	+一三〇、〇〇
	印税	印税	一〇、〇〇	一〇、〇〇	
	廣告料	廣告料	三〇〇、〇〇	二三〇、〇〇	+七〇、〇〇
	雜收入		一〇〇、〇〇	四〇、〇〇	+六〇、〇〇
		預金利子	二五、〇〇	二五、〇〇	
		雜收入	七五、〇〇	一五、〇〇	+六〇、〇〇
四 寄附金	寄附金		三四、〇〇	二〇、〇〇	+一四、〇〇
		特定寄附金	二〇、〇〇	一〇、〇〇	+一〇、〇〇
		一般寄附金	一四、〇〇	一〇、〇〇	+四、〇〇
五 繰越金	繰越金	繰越金	二〇〇、〇〇	一五〇、〇〇	+五〇、〇〇
合計			四、四九四、〇〇	四、二三〇、〇〇	+二六四、〇〇

歳出

款	項	種目	本年度	前年度	增減
一 基本金繰入高	基本金繰入	基本金繰入高	五七〇、〇〇	五六〇、〇〇	+一〇、〇〇
二 事務所費			九四五、〇〇	八九五、〇〇	+五〇、〇〇
	俸給		三〇〇、〇〇	三〇〇、〇〇	
		專任幹事給	五〇、〇〇	五〇、〇〇	
		書記給	二五〇、〇〇	二五〇、〇〇	
	雜給		三〇、〇〇	三〇、〇〇	
		傭人手當	一〇、〇〇	一〇、〇〇	
		賞與	二〇、〇〇	二〇、〇〇	
	旅費	旅費	一〇〇、〇〇	一〇〇、〇〇	
	交際費		一〇〇、〇〇	一〇〇、〇〇	
		役員交際費	一〇〇、〇〇	一〇〇、〇〇	
	需要費		二〇五、〇〇	一五五、〇〇	+五〇、〇〇
		備品費	二〇、〇〇	二〇、〇〇	
		消耗品費	四〇、〇〇	四〇、〇〇	
		通信費	五五、〇〇	五五、〇〇	
		雜費	九〇、〇〇	四〇、〇〇	+五〇、〇〇 本會交際費例ヘバ蠶業關係者ノ香奠ノ如キモノ
	集金費		二一〇、〇〇	二一〇、〇〇	
		會費集金料	一七〇、〇〇	一七〇、〇〇	
		未納會費整理費	四〇、〇〇	四〇、〇〇	
三 會議費			三三〇、〇〇	三三〇、〇〇	
	代議員會費		二四〇、〇〇	二四〇、〇〇	
		旅費補助	二〇〇、〇〇	二〇〇、〇〇	
		雜費	四〇、〇〇	四〇、〇〇	
	役員會費		八〇、〇〇	八〇、〇〇	
		役員旅費	四〇、〇〇	四〇、〇〇	
		雜費	四〇、〇〇	四〇、〇〇	
四 事業費			一、七四五、〇〇	一、五四五、〇〇	+二〇〇、〇〇
	雜誌補助費	雜誌補助費	四〇〇、〇〇	四〇〇、〇〇	
	會報費		八五〇、〇〇	七〇〇、〇〇	+一五〇、〇〇
		印刷費	五九〇、〇〇	四七五、〇〇	+一一五、〇〇
		編輯費	一三〇、〇〇	一〇〇、〇〇	+三〇、〇〇
		送料	一一〇、〇〇	一〇五、〇〇	+五、〇〇
		雜費	三〇、〇〇	二〇、〇〇	+一〇、〇〇
	名簿費		三〇〇、〇〇	二〇〇、〇〇	+一〇〇、〇〇
		印刷費	二二〇、〇〇	一五〇、〇〇	+七〇、〇〇
		調査費	五、〇〇	五、〇〇	
		送料	六〇、〇〇	三〇、〇〇	+三〇、〇〇
		雜費	一五、〇〇	一五、〇〇	
	講演講習費		五、〇〇	五、〇〇	
		講師費	三、〇〇	三、〇〇	
		雜費	二、〇〇	二、〇〇	
	獎勵費		七〇、〇〇	一二〇、〇〇	−五〇、〇〇
		研究費	二〇、〇〇	二〇、〇〇	
		各部會費	五〇、〇〇	一〇〇、〇〇	−五〇、〇〇
	共濟費		一〇〇、〇〇	一〇〇、〇〇	
		共濟費	七〇、〇〇	七〇、〇〇	
		弔慰金	三〇、〇〇	三〇、〇〇	
	調査費	調査費	二〇、〇〇	二〇、〇〇	
五 補助金	補助金	補助金	一五〇、〇〇	一五〇、〇〇	
六 交付金	交付金	交付金	四八四、〇〇	四八〇、〇〇	+四、〇〇
七 豫備金	豫備金	豫備金	二八〇、〇〇	二八〇、〇〇	
合計			四、四九四、〇〇	四、二三〇、〇〇	+二六四、〇〇

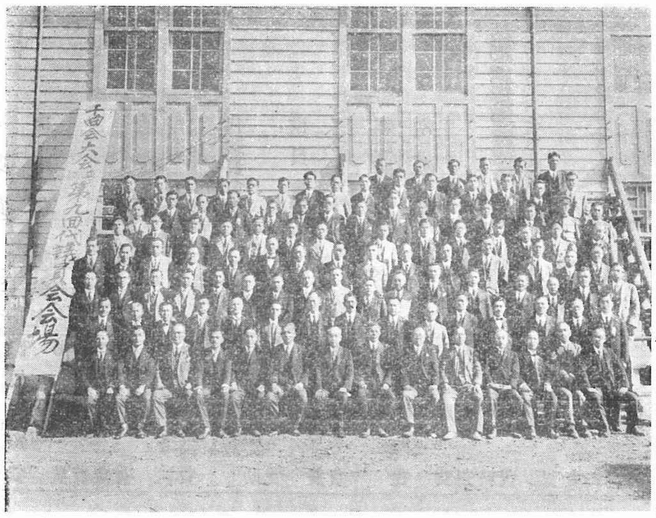
昭和十一年度蠶絲學雜誌特別會計豫算

收入

項目	金額
千曲會補助	四〇〇、〇〇
會員納入高	五〇〇、〇〇
雜誌賣上代金（學校一回九〇部宛（三回ニテ二七〇部）及學生平均三〇部（三回ニテ））	一五〇、〇〇
合計	一、〇五〇、〇〇

支出

項目	金額
雜誌印刷費	七六〇、〇〇
別刷代	四五、〇〇
送料	八五、〇〇
消耗品費	三〇、〇〇
編輯費	一〇〇、〇〇
雜費	三〇、〇〇
合計	一、〇五〇、〇〇



寫眞說明

一列右より　上野榮仁　松村季美

二列右より　濱井壽夫　白澤幹　林貞三

三列右より　根岸丑之助　荊田恭一　永田平

四列右より　小島杉門　片岡清治郎　桑田庄七

五列右より　宮下文四郎　遠山正八

六列右より　後明武雄　鷹野誠一　三宅玉留

七列右より　片岡金一　倉澤恒夫　平尾孝平

八列右より　濱村一彥

蒲生俊興　高畠秀男　矢澤茂登一　窪田潤　戸田勝一　久保田正樹　勝又藤夫　榊原春彥　吉野健吉　都丸晴治　荒木喬　尾見祐八　竹內虎夫　倉澤美德　白井美明　福地進　小林倘一　本多懋　原治夫　荻原清治　鎧塚好作　齋藤利雄　依田實　久保藤一

飯島正胤　大箸政平　小川保　三好彌市　酒井五十三　皆川二郎　永井勝末　平澤勝　伊藤勢龜　內藤良雄　小松忠一郎　前田稚弘　田口富五郎　六川忠一郎　安部和　西山市三　新野元治郎　笠原義人　細川豐　河越哲男　横山忠夫　枇杷木瀧雄　藤田四郎

箕輪貞三　針塚先生　唐澤正平　今井衷　加藤喜一郎　二宮九二二　須田圭二　小岩井桂三　近藤正巳　香山清和　市川清男　川船卓爾　新穗利信　中曾根靜二　宮下丈夫　町田博　鈴木玄九　池田正五郎　茅野功　山本友之亟　西山省　市瀨武壽

橋本景吉　原田兵衞　高木三治　金野嚴保　細川三郎　中山鑑一　小中潔　石井謙三　金崎眞英　清水德敏　鹽原克巳　日野光平　島倉惣治郎　中島眞　山口定治郎　池內眞吾　岡本英一　關幸作　小林敏　金澤勇　草野弘　宮坂收

千曲會功勞者表彰

千曲會は十月廿三日第九回代議員會に於て本會に功勞ありし左記四名に對し感謝狀並に記念品として青銅火鉢（二十年以上勤續教官に贈呈せしものと同樣のもの）壹個宛を贈り感謝の意を表した。

（代議員會議事抄錄參照）

千曲會功勞者芳名

松村季美（蠶一）

原田兵衞（蠶一）

伊藤競（絲一）

高木三治（絲三）

感謝狀

貴下ハ本會ノ發展隆昌ノ爲メ貢獻セラレ後進ノ指導ニ盡瘁セラル、コト多年其ノ功績甚大ナル會員一同ノ深ク感謝スル所ナリ

玆ニ本會ハ母校創立廿五周年ニ當リ記念トシテ青銅火鉢壹個ヲ贈呈シ謹ミテ感謝ノ微意ヲ表ス

昭和十年十月廿三日

上田蠶絲專門學校千曲會

名譽會長　針塚長太郎　印

理事長　蒲生俊興　印

殿

千枚漫語

千葉高島生

○

母校創立二十五周年祝賀の日は遂に來た。蠶界好轉、天候快晴、資金多集、諸式無事、祝賀盛大、計畫完成、あらゆる意味に於て大成功を收めたとは御同慶に堪へない。之は一に校長の德と、卒業生の熱とに依るものであるが、私は特にこの際、在田會員諸君が長期に亘つて盡力された勞苦を想ひ、感謝の念が湧くこと頻りである。

○

記念式はたゞ感激そのものであつた。『御國の爲にますらをが……千曲の川に光る月の……』と校歌を合唱する時、卒業生の眼には齊しく涙が光つた。追悼會も壯嚴裡に行はれ、殊に樋口未亡人が遺兒二人と共に燒香された時には、眼頭が熱くなつた。原田先生も頻りにハンケチを眼にあてゝ居られた。二十五年の歲月は、千六百名の卒業生を出したが、物故關係者はその約一割に垂んとして居ると云ふ。今更ながら人の世の無常を感ずるではないか。

○

校長先生の壽像は實によく出來た。私は世の常の銅像を見てその立像は石佛、胸像は曝首を聯想して好感が持てない。然るに我が針塚先生のそれは、椅子に腰かけて、卷紙と筆を持つた全く自然の儘のポーズである。私共が先生の御姿を頭に描く時は、校長室に在つてこのポーズで居られる處が自然に浮んで來るではないか。少くとも私の描く幻の校長はこの壽像と全く一致する。流石は石井先生だ！位置、臺石、添景等、私はコンナにも我が意に叶つた例を他にみた事がない。

○

千曲會館も立派に出來た。五右衛門風呂を設備した處など、なか〳〵氣がきいてゐる。併し折角の會館も運用宜しきを得なければ役に立たない。お茶は誰がくむ？　風呂は誰が焚く？　電話をかけても取次ぐ者がなくては用をなすまい。今後の運營方法につき、學校當局と千曲會との考慮を望む。

○

校内には展覽會が開催され、蠶絲紡織に關する各種の貴重なる資料を陳列して一般の觀覽に供し、各科學生の苦心になる飾り物があつた。それ等を走るやうにして觀て廻つたが、今印象に殘るもの數點に就て所感を述べてみやう。

○

蠶一の『蠶勇士』と題するパノラマ一三人の蠶專學生が大きな蠶兒を抱へて人絹網を突破しやうとする所だ。説明に曰く『行路の多難を問ふこと勿れ、我等は唯學理と熱と意氣とに依りて其の障害を打開せんのみ』と。肉彈三勇士をもちつたところ、實に巧なデザインである。蓋し今回の觀物中第一の傑作！

○

蠶三の『產繭處理統制法案』を諷刺したパノラマも時節柄面白いと思つた。大日本蠶絲會山の下に農林省と云ふトンネルがある。その中から走り出て來た產繭處理統制法案號なる列車の進路には製絲業者、繭絲業者と云ふ石ころが横はり、議會と云ふ危險な鐵橋もかゝつて居る。彼方の停車場には養蠶大業が汽車を待ちわびてゐるが、果して汽車は無事に停車場に着くであらうかと云ふ場面である。たゞ惜しいことに日本中央蠶絲會とすべき處を、大日本蠶絲會（大日本中央蠶絲會だつたかも知れぬ）と書いてあつた。些細な事の樣だが、學校の估券に關はりますゾ。

○

同じ問題を絲三でもデザインして居る臨月の大きなオ腹を抱へたマダム蠶絲業の側に、產婆農相と、ダルマ藏相が立つて居るだけで、次の説明を讀む迄は何の諷刺か誰にも解せない代物。曰く『箱入娘として育つた蠶絲業にも今や月滿ちて產繭處理統制法なる赤ン坊が生れやうとしてゐます。產婆役たる農相と藏相の心配もさることながら、果して安產か流產か、皆さんは何れかお望みですか』と。農相を產婆に見たて、藏相をダルマとしたのは何の因果關係があるのか、併し田舍の參觀人相手には、前記の二つナンカより、コッチの方が遙かに俗うけしたかも知れぬ。

○

貯桑室に水を溜めて『月の松島』のパノラマは開校式の時の『ベニスの夜景』を想ひ出す。『金のなる木』として好奇心をそゝつて置いて『之だ！』と撞木を見せると云ふ人を喰つたもの、全然職業的關心を離れた藝術作品だと、妙に高尙ブツタ『沙漠の祈り』など、何れも學生諸君の苦心の跡が見えた。

○

蠶室内を歩くと、あれもこれも想ひ出の種である。宿直室の押入の中へ入つて書寢をして居ると、校長先生が巡廻して來て之を覗かれ、默つてその儘行きすぎて了つたこと。△△助手が生意氣だと云ふので、宿直室へ呼び込んで謝罪させたこと。小澄君が蚤を苦にして、特製の袋の中へ入つて寢たこと。桑摘袋を持つて八日堂へリンゴ（あの小さい、澁味のある）を買ひに行つたことなど走馬燈のやうに次々に浮んで來る。

○

鹿兒島高農教授北島先生に二十餘年ぶりでお目にかゝつたので『先生！　私がお解りになりますか』と申上げたら、『ナンデ君を忘れるものか』と來た。圃場實習の時散々手古摺らせた私の事だから印象が深いので、この御挨拶には全く恐入つた。農夫の山岸君の記憶を質してみても實習模範生の名前は憶えて居ないが横着者の名前は大抵憶えて居るらしい。

○

北島先生の助手に江守と云ふ人が居て大變ヤカマシイ、寧ろキ印に近い人であつた。ある時養蠶室の入口に澤山の履物が脱ぎ捨てゝあつたら、之を片端から庭先へ放り出して了つた。處が之は學生のものでなくて、參觀人のものだつたので參觀人は呆氣にとられて見て居たと云ふ當時の光景を想ひ出して、ひとり可笑しくなる。後年の學生が、圃場で鍬を振上げながら彼氏を追ひまはしたと云ふ活劇もあつたさうだ。今神戸市加納町で外人相手の骨董商をして居ると云ふ噂だが、會つてみたいやうな氣もする。

○

村瀨巡視もまだ元氣で勤めて居るのは嬉しい。私共の在學時代秋山と云ふ巡視が居た。古武士の風格を備へた人で、弓ギレを持つて巡り歩き、又都筑書記が棒術の指南を受けて居るのをよく見かけたものだ。ドンナ風雪の夜でも農夫舍まで巡廻したと云つて山岸農夫の妻君が感心して居た。

○

私共の時代には、正門が玄關の前にあつて、門衛所の側に在學生の名札があり（登校下校の都度裏返す）それが成績順だつたので不良組には痛手であつた。養蠶科の實習服は第一回生はカーキ色であつたが、二回生から霜降りとなつた。冬服は黑ヘルのきまりを一本アヤ、オーバーは黑メルトンのきまりを縞ものなどで作る者があつて、生徒監の新樂先生が手をやいたものだ。

○

今でこそ押しも押されもせぬ天下の上田蠶絲專門學校であるが、開校當時に於ては、宿帳にさう書くと、町立ですか、縣立ですかと訊かれる。そこでムキになつて國立だよと答へると、ハア信濃國立ですかと言はれたナンテ、話もあつた位だ。二十五年の歲月、蠶絲業界の變遷、母校の發展、お互の境遇、考へてみると全く夢のやうだ。

○

今回の祝典に各地から參集した卒業生四百餘名、その内モラス會員（蠶2）は袁世凱・天地返し・リン君・茶目公・輸卒・ガリバー・金魚・馬公・SB・ナウスー・ハムレット・ハムレット・微粒子・千枚の十二名、輸卒・の二君には卒業以來初めて會つた譯だが御兩所ともお若いのに驚いた。絲2の戸田君はツルリと禿げて了つたので、名乘られても暫く思ひ出せなかつた。はるばる朝鮮からお越の矢澤君はじめ蠶3の諸兄など、一見してはボーッとして居るが見て居る内に段々焦點が合つて來て遂に學生時代の俤が浮んで來るから愉快だ。

○

『ハゲ白髮、集ふ座敷や、菊薰る』……句になつて居るかどうか知らぬが、兎も角一、二回生の會合の實感である。藥屋の主人大籐君（絲2）にコツソリ伺ひをたてたら、毛生藥に効能あるもの絶對にないし、白髮染めにはよいものがあるとサ。

○

歡樂極まつて哀愁多しとか。二十五周年が濟んで、また何れの日にか斯くの如き快事にめぐり合ふものぞと考へる時、そゞろ物のあはれを覺えるのは、歲の故でもあらうか。（一一・四）

草鞋後聞

ごくだみ

大きな圍爐裡、あか〳〵と燃える豐富な薪木、錆びたランプの下で祖父に樣々云はれながら草鞋を編んで居る。煮へ返る鐵瓶を吊下げた煤に黑ずんだ自在鍵が餘勁で大きくゆつたりと搖れてその影が化物の樣である。

かうして出來た草鞋を沓いて落葉に霜のある山途を若い母に手を牽かれながら疲れ果てゝ母の背に子守唄を聞きながら假睡に入つて行つた幼い時代や、故郷の風物や、父母をしのぶ最も力强い絲の源はこの草鞋である。この草鞋からあらゆる懷舊への細い絲が蜘蛛の絲の樣に擴げられて行くのである。

今でもスクリーンに小さい足にキチンと草鞋を沓いて手を牽かれて峠路へかゝつて行く子供を見るとき押し迫つた氣持になつて折には眼尻のうるむを覺ゆる事さへもある。

○

俺が三年の二學期の終りに草鞋を上草履に代用したのは經濟上の不如意が主で或ひはこんな纖細な感情が多少は從として働らいて居たのかとも思ふ。二ケ月間に亘つて代用したのは確かにこの感情が働いたと見ていゝだらうと思つて居る。

間の悪い時は悪いものである。二時間目に野外教練の服裝檢査とは前日無斷缺席したために少しも知らなかつた。足袋も靴もない。やつとゲートルは本居君から借りて間に合せたものゝ草履にこれを着用ではあまりに人を食ひ過ぎて居る。草履よりは未だ草鞋がいゝと俺は善意で草鞋にゲートルで外へ出た。

谷教官が一段高く立ち上つて『本年の野外教練は三日間相馬ヶ原で行ふ。中隊の編成は三年で一中隊、二年一年で二個中隊、第一、第二、第三中隊と命名する』とやつた時は少くとも養蠶科三年は一番適確に不服の色を現して小さな異論が隨所に持上つて來た。

野外教練は溫泉（いでゆ）と高原をめあてにした流行のハイキング味を加味するが第一條件だつた箇なのにこれがガラリと外れてしまつたのと、各科が同一中隊で顏を突き合せては面白くないと云ふので不滿の捌口を中隊の不統一に持つて行つたもの

である。

俺は元來樂天的から生ずる相當のんびりした氣持を持つて居これが更に進んでは割合に諦めの良い方であると思ふ。もうこんなことは以前からすつかり諦め切つて居た。

しかし事實あまり面白くもなかつたので少しは不平を鳴らしたものだつたが、俺を非常に自我の強い感情に走るうぬぼれの強い尻の穴の曲つた野郎と誤解して居る人も多數あるだらうが俺は決してそんなものぢやない。たゞ少し感情がありすぎると云ふだけで氣の弱い押しの弱い男である。

演習の細部に亘る説明がこの小噴言でさへぎられたとき、怒聲物凄く『たれか！』悪いことは出來ぬ。さては草鞋が見つかつたか南無三！　俺はこれを突嗟に『たじか！』と聞いてしまつた。

『駄目ぢやないか、うるさいぞ、氣をつけろ』『申譯ありません』かう謝まつて出るより返事の手前今となつては俺ぢやなかつたなと氣がついて見たつて仕方があるまい。

『今のは誰か。出て來い！』えらいことになつてしまつた。他人事ではない。

草鞋ではいくらなんでも……。實際冷汗三斗とはこんな場合を云ふのだらう。しかしもうこゝ迄來れば却つて度胸は据はる。

『エ、、ナンデイ、マ、ヨ』と云つた氣が憤然と起きてくる。若しまた前々から草鞋が見つかつたらちやんと申開きの言葉位は考へてある。『ヤレツ……』衆人環視の中を出て行く時はもう頭も身体も眞空狀態である。

『靴は？』『修繕です』『足袋は？』『カツパラハレました』それで終つてしまつた。案外あつけない程であつた。

後から考へて見て馬鹿を見たと思つた。誰が見たつてやり場のない反抗を草鞋へもつて行つたとしか思はれないし、また誰にでもつまらぬヒロイズムの現れと思はれるからである。偶然の一致と云ふか運命の然らしめたと云ふか、よくも撰つてあんな貧乏籤を引いたもんだとつくづく情なくなつてしまつた。同時に谷先生に濟まんと云ふ感情が胸を鎖して來た。だがこれとても時日が少しはぬりつぶしてくれて其後は『どうせ今更』と云つた投げた氣持も手傳つて依然として草鞋をはきつゞけた。そして校内ばかりでなく先天的な物事に拘泥せぬ性質と可なりの免疫性が原町や海野町をとのまゝ歩かせたり、又時には中村さんの家の尺八の樂譜を拜借に行つてきれいな奥さんと美しい春ちやんに、この草鞋をみつめられて足底に滲透して來る水で針でさす樣な冷たさのまゝ動けずに閉口してしまつた樣なこともあつた。

かくして二ケ月間冷笑や猜疑を默然と受けて俺の足を保護してくれたこの草鞋に殊更新らしく思出を殘して別れを告げた。草履を買つたからである。まだ大切にはけば二十日位はあつたらうに……。其後時日が經過して好機會もなく不本意のまゝ出てしまつた。

俺が別に奇を好むわけでもなく敢て小英雄的な小反抗を現すものでもなかつたと云ふことを谷先生はじめ他の方々にも了解して戴きたいと念ずる心は今に迄も變りはなかつた。

『どの道自分のしたことだ。今更何かと、理窟をつけるなんざあ女々しいことだ』と思つて默つて居たが矢張りこれははつきりして置いた方がいゝと思つたのである。

そして千曲時報に載せていたゞくことにした。凡そ謝罪の言葉は當面人だけでも充分だが、事件が多くの人を介在して生じた場合は其等の人々に同時に讀んで貰つた方が遙かに其の意義を深めるものと思ふからである。

○

もし學生諸君の中に雪焦けのした黑い汚い顏でスキーオイルの滲みたヨレ〳〵の服で歩いて居たこの俺を校舍か校庭の一隅にでも思ひ出してくれたなら、この文の載つた千曲時報を谷先生のお手許迄差し出して戴きたい。それは折角書いても先方で知らなかつたら、其の意を得ぬことの甚だ大であるからである。

呼んで『草鞋後聞』とは標題したが心中は陳謝で一パイである。

——霜月朔——

農林省便り

岳人生

晩秋である。旅人も宿を求める。異郷の假寢に過ぎ來し日の夢を見る。白帆の夢も綠蔭の夢も今は總て、歩み來つた時の直線上に停止して居る。再びは蘇らざる自分の化石である。

東京市自慢の鋪裝道路ももう流れない戀人を南へ送つたであらう自動車の轍の跡や、過去の遺物の樣に都大路を通つたであらふ馬蹄の跡が夏の酷熱を語る時代の化石の樣に取殘されて居る。

午後四時頃ともなれば宮城の木梢の薄く夕陽が射して小さい薄い影が出來る。都會に住むとこんな所へ秋を見出し、晩秋を感じ、冬の來るを知る。それは到底故郷に居て、山の頂の白くなるのや、裏の柿の熟するのを見て、眼に見えない四季を今更の樣に感ずるのにはるかに及ばないけれど、都會ではそれは山川草木に替る美しい暦である。

省は依然バラックである。當初は新建築も近いと聞かされて、想像もし他省の本建築を見もしたが、自分の影の樣に一歩進めば一歩遠退く此頃はもう諦めた。それに三年も住んで見ると、別に不便もなく却つて愛着を感ずる。營業會社ではないのだから朽果てぬ限り今の儘で良い樣に思ふ。然し何時だつたか書類入れの鐵箱を十個程拵べた時、梁が弓形になつたのには驚いた。營繕の人は『なあーに絶對大丈夫です』と云ふ。省はバラックとしては本格的のものであるさうだ。時たま地方の人が來て此處は地震には大丈夫ですと云ふ。自分達はすつかり諦めて居る所を變な事で威勢をつけられる。實際さうかも知れない。壞れる心配はないし、階下の人には氣の毒だけれど、小屋組が壞れる前に腰が潰れる。自分達は唯急激にそのまゝ階下に移る丈かも知れない。それにどうせ余程運の悪くない限り落る時は一緒である。もしそれで死ぬのなら天命として瞑すべしだ。

扨早くも三年經つて仕舞つた。實に光陰矢の如しである。その間に到頭自分が獨身者の筆頭になつてしまつた。自分が入つた當時は末だ小平、中島、大塚三氏が獨身を謳歌して悠々自適して居た。が今度入る人からは自分がこう書かれる番になつてしまつた。自分は去年の八月頃までは結婚讃美論者噴糞主義であつたが此頃は獨身クラブが一人欠け二人欠けして行くのを見、そしてその人達が皆其の後体重が増したり、面色に艶が出たり公務に精が出る樣になつたりするのを見たりすると一杯やり乍ら考へる。四時近くなつてそわ〳〵するのは感心出來ないとしても退廳して直ぐ家へ歸る氣になり得る丈幸福だと思ふ。尤も先輩の言に依るとそんな氣は初めの半年の間ださうで以後は單に動物の歸巢本能による丈ださうである。それにしてもいゝ。遊ぶ必要がない。二人者は過せても一人者は過せないとは昔の人もうまく言つたものだ。

蠶絲課の千曲會もすつかり貧乏してしまつた。もつともこれは元來基本財産を持たないのだから不可抗力であり、千曲會の傳統でもある。それでも何のかんのと月に一回位は所謂小宴會をやつて來た然し以前の樣に二次會、三次會はやらなかつた。民意がさうなつたのか、幹事の腕が悪かつたのか判らない。唯自分の思ふのに大塚氏と自分とでは三年も違ふ。その大塚氏の上が三人獨身であつた時には八人の會をある程度二次會へ引張つて行く事は可能であつた。がその三氏も結婚してしまつた今日、如何に楠氏の智と仙石の勇を以つてするとも既婚者八人を向ふに廻して太刀打は出來ない。分離あるのみである。

最近課内に於て圍碁が盛んである。これは議會中居殘りの副産物と言へる。當時役所に待機中の者が徒然のまゝに紙碁を盛んにした。これが心得ある者を奮起せしめ、新人を養成し延いて流行を齎らした。昨今稍下火となつた傾向はあるもその功績は大きい。平時圍碁に限らず種々の勝負事を以つて國民にある種の戰ひの要訣を知らしめる事は必要である。繭絲課同窓中Aクラスに屬する者に富岡、中島、室岡の三氏がある。前二氏は既成であり、室岡氏は全くの新人である。上野氏をBクラス筆頭として誤りなからざる可く、其他岩本氏がこれに次ぐ。田口小平、新庄氏は勿論心得あるべくも不幸にして未だ觀戰しない。大塚氏、深井氏と自分は先づCクラスの覇を爭ふものと自分は去年の八月頃室岡氏の春秋を迎へずしてAクラスに肉迫せるは氏の天才的午睡と共に後世歴史家の讃する所とならん。

岩本氏は自分の美的觀念からしては、美的存在である、君の豊頰は羽二重の如く、瞳のまたゝきは星のそれの如く、久遠の謎を含んで美しい。ほゝえみはアベマリヤのそれの如く慈愛と憂愁を含んで魅惑する。街路樹を潜つて鋪道をゆく時は、そのまゝ都會の持つ詩である。

深井氏は入省以來圍碁に專心努力し、同宿の高段者を客將として居るさうであるから間もなく覇を稱へるであらふ。

次に諸氏に就て各論に入るべきであるが、誰は相變らず盛んだとか、誰は何より何が好きだとか、誰は飲むとすれば何處へ行つて何處を通つて何時頃歸るとか、誰は何に就て明るいとか、何がお得意でどの位酔へばそれをやるとかはもう總て衆知の事であるから止めておく。唯後輩に就ては今迄の例に從へば自分の指導如何によるのださうであるが、皆幸ひにして百萬人と雖も吾行かんの元氣があるから心配ない。自分はもう老衰してしまつて新人の開拓した新天地へ見參させて貰ふのを待つのみである。次に參考迄に各關係勤務を列記しやふ。

田口、小平兩氏—補償生絲新規用途
上野、中島、大塚、岩本四氏—乾繭倉庫産組整理合同
室岡、深井、兩氏及自分—製絲業法
新庄、富岡兩氏—繭檢定
福島氏—經濟更生部産業組合課

秋去りて冬のはじめ。幸ひ同窓諸兄の自愛を祈る。

（附記）

去る二十一日よりの母校祝賀會には是非出席の心算でそれ相當の準備をなし、相當の樂しい夢やら、會合の嬉びを描いて居たのであるが直前になつてある理由の爲に不可能になつてしまつたのは返す〳〵も殘念である。五十年、百年の祝賀會には必ず子孫を連れて參加するから今度一人でも多い事を望んだであらふ同窓諸兄特に同期生諸兄の寛恕を得たい。これは繭絲課で出席出來なかつた人々の總意でもある。

上田便り

上松線開通式　五ヶ年間繼續事業の縣道上田松本線五十四キロ幅員三間半の改修工事は漸く完成したので上田松本東筑小縣の市町村が合同し十月八日午前十一時より東筑摩郡中川村地籍に於て有力者三百餘名參集盛大なる開通式を行つた。

北本州商工會議所聯合會定時總會　第二十九回北本州商工會議所定時總會は十月十、十一、十二の三日間に亘り開催され第一日十日は午前十一時から上田商工會議所に於て開催され、新潟、金澤、富山、高岡、福井、長野、松本、長岡、直江津、高田、上田の十一市會議所代表者に來賓として商工省商務局商工會議所主任官山口玄惠氏、日本商工會議所書記西牟田清藏氏、本縣三好經濟部長、杉原商工水産課長等九十名に達し各會議所提出の十八議案に對する協議をなし香青軒で午餐會、二時會議終了、會議所前で記念撮影を行ひ、次いで上田蠶絲專門學校、上田城趾、陸軍上田飛行場、常田館製絲工場、水野輸出玩具工場、信濃國分寺を視察し午後六時から市公會堂で伊藤會頭の招待晩餐會を催した。

第二日目は十時より商工會議所に於て協議會開催正午同所で午餐、午後一時再び本會議再會、次回開催地を福井と決定午後二時閉會し眞田氏史蹟及菅平高原の視察を行ひ午後六時から市公會堂で成澤上田市長招待の晩餐會を催した。

三日目は有志廿六名が自動車六臺に分乘午前八時上田發、淺間山麓、草津溫泉新鹿澤溫泉、鳥居峠を經て上田へ歸る循環コースをドライブし散會した。

染織展覽會　上田染織講習所では十月十四、十五兩日に亘り第七回染織展覽會を開き實習作業公開、講習生實習品並に製品卽賣、講習生製作品展覽、卒業生製作品陳列、地元當業者製品陳列を行つたが絶好の秋日和で農村からの人出も多く非常な賑ひを呈し製作品は羽が生えて飛ぶ樣に賣れた。

太郎山引退記念大角力　十八年間の華やかな土俵を退き年寄浦風を襲名する事となつた上田出身東京大相撲太郎山事宮島峰吉君（三五）の引退記念興行は横綱玉錦以下百餘名の一行を迎へて十月廿二日市營球場で擧行されたが空前の人氣を呼び入場者二万餘に達し斷髪式は午後二時四十分より行はれ本縣出身堀内中將は房々とした大たぶさに鋏を入れ嚴かな斷髪式は終り十一代浦風襲名披露あり幕内の相撲があつて午後四時盛會裡に終つた。

上田松本間省營バス路線に決定　鐵道省の明年度省營自動車路線計畫は兼ねて省議を重ね愼重詮衡中であつたが十月廿三日内田鐵相の決裁を經て全國に亘り十九路線を新設する事に最後的決定を見た依つて三十日本省内に鐵道會議を開催審議し來議會に提出する事となつた。然して右十九路線中本縣關係は左記二路線である。

松本青木間四八、五粁及明科中川間八粁計五六、五粁

立川及所澤機の飛行演習　立川飛行第五聯隊八八式偵察機一臺、九一式戰鬪機九臺は十月十二日翼を連ねて飛來上田飛行場を中心に山岳演習を行ひ次いで高等飛行を演じ十三日朝立川に歸還、更に十五日は八八式偵察機十機にて飛來演習を行ひ十六日歸還した。次に廿四日から一週間所澤飛行學校の八八式偵察機並に戰鬪機十四機が飛來演習を行つた。

上田飛行場でグライダー演習　グライダー王ドイツ人ウオルターヒルト氏は十一月十四日上田飛行場及菅平視察の結果適當なるを認め十八日クレム輕飛行機に曳航して同氏の愛機ゲツヒンゲン一號機は上田飛行場に空輸され同飛行場東方で飛行機から離れ高原の秋空を二千米で凡そ一時間に亘り飛翔盛んに宙返りを行ひ妙技を示し日大法政の學生其他に指導し自動車曳航飛翔も數回試みたが同氏は左の如く語つた。「菅平を含む上田盆地はグライダーに誂向きな場所で獨乙にも少い。之の上不時着陸場を造れば世界に誇るグライダー帆走地となるであらう」云々。斯くてヒルト氏は以來一週間連日の晴天に惠まれ空の漫歩を滿喫し廿二日には日本帆走飛行聯盟會長荒蒔中將等の見學があり一先づ廿四日午前十一時所澤に引揚げたが廿一日再び愛機に搭乘クリム機に曳航させて飛來更に獨乙より携へて來た新型機をも使用して練習、東京帝大生等に指導中であるが二週間滯在の豫定である。

上田飛行場擴張　陸軍上田飛行場は四万三千坪の處今回西方隣接の内務省河川敷一万四千坪を陸軍省管理として同飛行場に編入擴張する事に決定した。依つて第十四師團經理部吉田一等主計外一名は十月廿二日來田墨界線設定を行つた。

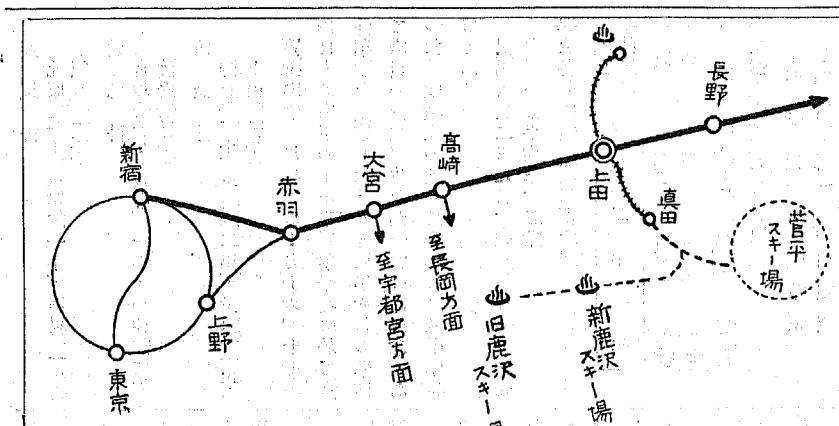
上信省營バス開業十二月十一日　上田溫電北東線終點眞田（小縣郡長村）と群馬縣澁川町を結ぶ上信省營バス八十一キロは道路橋梁等の修理意外に手間取り十二月一日の開通豫定が遲れ十二月十一日から全通と決定十月廿八日公示された。唯今眞田、澁川に車庫を建設中で降雪前は大型バス二臺を常備し降雪後は菅平及新鹿澤行のスキーヤーの爲め小型バスで眞田菅平口間を運轉する豫定である。

國勢調査の結果　上田市の國勢調査の結果は前回昭和五年以來打續いた不況の爲め增加率は寥々たるもので世帶數七千六百二十戸で前回より二戸を減じ人口は三万五千三百七十七人で三百三十九名增である。參考の爲め縣内主要都市の人口を擧げると長野市七万六千六百九十四人（二千七百八十二人增）で依然縣下第一位、松本市は七万三千五百人（千三百五十九人增）、平野村は四万一千五百人（一万二千三百人減）、上諏訪町は二万三千六百人（千三百四十七人增）、飯田町は一万七千九百九十人（一千四十二人減）である。又附近の丸子町は一万八百五十一人（千八百三十六人減）であつた。

養蠶家の增收百五十万圓　上田蠶取支所管内上小本年度春夏秋を總括した養蠶收入豫想は左の如くで養蠶家一戸當收繭六十一貫にして前年より七貫減少したにも拘らず本年は繭値が尻上りとなり貫當り平均昨年の二圓六十九錢に對し本年は四圓四十九錢の收入增（總計では百四十九万二千六百餘圓增）で養蠶家は豫想外の增收殊に晩秋蠶平均六圓を突破して繭々振りである。（括弧内前年）

△掃立量百九十五万千十九瓦（二百十七万三千七百二十四瓦）△產繭八十八万六千五百六十一貫（九十九万九千百六十二貫）△價格三百八十八万四千四百圓（二百三十九万千七百三十九圓）△養蠶家一戸當二百六十七圓九十錢（百六十三圓八十錢）△上繭平均値段四圓四十九錢（二圓六十九錢）△養蠶戸數一万四千五百戸（一万四千六百二十二戸）△一戸當收繭量六十一貫（六十八貫）

上信高原　菅平と鹿澤スキー場



◎**菅平スキー場**は、上田市外長村にあり海拔約千三百米の上信高原の猫岳（海拔二一九五米）と四阿山（二三二米）の頂上から綴く曳いた雄大なスロープで、雪の王者シユナイダー氏がスキスのシュワルツ、ワルドに彷彿たりと激賞した所であります。積雪期間は十二月中旬から三月下旬迄で、全部芝生の高原ですから、僅少な雪量でも快い粉雪で何時でも滑走が出來ます。

◎**新鹿澤溫泉と舊鹿澤溫泉スキー場**は群馬縣吾妻郡嬬恋村にある上信高原の淺間連峯海拔二千米級の十餘峯兩溫泉場を中心に聳立し、雄大なスロープは數粁に渉つて展開されて居ります。雪質は良好で何れも期間は十二月中旬から三月下旬迄充分滑走出來ます。

◎**交通**

東京、名古屋、大阪各鐵道局管内主要驛から菅平及新鹿澤鹿澤スキー場へは（汽車、電車、自動車、を含む）割引があります。

◎**宿泊設備**

△菅平

（旅館）菅平ホテル、鐵道省山の家、高原ホテル、其他數軒

（農家）宿泊設備整ひたる家約五十戸

（收容力）旅館、農家共にて約三千人

（宿泊料）一泊三食付、旅館一圓八十錢、鐵道省山の家並農家一圓十錢

△新鹿澤溫泉

（旅館）鹿澤館、鹿鳴館、增屋、小增屋

（收容力）約一千人

（宿泊料）一泊三食付、一圓八十錢

△舊鹿澤溫泉

（旅館）紅葉館、（收容力）四百人

（宿泊料）一泊三食付、一圓八十錢

◎**貸スキー**　各ホテル、旅館、農家等に貸スキーの設備があり。一日一臺料金二十錢

◎**通信**　菅平、臨時郵便局開設十二月二十日から三月廿一日まで、スキーヤーの便を計り菅平ホテル前に臨時郵便局が開設され一般の郵便事務を取扱ひ致します。

上田市北天神町（電話上田六五四、九六五）
上田溫泉電軌株式會社

母校ニュース

晴れの演武大會に出場の本校選手

十月三日御來縣の大日本武德會總裁梨本宮守正王殿下御臺覽の演武大會は同日午後一時半より長野武德殿に於て少年中等學校、高專校、青年、一般、警察、在軍等各團體より二名宛の代表選手に依り擧行されたが本校より出場の榮譽を擔つた者は左の諸氏である。

劍道高專校代表

清水　傳（蠶三）　千吉良長二（紡二）

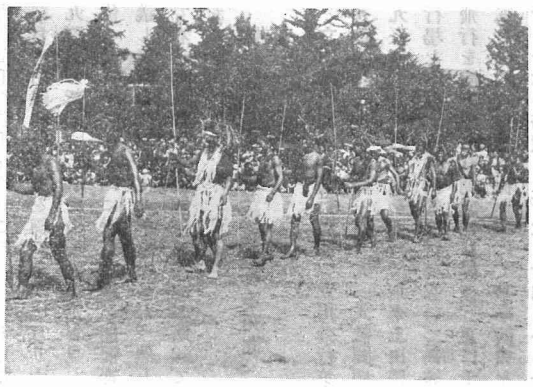
劍道指定選手　廣川　正治（職員）

第二十回陸上運動會　廿五周年祝賀のトップを切る母校第二十回陸上運動會は例年より期日を早めて十月十三日午前八時より母校運動場に於て擧行せられた。之れより先十二日の夜は六時から十時頃迄三科の學生が思ひ〳〵に紛裝を凝し旗を押立て鐘太鼓を鳴し應援歌を高唱して練り歩き時々圓陣を作つて拍手を送り街頭デモを行ひ運動會や賣店の宣傳迄行つた。其の夜の町は之を見物せんとする大衆で車馬も通れぬ位に賑つた。

（製絲科の街頭デモ）

明くれば十三日空に一點の雲なき快晴である。運動會は三科選手應援團の入場式學校長の訓示にて開始された。例に依り養蠶科は壽司、汁粉、團子等、製絲科は眞綿、石鹸、繪ハガキ、紡織科は縫絲、靴下、タオル、風呂敷、木綿反物の賣店を出し修巳寮では食堂を開設した。母校の運動會が上田の呼び物である上に快晴も手傳つて觀衆は數千運動場に溢れ賣店は晝頃迄に殆んど賣切れとなつた。

當日の呼び物である餘興は紡の際物を窺つた身體を眞黑に塗つて土人に紛した「エチオピア踊」絲二の「精神病院の運動會見物」と題し早發性痴呆症、誇大妄想狂等々之の世にありとあらゆる狂人を看護婦附添ひで引張り出して觀衆をアッと云はせ蠶二は又「太陽西より出ずれば」と題し親父が乳母車に乘つて赤ん坊が押して行くのや泥棒が巡査を縛つて行くと云ふ樣な反對許りを並べて腹の皮をよぢらせた。


（紡織科の餘興エチオピア踊）

かくて夕闇迫る午後五時頃學校長の發聲にて萬歲を三唱し散會した。

本年の對科競技は八〇〇米競走及八〇〇米繼走にて判定困難となり本年は三科勝負なしと決定した。左に對科競技の成績を示す。昨年に比し紡大いに躍進し蠶絲は成績殆んど同樣である。記錄は前年に比しフィールドでは進歩したがトラックでは悪くなつた。

6　八〇〇米競走　1望月（蠶二）　土屋（絲二）二分廿五秒　3柳澤（紡二）　4清水（絲三）　5諸岡（紡二）　6小松（絲一）

7　一〇〇米競走　1北原（蠶三）十二秒五分ノ一　2宮坂（絲三）　3渡邊（絲三）　4濱村（蠶一）　5柳澤（紡一）　6有間（蠶二）

13　圓盤投　1小松（絲二）二七米五二　2日幡（絲一）　3市原（蠶一）

14　二〇〇米競走　1北原（蠶二）　二五秒　2宮坂（絲三）　3渡邊（絲三）　4濱村（蠶一）　5柳澤（紡一）　6佐藤（蠶一）

22　走高跳　1兒玉（蠶二）一米五〇　2瀧川（蠶一）　3外城（絲一）

23　四百米競走　1北原（蠶三）一分五分ノ一秒　2望月（蠶二）　3宮坂（絲三）　4渡邊（絲三）　5柳澤（紡一）　6柳澤（紡二）

25　砲丸投　1小松（絲二）十一米三五　2平林（紡一）　3福永（紡一）

35　千五百米競走　1柳澤（紡二）五分一〇秒　2土屋（絲二）　3清水（絲三）　4矢澤（紡二）　5外城（絲一）　6阿形（蠶一）

36　走幅跳　1瀧澤（蠶一）五米七七　2上田（紡三）　3兒玉（蠶二）

24　棒高跳　1金藤（絲一）二米八一　2伊藤（紡一）　3瀧川（蠶一）

43　長距離競走　1柳澤（紡二）四十四分七秒　2桂（蠶二）　3古田（絲二）　4小松（絲一）　5清水（絲二）　6進野（絲一）　7上田（絲一）　8矢澤（紡二）　9内間（絲一）　10小林（紡一）

43　槍投　1日幡（絲一）四〇米六五　2小松（絲二）　3岩本（紡二）

53　三段跳　1有馬（蠶二）十二米三二　2兒玉（蠶二）　3上田（紡二）

70　八百米リレー　養蠶科　北原（三年）　瀧川（一年）　濱村（一年）　望月（一年）　製絲科　宮坂（三年）　金丸（一年）　小林（二年）　渡邊（三年）　紡織科　柳澤（一年）　矢崎（二年）　伊藤（一年）　上田（三年）

實彈射擊　母校では十月十六、十七の兩日太郎山下の上田市營射擊場に於て實彈射擊を實施した。廿五周年祝賀の準備で職員の參加が少なかつたのは殘念であつた。成績左の通りで昨年より的中率良好である。

出場人員二三九名、總發射數一一九五發、一發平均三、五點

學生各科成績（一發平均點）

學年＼科	三年	二年	一年
蠶	三、三三五	三、五六	三、一三
絲	三、〇一	三、六四四	三、五一
紡	四、一六〇	三、六二	三、一〇

學生個人成績（五發々射）

1四三點　絲一　吉瀨重正

2四二點　絲一　高田正氣

3四一點　蠶二　佐藤雪雄

職員個人成績（五發々射）

1三一點　廣川　助教授

勅語捧讀式　十月三十日午前八時より講堂に於て勅語捧讀式を擧行、終つて學生退場し教職員下賜の勅語捧讀式を擧行し二時より授業を開始した。

明治神宮体育大會柔道戰に小松君出場　明治神宮体育大會の柔道第二日は十月三十日午前八時から日本青年會館大講堂で開催され午前中は大學高專校の部、午後は一般の部で龍攘虎搏の白熱戰を展開したが高專校の部に本校よりは三段小松正敏君（絲二）が出場し山口高商の市原三段と取組んだが惜敗した。

始業時間變更　十一月一日より午前八時始業を八時五十分に變更し午後一時始業を一時十分に變更した　從つて晝休は一時間が三十分に短縮された譯である。

熱田神宮遷座祭遙拜式　熱田神宮遷座祭に對し本校にては十一月一日午前九時より講堂に於て遙拜式を行ひ全校職員生徒出席熱田神宮の方向を遙拜し次いで校長より熱田神宮に對する訓話があつた。

明治節祝賀式　十一月三日午後九時より講堂に於て全校職員生徒出席し明治節祝賀式を行ひ御眞影を拜し國歌を合唱し學校長より訓示特に國体明徴に關する注意があつた。

蠶絲業關係三市對抗庭球リーグ戰　十一月三日縣會議事堂コートに於て第七回目の蠶絲業關係三市對抗庭球リーグ戰を擧行した。之の日空高く晴れて無風絶好の庭球日和、午前九時半荒井蠶絲課長の開會之辭、上田軍より優勝カップの返還式を行ひ午前十時より上田對長野、長野對松本、松本對上田の順に白熱戰を演じ左記戰績を以つて上田軍全勝したが松本より勝負は個人勝數の合計にて決するものなる事を强調する者あり遂に優勝カップは松本軍が獲得する事となり本校佐藤（利）教授の手に依り松本軍に手交し午後五時終了した。引續き西洋軒に於て懇親會を開催した。終りに長野市關係各位の御好意を謝す。

長野　上田（二―五）
篠原　安川一―四小林（筍）馬場
宮原　青木四―三小林（繁）橋本
武田　福田三―四齋藤　北島
大澤　山田〇―四瀧澤　熊谷
日高　宮澤〇―四竹内　松岡
石塚　酒井〇―四清水　藤田
小暮喜多村四―三倉澤　出崎

長野　松本（〇―七）
大澤　山田三―四近藤　田村
武田　福田一―四市川　越
篠原　安川一―四大島　高橋
石塚　酒井一―四壁谷　縫島
日高　宮澤一―四森田　酒井
宮原　青木二―四粕川　横澤
小暮喜多村三―四小野　熊谷

松本　上田（三―四）
近藤　田村一―四小林（筍）馬場
市川　越　四―一齋藤　北島
大島　高橋四―〇瀧澤　熊谷
壁谷　縫島四―二小林（繁）橋本
森田　酒井一―四倉澤　出崎
粕川　横澤二―四竹内　松岡
小野　熊谷二―四清水　藤田

叙任辭令

舊職員之部

昭和十年十月三十日
地方商工技師　早乙女新一郎
高等官六等待遇

同窓生之部

昭和十年十月八日
公立實業學校長　佐藤俊三
十級俸下賜
昭和十年十月十四日
公立實業學校敎諭　小澄晋
昭和十年九月三十日ヨリ年功加俸
金百九拾貳圓下賜
同　田中康雄
七級俸當分四百八拾圓下賜
昭和十年十月十八日
地方農林技師　山本岩三郎
長野縣農林技師ニ補ス
昭和十年十月廿四日
同　森千城
九級俸下賜
昭和十年十月三十日
同　久保田正樹
高等官四等待遇
同　山本岩三郎
同　森本爲之助
高等官五等待遇
同　上林多兵惠
同　宮崎淸治
高等官六等待遇
昭和十年十一月四日
同　山本岩三郎
九級俸下賜

（久保記）

本會記事

本會日誌

十月九日
追悼會費中へ寄附せられたる故原正一郎氏御遺族に對し謝狀發送す

十月十日
一、理事會開會代議員會提出問題詮議す
一、故今井眞平氏の葬儀執行せらる安筑支會と共に敬弔の意を表せり

十月十四日
長野縣知事より形像建設の件許可あり

十月十五日
記念祝賀式擧行の件に關し在田會員の打合會行ふ

十月十七日
一、本會役員に對し代議員會へ參與の件通知す
一、監事會開催の招集狀發送す
一、壽像建設費寄附者上田蠶種株式會社外三十六氏へ禮狀發送す

十月二十日
記念祝賀式擧行の準備す

十月廿一日
記念祝賀式、記念品贈呈式、壽像除幕式、提灯行列、擧行す

十月廿二日
織維工業學會及日本蠶絲學會特別講演會開催す

十月廿三日
物故者追悼會、本會大會並に第九回代議員會開會す

十一月四日
一、代議員會に於て決定せる役員に對し當選の告知す
一、富岡泰氏(蠶六)逝去せられしを知る、直に弔電を發す
一、理事會開催記念祝賀式擧行後の殘務處理に關し協議す（久保記）

記念論文集編輯後記

產み出して見ると矢張り之丈けのものだつたのかと思はれもするが兎に角相當に產みの苦しみを感じて漸く我等の記念論文集を世の中に送り出すことが出來た。色々の都合から期日の點では隨分忙しい思ひをし特に顧問として長野蠶業試驗場の方々には大變な御迷惑をかけた。その代り我々の方は安心して校正編輯に從事する事が出來た。厚く謝意を表する次第である。餘り仕事に追はれて不滿足のものを出すより少し期日が遲れても立派なものに仕上げては何うかとの御言葉もあつたが、それが爲には意に任せぬものもあり又何うしても式の當日記念品として御持參願ひ度いとの願望から相當馬力をかけて、何うやら間に合はせた次第である。記念日に御來臨できなかつた方々には近日發送致したいと思ふ。

論文集の內容に就ては御覽の通りであるが、今回のものは從來のものに比し其の報文は兎に角蠶絲業の全部門に亘つて居りそして又本會が本年度得た博士の學位論文要旨を盛り、尙ほ本會員が同窓會報並に本蠶絲學雜誌に報告された文獻の目錄を全部登載したわけで意義あるものとせねばならない。今回の如く良く原稿の集つた事は一に三十有餘名、著者各位の御芳情の現れであり、熱意の結晶であると玆に本誌を通じて滿腔の謝意を表する次第である。正直を言へば實は今回は原稿が多すぎて始め三〇〇頁位といふのが四五〇頁に增頁してしまつた程で一部寄稿をさへ御斷りせねばならなかつた位である。之は二十五周年記念といふ劃期的のお祝ひの際であつたからと思へばそれまでゞあるが、通常の場合には年三回の發行であるのに寄稿數が思はしくないといふのは一つは編輯者の熱意の不足より來るものと思はれもする。然し今回の擧によつて決して寄稿の不足を來すことはない筈であるといふ事が明かになつた。そして之は本會の爲に誠に心强い事と私は喜んでゐる次第である。寄稿できないといふ方が寡ろ不幸になつて來る。

尙更に今回を期として從來動もするとの必要を感じられない方々も本會の爲に購讀且つ御寄稿あらん事を切に〳〵希望する次第である。世は正に科學の時代であると思ふ故に。

× × ×

本記念論文集の**正誤表**は早急の際とて式當日差上げたものは未だ不滿足であるので何等かの方法により御通知いたす心算である。何卒御訂正あらん事を。

尙式當日御參列の方で雜誌を差上げてない方及び今回の發送に洩れた方は失禮ながら御一報を願ひたい。

又雜誌は相當のストックもあるから會員外の御希望の方にも御頒ちしたい。但し**定價金貳圓**代金引替へ送料本會持ち。

記念論文集編輯係
（山口記）

廿五周年記念事業

第十八回醵出口數申込者（十一月三日現在）

六口　岡泰助(絲六)　沈九如(絲十四)

五口　市川恕平(蠶一)　平澤勝(蠶三)　田中一男(絲一)　藤井料(絲五)

四口　緒方善之助(蠶八)　深谷正一(蠶十)　兒玉慶次(絲八)

三口　濱井壽夫(蠶二)　淺見好雄(蠶二)追加　宇田虎一郎(蠶十)　川島熊太郎(蠶十二)　周元功(蠶十七)　岩田正(絲十二)

二口　玉木勝彰(蠶一)　小林禮二(蠶三)　岸田繁雄(蠶七)　細野新太郎(蠶九)　長谷川正雄(蠶十一)　中澤二郎(蠶十六)　白健濟(蠶十七)　武田一好(蠶十九)　山浦卓郎(蠶十九)　見波忍(絲二)　青木喬(紡二)

一口　籠谷正男(蠶十四)　姜景喜(蠶十六)　關辰雄(蠶十七)　吉田正雄(蠶十九)　頴富正廣(蠶二十)　酒匂景雄(蠶廿二)　岡島龜治(蠶廿二)　加藤善一(絲八)　安井義忠(絲六)追加　佐藤與四次(絲八)追加　蒲生勇一(絲十)追加　沓掛聰(絲十六)　酒井淳夫(絲十八)　河野辨太郎(絲廿二)追加　大森一男(紡十二)　長谷川任三(紡十二)　山本七郎(紡十四)　淸水藤枝(敎三)　和田りん(敎三)　藤田しづ子(敎三)　若林のち子(敎三)　宮城久子(敎三)　關あぐり(敎三)　山崎みつい(敎三)　深町いつ(敎三)

合計人員　五十一名
合計口數　百〇九口
合計金額　五百四十五圓

第十八回醵出金納入者（○印完納者十一月三日現在）

五拾圓也
○蒲生俊興(蠶一)　○倉澤美德(蠶二)　○織田博(絲一)　○林貞三(絲三)

四拾圓也
○濱井壽夫(蠶二)

參拾五圓也
○加藤善一(絲八)

參拾圓也
○高須兵司(蠶一)　○岡泰助(絲六)　○安井義忠(絲六)　○沈九如(絲十四)

貳拾五圓也
○市川恕平(蠶一)　○林新一(蠶二)　○中山鑑一(蠶三)　○齋藤格次(蠶三)　○小林輝一(蠶四)　○田中一男(絲一)　○藤井料(絲五)

貳拾圓也
○船後勇平(蠶六)　○久保田昌人(蠶七)　○緒方善之助(蠶八)　○淸水淸(蠶九)　○安仲勳(蠶九)　○深谷正一(蠶十)　山岸松次(絲三)　○兒玉慶次(絲八)　○三好彌市(絲八)

拾五圓也
○淺見好雄(蠶二)　○都丸晴治(蠶七)　○宇田虎一郎(蠶十)　○川島熊太郎(蠶十二)　○山形新太郎(蠶十二)　○周元功(蠶十七)　○中川灘(絲三)　○小山久一(絲四)　手塚芳太郎(絲五)　○岩田正(絲十二)　○和田虎三(絲十二)　○山田鉾一(絲十二)　○國貞忠男(絲十五)　○酒井淳夫(絲十八)

拾圓也
○玉木勝彰(蠶一)　○小林禮二(蠶三)　○岸田繁雄(蠶七)　○細野新太郎(蠶九)　○長谷川正雄(蠶十一)　○中村岩人(蠶十五)　齋藤幸藏(蠶十五)　○中澤二郎(蠶十六)　○深迫明(蠶十六)　○白健濟(蠶十七)　○倉澤一二三(蠶十七)　○宮堀俊雄(蠶十七)　○武田一好(蠶十九)　○山浦卓郎(蠶十九)　○赤羽是壽(蠶十九)　○福地進(蠶廿)　○見波忍(絲二)　○池田忠次郎(絲七)　○小山雅夫(絲十)　○和田晋(絲十三)　○細田親二(絲十五)　○高須正高(絲十七)　○大木定雄(絲十九)　○青木喬(紡二)

五圓也
○丸山武夫(蠶五)　○籠谷正男(蠶十四)　○中村馨(蠶十六)　○姜景喜(蠶十六)　○關辰雄(蠶十七)　○吉田正男(蠶十七)　○頴富正廣(蠶廿)　○酒匂景雄(蠶廿二)　○岡島龜治(蠶廿二)　○佐藤與四次(絲八)　○蒲生勇一(絲十)　○沓掛聰(絲十六)　○東家明秀(絲十九)　○荻原行雄(絲廿)　○新野武男(絲廿二)　○河野辨太郎(絲廿二)　○長谷川任三(紡十二)　○大森一男(紡十二)　○榎本健治(紡十四)　○山本七郎(紡十四)　○飯島六(敎三)　○井上すい(敎三)　○白井和子(敎三)　○淸水藤江(敎三)　○春原さと(敎三)　○關あぐり(敎三)　○西原藤(敎三)　○深町いつ(敎三)　○藤田しづ子(敎三)　○宮城久子(敎三)　○山崎みつい(敎三)　○若林のち子(敎三)　○和田りん(敎三)

貳拾圓也　原唯次郎(原正一郎氏遺族)
貳拾圓也　小縣蠶業學校職員一同
六拾四圓也　縣下實業學校長一同(卅二名)
拾錢　敎婦養成科追加分
五圓也　松林竹肥虎
壹圓也　藤澤直枝
百圓也　郡是製絲株式會社
五圓也　林太喜一郎
貳拾圓也　丸交、交水社、共同組、丸六、丸二、二重丸組
貳拾圓也　增澤商店
貳拾圓也　純水館
參拾圓也　昭榮製絲株式會社
貳拾圓也　上田病院長
貳拾圓也　上田蠶種株式會社
貳百圓也　校長壽像建設準備金(千曲會ヨリ)
四百圓也　廿五周年祝賀會準備金(千曲會ヨリ)

合計金　貳千參百貳拾圓拾錢
累計金　壹萬七千九百五拾貳圓七拾錢

（崎山記）

訃報

御逝去通知

本會々員　富岡泰氏（蠶六）

九月二十八日御逝去せらる。謹みて哀悼の意を表す。

御遺族　宮崎縣西諸縣郡眞幸村　令閨　宮崎つら氏

弔慰金募集

本會々員　富岡泰氏（蠶六）

豫て御病氣の處養生不相叶九月二十八日御逝去致されました。依て弔慰金は昭和十一年一月末日迄に取纏め御遺族へ贈呈致したいと思ひますから夫れに間に合ふ樣振替口座東京第四三三四一番へ富岡氏弔慰金の旨御記入の上御拂込下さい。

昭和十一年十一月十五日　千曲會

故沼田周造氏弔慰金第五回

金貳圓也　曾山　直高

累計金參拾參圓五拾錢也　（白倉記）

會費領收（九月三十日現在）

（久保記）

昭和十年度通常會費納入者

（○印は蠶絲學雜誌代共）

○坂田榮雄（蠶二）　○吉野健吉（蠶四）
○木脇寅熊（蠶四）　○栗原　章（蠶五）
後藤仙彌（蠶九）　猪瀬親二（蠶十一）
増田　孝（蠶十一）　○川島熊太郎（蠶十二）
○仲内　靜（蠶十三）　○大熊康氏（蠶十三）
松本一二（蠶十六）

○桑原與四右衞門（蠶十六）
○今井和人（蠶十六）　小林辰夫（蠶十七）
○白　健濟（蠶十七）　○周元　功（蠶十七）
橋本　博（蠶十七）　○尾崎利雄（蠶十八）
若林　榮（蠶十九）　○梶田　陛（蠶十九）
倉元隆太（蠶二十）　○山崎勝巳（蠶二十）
○渡邊正男（蠶二十）　清水　洸（蠶二十）
○前島正道（蠶廿一）　○鈴木正悟（蠶廿一）
國島　正（蠶廿二）　鈴木重孝（蠶廿二）
安井義忠（絲六）　○小笠原喜代三（蠶八）
○堀忠太郎（絲九）　○依田寛之助（絲十）
若林新一郎（絲十）　小山田道男（絲十）
山田斧一（絲十三）　○則信忠夫（絲十四）
○松田　偉（絲十七）　西尾重郎（絲十八）
鈴木保男（絲十八）　松井憲二（絲十八）
野田太郎（絲十八）　東家明秀（絲十九）
依田　實（絲二十）　○新村五郎（絲廿一）
瀧澤正一（絲廿二）　○小川茂治（絲廿二）
○臼井洋介（絲廿二）　○原田正彬（絲廿二）
青木　喬（紡二）　小林忠十郎（紡十）
榎本健治（紡十三）　山田隼男（紡十三）
山本七郎（紡十四）　（白倉記）

故三谷徹氏記念賞金寄附者芳名

金拾圓也　三谷賢三郎
金參圓也　西　孝重
金貳圓也　兒玉　來

右合計金拾五圓也

累計金壹千四百八拾四圓五拾錢也　（白倉記）

新京より

濱香三

（前略）小生は渡滿以來至極壯健にして愉快に暮居り候間他事ながら御安心下され度候。渡滿の第一使命なる特許局創設の事も着々進捗致居り特許法は既に法制局の第一讀會を了り近日中に第二讀會を開催する豫定に御座候。從て特許法は本年中に必ず公布出來得る運びと相成り候間明年早々には滿洲國工業所有權制度の確立を見ることを得べく候。尙小生は右特許局創設事務の外に實業部本部に於て全滿洲國紡績蠶絲業の統制事務を主官することゝ相成り候。之は母校に對しても吾人の本來の面目を致すものなりと確信仕り及ばずながら懸命の努力を致可候。之の點に關しては上田在學當時小生の渡滿問題（日支文化事業）にて諸兄等と三號教室にてなしたる事を想起し必ず諸兄も御喜び下さることを確信仕り御報告申上候。目下公務多忙にて寸暇も無之有樣亂筆以て近況御通知申上候　敬白（康德二年十月十一日、香山宛）

正誤訂正

前月號十四頁在外研究員中石倉新十郎氏を脱漏に付次の如く追加す。

氏名	發令	歸朝	在留國名	研究學科目
石倉新十郎	大正七、十二、二八	大正九、六、一四	絹絲紡績並撚絲機織論	

發令ヨリ歸朝マデノ期間　一年六ヶ月　米、佛、伊

前月號廿八頁　十五年以上勤續者氏名中清水寛孝氏は就職年月日　大正六年八月一日勤續年數一八年三ヶ月と訂正す。

第十一回同期會

こんな席でゞもなければ會ふ事が出來ぬので紡織科の卒業生に今夜の會を通知するのともう一つは紡織關係の來賓に挨拶する爲めに午餐會の會場を泳いで廻つた。すると二三人で呼ぶ者がある。見ると同期の養蠶製絲の連中がかたまつて飲んでゐる。行つて見ると一パイ飲ませられて「今夜十一回の會合をやりたい。場所と時間を定めて呉れ。その代り決めた事にいなやは云はぬ」と云ふ御命令である。嫌が應もない。仕方がないから引受けたものゝ時間の方は五時から夜會、八時から紡織の會があるので自分の案として六時半からと定めたがさて困つたのは場所である。今夜は何處も母校關係の會合で滿員であらう。今頃になつて委されたつてどうしやうもない。獅子を見乍ら除幕式に參列し乍ら、よくもない頭をいろ〳〵ひねつて見た。そして最後漸く落付いたのがなるべく學校連中の話題に上らない料理屋と云ふ事で二つ三つ頭の中へ數へた結果喜與川と云ふ事にし電話を掛けて見たら都合がつくと云ふ事である。この時位ホットした事はなかつた。それから又群衆の中を通知して歩く。ごたごたの中を生物を探す程骨の折れる事はない。却々時間と空間が一致しない。漸く二三人に丈通知して殘りの人には言傳を頼んだ。五時來賓を送つて市公會堂の夜會へ行く。定刻になつても宴會は始まらない。階下の控室で上田藝妓連中が手踊を見せてゐる。こう云ふものを見るのは滿更嫌ひでも無いが今夜丈は氣が氣で無い。やつと終へた時は六時を大分過ぎてゐた。もう行かなければならない時間である。喜與川へ電話して見ると全部集まつてゐると云ふ。「宴會は遲れてこれから始まる處だ。中座して行くから三十分ほど許して呉れ」と掛けて二階の會場へ上る。先づ市長の開會の辭、文部參與官の祝辭が終へて盃が一廻りし座が一寸ざわついた處で中座し同じく夜會に出席した山本、林、清水、小松、池田の諸君と共に玄關へ出る。折もよし古谷教授が貴賓の二次會準備で觀水亭へ行くと云ふ自動車に同乘させて貰ふ。公園の入口迄出ると提灯行列が乘込んで來る。之れでは新參町は通れまいといふので片平町から木町へ大廻りして原町へ出ると又いけない。提灯行列こそ無いが見物人で一杯である。又迂廻して馬場町から海野町、松尾町を群衆を掻分け〳〵して進み厩裏の入口で車を棄てゝ喜與川へ馳せ參ずる。もう宴會は始まつてゐると思つたら我々に義理を立てゝ茶を飲んで待つて居て呉れた。來會者は十二名、記念式に參加した者では岩根君と佐藤君が來なかつた丈である。岩根君が萬障を差繰つて出席して呉れなかつたのは殘念であつた。早速中島君と共に飲物、食物の手配をする。ガールに電話をかけると公會堂へオールスターキャストで一人もないといふ。豫め約束して置けばよかつたと後悔しても間に合はない。野郎許りの會で時々現れる女中が紅一點といふ譯。それでも仲間の一人が學生時代に母校前の喜與川支店にゐた女である事を發見しせい〳〵氣分を出す。色氣は無くとも盃はよく廻る。そして昔話に花を咲かす。誰かゞ寫眞屋を呼べと云ふ。學校出入の寫眞屋を二、三軒掛けて見たが何れも留守だと云ふ。廿五周年祝賀は寫眞屋迄賣切れにする。又緣の遠い所を探して呼び寄せる。石井君が柄にもない。德利の並んだ前で寫しては子供の教育によくないと云ふ御詫宣に一同感心して床の間の前に神妙に並んで撮影して貰ふ。又元の座に居つて飲み始める。小松君からガールが一人都合がつくと云ふ吉報を齎す。斯くて漸く本當の宴會とならうとする頃既に紡織科の會に行かねばならない時間となつた。電話で聞合せるともう始まつてゐるらしい。一同に仔細を物語つて許して貰ひ名殘りを惜しみつゝ喜與川を立出で紡織科會に急いだ。後で聞けばガールは遂に來ず之の家を立出でゝからカフエーを荒して散會した由である。委せられた筆者が不行屆の爲めに結局何をしたか解らぬ樣な會になつてしまつて何とも申譯無い。今更あゝすればよかつたこうすればよかつたと悔いてゐる次第である。然し久振りに會つて飲めたのだから同期會の目的は充分達したのだと自慰してゐる。

之れに懲りず之を御緣に訪ねて來て戴き度いものである。

寫眞は既に全部發送した。寫眞代は三圓預かつて三枚一組一圓五十錢、燒増九枚九十錢、運賃が十人で二十錢掛つて差引四十錢之は筆者が預かつてゐる。寫眞はもう御手元に到着してゐる事と思ふ。

（香山記）

（寫眞は當夜の出席者で前列右より水城孝男、石井謙三、山本奈良三郎、池田正五郎、清水衞敏、長谷川正雄、後列右より小松忠一郎、香山清和、牧野弘、小山清、中島茂、林十郎の諸氏）

紡織科會の記

今度の母校二十五周年記念式に紡織方面卒業生の出席者は十七名である。大部分は工場勤務者である紡織同窓生が兎に角三十名もが一緒に會すると云ふ事はこんな時でもなければ出來ないことである。

だからこんな機會に紡織大會を開いてうんと飲んで祝はうではないかとは誰しも考へる事、即ち十月二十一日記念式當夜市内うな藤に於て實に景氣のよい紡織關係大祝宴が行はれたのである。

參會者は還來の卒業生

高田茂重郎　手塚雄一　森山二郎
小笠原振一　井上一郎　飯島貞雄
飯田四郎　小林良亘　伊藤友次郎
後藤政之　青木　喬　坂口　進
大塚富雄　山名享四郎　北澤琢郎
黒岩君雄　細井政吉

の諸氏に地元卒業生

野口新太郎　香山清和　小松忠一郎
三宅玉留　宮下丈夫　小林尚一
草野　弘　北野三郎　藤田四郎

の諸氏及之に懐しい昔の母校恩師である紡織科の諸先生方

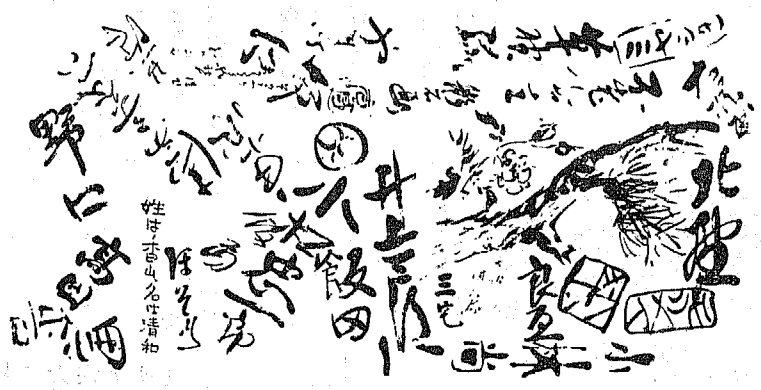
岡　德治郎　石倉新十郎　清水寛孝
目崎三郎　小林清丸

の諸氏を加へた總勢三十人。

此の中にはいかめしい舊恩師もゐるし或は何處かの工場長技師長もゐる事であらうがこうして一丸と集まれば何の遠慮も區別もあつたものでない。それそこ文字通り水入らずの會合である。

開會八時頃であつたか、會は全歡喜爆笑の裡に進行し始めこそテーブルを圍んでゐたが其の内にあちらこちらにグループを作つて或は懐舊談に話を咲かすものあり、或は現狀を吹きまくるもの、唄ふもの踊るもの等あり記念の爲めに寄せ書及撮影を行ひ散會したのは十一時頃であつた。

（野口記）



年賀廣告募集

例に依り本紙一月號に登載する年賀廣告を募集致します。年賀廣告は收入豫算の最も重要なる部分を占め之が減少は本紙の經營に少なからず脅威を與へるものであります。故に募集に就ては本紙で廣告する外代議員會の懇親會席上でお願ひするのを常として居りました。然るに本年は廿五周年祝賀式の爲め代議員會後の懇親會の催しなく遂にその機を逸してしまひました。之の點を御同情下さいまして冗費節約旁本紙援助の意味で何卒多數御申込あらん事を切望致します。

一、締切期日　十二月十五日迄
一月號は特に元旦に配達される樣にする爲め締切期日を右の如く早めます。年賀廣告以外の記事も同日迄に送附して下さい。

一、料　金　一人　金五十錢
特に指定なきは勤務先姓名丈を載せます。記載事項に註文ある向は原稿を送附して下さい。字數が餘り多いと割增金を御願ひするかも知れません。御申込と同時に料金を振替口座東京四三三四一番へ年賀廣告の旨御明記の上御拂込下さい。

十一月十五日　千曲時報編輯係

廿五周年記念學術講演會講演集募集

十月二十二日の母校創立廿五周年記念學術講演會は日本蠶絲學會及繊維工業學會の學術講演會として開催され當日の講演速記は兩學會に於て夫々會報に登載の筈なるも特に本會の便宜を計り本會員の希望者には別刷として實費配布可相成に付希望の向は今月末迄に御註文相成度候

（價格は未定なるも兩學會とも二十錢位、申込の際は學會別明示の事）

十一月十五日　記念講演會係

肅啓白露之候愈御快適に被爲渡奉賀候陳者小生儀久敷に亘り東京府在職中は不一方御厚誼に浴し鳴謝罷在候處今回長野縣に轉任を被命下記に勤務のこと相成候に就ては素より不敏の者に有之不相變御鞭撻仰度奉懇願候先は不取敢以紙上御挨拶旁御願迄如斯候　敬具

山本岩三郎

勤先　長野縣廳蠶絲課
自宅　長野市北石堂町一〇一八

會員動靜

（十一月五日現在、五十音順）

荒川一雄（紡九選）
荒井猛（絲一二）
宇野修二（紡四）
上田和男（紡六）
奥田達雄（蠶一）
唐澤正（紡一三）
木山新一（紡十四）
清家重明（蠶一五）
小池貞章（絲一七）
清水二郎（絲一）
清水洸（蠶二〇）
白川孝昌（蠶一九）
志田傳次郎（蠶三選）
高橋スズ（舊教一五）
鶴田定平（蠶一）
手塚雄一（絲六）
富岡泰（蠶六）
中島茂司（蠶八）
中山吉二（蠶三選）
西村盈保（紡一〇）
白健濟（蠶一七）
濱香三（紡三）
長谷川美祐喜（舊教一五）
林謹一（絲一八選）
平本常三郎（舊職）
細井政吉（紡一四）
松井正次（絲一三）
万石安太郎（蠶九）
宮堀俊雄（蠶一七）
三宅玉留（紡四）
宮城薫（蠶一九）
村山晋（絲九）
山下忠雄（蠶十六）
山本岩三郎（蠶七）
吉田太郎（蠶二〇）
依田實（絲二〇）

千葉と改姓（勤）姫路市、日出紡織株式會社姫路工場
（住）姫路市神田町一ノ六
（勤）長野市丸爲呉服店
（勤）大津市、滋賀縣農會（住）大津市境川町善野方
（勤）德島市外北島、東邦人造繊維株式會社
（勤）秋田市、秋田縣廳農務課　訂正
（勤）東京市淺草區藏前三丁目、厩橋稅務署
（住）東京市淺草區北清島町三四　市村方
（勤）和歌山縣海南市名高、内海紡織株式會社本社工場
（勤）ナシ
（住）大阪市西區本田町通リ二ノ四五　井上富士彌方
（勤）栃木縣下都賀郡小山町、昭榮製絲株式會社試驗所
（勤）ナシ
（住）横濱市中區大岡町二一三三　訂正
（勤）埴科郡屋代町、長野縣蠶業取締所屋代支所
（勤）沖繩縣那覇市外安里、片倉蠶種製造所
（勤）松本市、長野縣蠶業取締所松本支所
（勤）埼玉縣兒玉郡本庄町、昭榮製絲株式會社
（勤）盛岡市、岩手縣廳農務課
（住）盛岡市内加賀野一二
（勤）大阪市北區堂島濱通二丁目、東洋紡績株式會社人絹課
（住）西宮市今津字網引十二番地
昭和十年九月廿八日死亡
（勤）上高井郡須坂町、長野縣廳經濟部上高井出張所
（住）須坂町錦町一四二三　訂正
（勤）鹿兒島縣大島郡名瀬町、鹿兒島縣蠶業試驗場大島支場
（住）鹿兒島縣姶良郡蒲生町西浦
（勤）大阪市東成區鳴野町、天滿小森鐵工所
（住）大阪府三島郡高槻町芥川一里塚
（勤）中華民國江蘇省蘇州滸墅關公立女子蠶業學校製絲專修科
（勤）滿洲國新京七馬路、商標局調査科
（住）滿洲國新京八島通三二大連火災アパート
（勤）朝鮮水原、朝鮮總督府農事試驗場蠶絲部
（勤）京城府黄金町一ノ六三、三井物産内東洋製絲株式會社
（勤）名古屋市東區上飯田町、東洋紡績株式會社大曾根工場
（住）名古屋市東區矢田町一ノ一二
（勤）ナシ
（住）愛知縣寶飯郡御油町
（勤）神戸市海岸通五番大阪商船ビル、郷是製絲神戸營業所
（住）神戸市灘區高羽老松十五番地
（勤）秋田市、秋田縣廳農務課　訂正
（勤）南佐久郡野澤町、長野縣蠶業取締所野澤支所
（勤）前橋市岩神町　日本人造繊維株式會社
（勤）沖繩縣宮古支廳
（勤）大阪市北區中之島二ノ二五、江商株式會社
（勤）秋田市、秋田縣廳農務課　訂正
（勤）長野市、長野縣廳蠶絲課
（住）長野市北石堂町一〇一八
（勤）上伊那郡伊那町、長野縣蠶業取締所伊那支所
（勤）ナシ（住）小縣郡和村

（小松記）

編輯室より

▲九月號紙上で約束した通り本號は母校創立廿五周年祝賀式の模様を詳細に報告する事としたので寫眞も頁數も懷古號に劣らぬ大量となつた。懷古號はいくら頁數が多くても寄稿して貰ふのだから世話はいらなかつたが今回のは皆編輯子が執筆しなければならないので非常な骨折であつた。眞夜中迄炬燵の中で書綴る日が幾日續いた事か。それでも間に合はず平常より五日も印刷所へ送るのが遲れてしまつた。夜間寸暇の執筆で文章になつて居ない處もあるかも知れないが我慢して讀んで戴きたい。

▲廿五周年關係の記事は記錄として將來に殘す意味で成べく克明に報告する事にした。其爲めに色々な人の處へ毎日何回と無く聞き訊しに通つた。執筆する勞も多かつたがそれにも增して編輯子を酷使したものは之の尋ねて廻る仕事であつた。その上克明に報告すると云ふ事の爲め勢ひ內容は無味乾燥となり事務的に流れ唯讀む丈にはあらずもがなの部分も多くなつた事と思ふ。

▲生絲は何年來の高値である。米も當地は悪くない。その上天氣は連日空に一點の雲もない樣な文字通りの秋晴れであつた。然もその天氣は祝賀會が終へたら卽ち廿六日の慰勞會には曇り廿七日は雨となつたと云ふのだから祝賀式の爲めに註文して天氣になつた樣なものだ。我等は如何なる佳き日に生れたか。

▲今回の記念事業に對し上田市の援助は非常なもので市の催しか學校の催しか解らぬ位であつた。之の點は他の都市では見られぬ處で深き感謝を捧げねばならぬ。又來賓及同窓生諸氏が御多忙中をも省みず多數出席せられた事も各地當業者より參考品を多數出品せられた事も感謝の外は無い。最後に絲高、好天氣と豫期以上の好成績で祝賀式を終始せしめたる神の配劑にも感謝せねばならぬ。

▲廿五周年祝賀の餘波を受けた上田市の賑ひは非常なるものであつた。毎日町は黑山の樣な人出飲食店は滿員、商店も押すな〳〵の盛行であつた。その景氣は我々で云へば盆と正月が一緒に來たと云ふ處だが商人では祇園と惠比壽講が一緒に來たと云ふ處であらう。或る商人に會つたら「廿五周年祝賀が毎年あるといゝですが」と云ふた。それ程潤した事も多かつたらしい。市は廿五周年祝賀に對し多額の出費を敢てしたがそれに依り利する處も少なくなかつた譯である。

▲十一月の壁を開いた上田はスツカリ冬の粧ひとなつた。烏帽子、四阿、猫の諸山は紅葉が白雪に塗換へられた。名物の炬燵も大抵の家には据つたらしい。教室で講義をしてゐると裸になつた木を通して講堂の電氣時計の時間がハツキリ見える樣になつた。未だ學校ではストーブが入らないのでとても寒く先生も容易でないがノートを執る生徒は一入辛い事だらう。

投稿規定

一、內容は不問會員消息に關するものは特に歡迎
一、取捨は當方に一任せられたし。編輯の都合に依り全部又は一部來月廻しとなる事あり。
一、原稿は特に豫め申込無き限り返戻せざるものとす。
一、締切は毎月六日限、特に一月號は一日發行とする爲め二十日締切とす。
一、必ず原稿紙を使用、可及的一行十八字詰とする事。
一、原稿は開封として二錢切手（第四種百十瓦迄）を貼布して送附し通信文があつたら別に葉書等にて通知されるが得策である。
一、寄せ書の如き凸版や銅版にするものは一尺八寸×一尺三寸以內にする事。
一、原稿紙は御請求次第送附す。

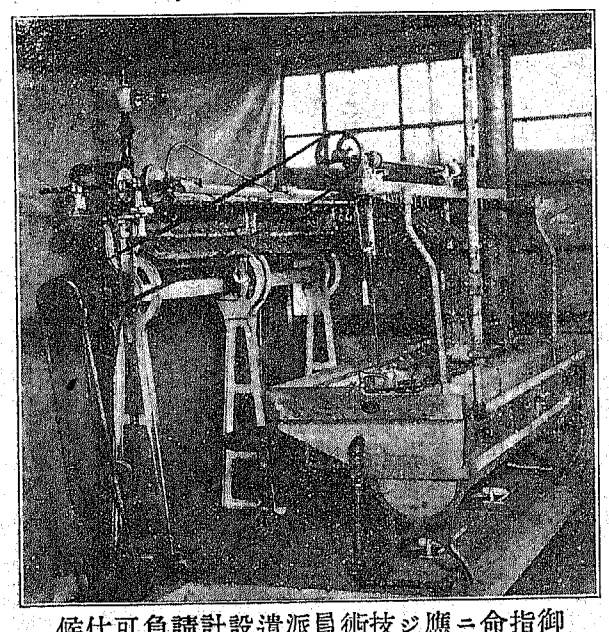
廣告規定

寸法／期間	一月	六月	一年
一頁	一三、〇〇円	六四、〇〇円	二六、〇〇円
1/2頁	七、五〇	四〇、〇〇	七〇、〇〇
1/4頁	四、五〇	三三、〇〇	四〇、〇〇
1/8頁	二、五〇	二三、〇〇	二四、〇〇
1/16頁	一、五〇	七、五〇	一四、〇〇
1/25頁	一、〇〇	五、〇〇	九、〇〇

但し本會員は七割引とす。

商械機絲製

——機絲繰製鐵——



候仕可負請計設遣派員術技ジ應ニ命指御

負請計設諸・商具器械機絲製

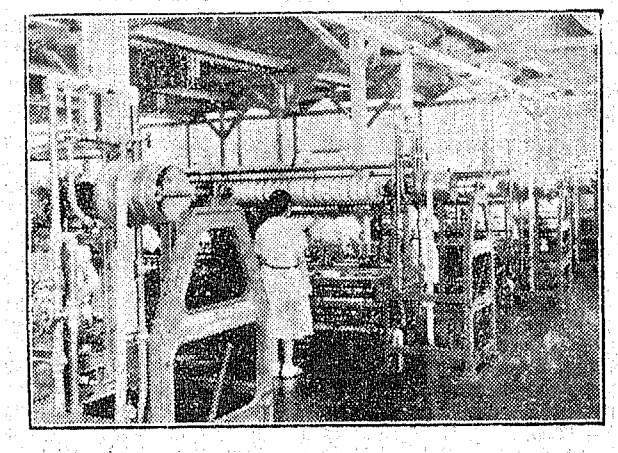
店支 島福・京東　**店商島宮** 會合 社資 ㈮

（號一十函書私）市田上縣野長
番〇八一　番六一一長持〔田上〕話電

式宗大

機絲繰條多

（リナ宗大ノ易貿出輸國我ハ絲生）



用兩繰沈沈半

機繭煮流對透滲氣蒸式宗大 許特賣專 案新用實

元賣販造製械機絲製諸式工群

所作製山平

地番五〇一町向市橋前縣馬群
番二四五七五替振　番五八一話電